

芝宮遺跡群

MINAMIKAMINAKAHARA

MINAMISHIMONAKAHARA

南上中原・南下中原遺跡

長野県佐久市長土呂南上中原・南下中原遺跡発掘調査報告書

1993.3

佐久市
佐久市教育委員会
佐久埋蔵文化財調査センター



南上中原・南下中原遺跡、上聖煥遺跡、下芝宮遺跡、上大林遺跡、下聖煥遺跡航空写真

(株式会社 協同測量社撮影)



第11号住居址出土白磁碗

例 言

1 本書は、佐久市土木課が行なう昭和63年度市道1-1号線道路改良工事事業に伴う、埋蔵文化財発掘調査の調査報告書である。

2 調査委託者 佐久市

3 調査受託者 佐久市教育委員会・佐久埋蔵文化財調査センター

4 発掘調査所在地籍

芝宮遺跡群 南上中原・南下中原遺跡 (N S M)

佐久市大字長土呂 752-1,755,757-1,759-1-2,760-1,761,764-1~5,

810-2,811-1-2,812-2-3-12-13

小田井 1-1-2

5 調査期間及び面積

発掘調査 昭和63年5月11日～9月9日

整理調査 平成5年1月7日～3月31日

面 積 7,000m²

- 6 本書の編集は三石が行い、執筆は第V章第2節を森泉が、その他については三石が行った。
ただし、第II章遺跡の環境 第1節佐久市長土呂付近の自然環境は、佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書第20集「南上中原・南下中原 上聖端遺跡発掘調査概報」より転載した。
- 7 本書及び南上中原・南下中原遺跡出土遺物等のすべての資料は、佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

本調査において、長土呂区長神津義久氏をはじめ、東城邦夫氏・土屋就一氏等地元の方々には発掘調査中数々のご協力及びご援助を頂き、また、報告書作成にあたっても、多くの方々よりご指導・ご助言を頂きました。記して感謝の意を表します。

本文目次

例言

第Ⅰ章 発掘調査の経緯	1
第1節 調査の経緯と経過	1
第2節 調査体制	2
第3節 調査日誌	3
第Ⅱ章 遺跡の環境	4
第1節 佐久市長土呂付近の自然環境	4
第2節 遺跡の歴史的環境	6
第Ⅲ章 基本層序	9
第Ⅳ章 遺構と遺物	12
第1節 壑穴住居址	12
1) 第1号住居址	12
2) 第2号住居址	14
3) 第3号住居址	16
4) 第4号住居址	21
5) 第5号住居址	24
6) 第6号住居址	27
7) 第7号住居址	33
8) 第8号住居址	36
9) 第9号住居址	38
10) 第10号住居址	41
11) 第11号住居址	44
第2節 壑穴遺構	49
1) 第1号壙穴遺構	49
2) 第2号壙穴遺構	53
3) 第3号壙穴遺構	55
第3節 挖立柱建物址	56
1) 第1号掘立柱建物址	56
2) 第2号掘立柱建物址	57
3) 第3号掘立柱建物址	58
第4節 土坑	60
第5節 溝状遺構・旧河川	64
1) 溝状遺構	64
2) 旧河川	69
第6節 ピット群	72
第7節 グリッド出土遺物	74
第V章 調査のまとめ	76
第1節 遺構	76
第2節 遺物	77
引用参考文献	

挿 図 目 次

第1図 南上中原・南下中原遺跡の位置	1	第34図 第10号住居址出土土器実測図	43
第2図 渋間山の形態と構造	5	第35図 第10号住居址出土石器実測図	43
第3図 黒面山東部の破壊によって生じた 塚原流域の流化した状態を示す図	5	第36図 第11号住居址実測図	45
第4図 周辺遺跡分布図	7	第37図 第11号住居址出土土器実測図	46
第5図 基本層序模式図	9	第38図 第11号住居址出土鉄製品実測図	48
第6図 南上中原・南下中原遺跡 発掘区設定図	10	第39図 第1号窓穴遺構実測図	49
第7図 南上中原・南下中原遺跡、上堅城遺跡マッピング図	11	第40図 第1号窓穴遺構出土土器実測図	50
第8図 第1号住居址実測図	12	第41図 第1号窓穴遺構出土鉄製品実測図	52
第9図 第1号住居址地盤構成材出土状況実測図	13	第42図 第2号窓穴遺構実測図	53
第10図 第1号住居址出土土器実測図	14	第43図 第2号窓穴遺構出土土器実測図	54
第11図 第2号住居址実測図	15	第44図 第3号窓穴遺構実測図	55
第12図 第2号住居址出土土器実測図	15	第45図 第3号窓穴遺構出土土器実測図	56
第13図 第3号住居址実測図	16	第46図 第1号掘立柱建物址実測図	56
第14図 第3号住居址遺物分布図	17	第47図 第2号掘立柱建物址実測図	57
第15図 第3号住居址出土土器実測図<1>	18	第48図 第3号掘立柱建物址実測図	58
第16図 第3号住居址出土土器実測図<2>	19	第49図 第1~4号土坑実測図	60
第17図 第4号住居址実測図	21	第50図 第5~11号土坑実測図	61
第18図 第4号住居址出土土器実測図	23	第51図 第12~16号土坑実測図	62
第19図 第4号住居址出土石器・鉄製品実測図	24	第52図 第1号溝状遺構実測図	64
第20図 第5号住居址実測図	25	第53図 第2~3号溝状遺構実測図	65
第21図 第5号住居址出土土器実測図	26	第54図 第5~6号溝状遺構実測図	65
第22図 第5号住居址出土石器・鉄製品実測図	27	第55図 第4号溝状遺構・旧河川1・2実測図	66
第23図 第6号住居址実測図	28	第56図 第4号溝状遺構出土土器実測図	68
第24図 第6号住居址カマド実測図	29	第57図 第4号溝状遺構出土鉄製品実測図	68
第25図 第6号住居址遺物分布図	30	第58図 旧河川1土層断面図	70
第26図 第6号住居址出土土器実測図	32	第59図 旧河川2土層断面図	71
第27図 第7号住居址実測図	34	第60図 旧河川1出土土器実測図	71
第28図 第7号住居址出土土器実測図	34	第61図 ピット群実測図<1>	72
第29図 第8号住居址実測図	36	第62図 ピット群実測図<2>	72
第30図 第8号住居址出土土器実測図	37	第63図 グリッド出土土器実測図	74
第31図 第9号住居址実測図	38	第64図 グリッド出土石器実測図	74
第32図 第9号住居址出土土器実測図	40	第65図 南上中原・南下中原遺跡	
第33図 第10号住居址実測図	42	平安時代後業の土器セト図	78
		第66図 南上中原・南下中原遺跡全体図	79

付 表 目 次

第1表 渋間火山を中心とした縦年	6	第11表 第9号住居址出土土器観察表	40
第2表 周辺遺跡一覽表	8	第12表 第10号住居址出土土器観察表	43
第3表 第1号住居址出土土器観察表	14	第13表 第11号住居址出土土器観察表<1>	47
第4表 第2号住居址出土土器観察表	15	第14表 第11号住居址出土土器観察表<2>	48
第5表 第3号住居址出土土器観察表	20	第15表 第1号窓穴遺構出土土器観察表	51
第6表 第4号住居址出土土器観察表	23	第16表 第2号窓穴遺構出土土器観察表	54
第7表 第5号住居址出土土器観察表	26	第17表 第3号窓穴遺構出土土器観察表	56
第8表 第6号住居址出土土器観察表	33	第18表 掘立柱建物址一覽表	59
第9表 第7号住居址出土土器観察表	35	第19表 土坑一覽表	63
第10表 第8号住居址出土土器観察表	37	第20表 第4号溝状遺構出土土器観察表	69

第21表	旧河川1出土土器観察表	72	第23表	グリッド出土土器観察表	75
第22表	ピット群一覧表	73			

写真図版目次

図版一	南上中原・南下中原遺跡付近航空写真	図版十六	1 第5号土坑
図版二	1 南上中原・南下中原遺跡、上塙端遺跡、 下芝宮遺跡航空写真		2 第6号土坑
			3 第7号土坑
図版三	1 南上中原・南下中原遺跡、上塙端遺跡航空写真		4 第8号土坑
	2 南上中原・南下中原遺跡航空写真		5 第9号土坑
図版四	1 第1地区全景		6 第10号土坑
	2 第2地区全景		7 第11号土坑
図版五	1 第1号住居址		8 第12号土坑
	2 第1号住居址灰化土出土状況	図版十七	1 第13号土坑
図版六	1 第2号住居址		2 第14号土坑
	2 第3号住居址		3 第15号土坑
図版七	1 第2号住居址カマド		4 第16号土坑
	2 第3号住居址カマド		5 ピット群
	3 第3号住居址カマド掘り方	図版十八	1 第1号住居址出土土器
	4 第3号住居址遺物出土状況		2~11 第3号住居址出土土器
	5 第4号住居址	図版十九	1~3 第3号住居址出土土器
図版八	1 第4号住居址カマド		4~5 第4号住居址出土土器
	2 第4号住居址遺物出土状況		6 第5号住居址出土土器
	3 第5号住居址		7~10 第6号住居址出土土器
	4 第5号住居址カマド	図版二十	1~2 第6号住居址出土土器
	5 第5号住居址遺物出土状況		3 第7号住居址出土土器
図版九	1 第6号住居址		4~5 第9号住居址出土土器
	2~3 第6号住居址カマド		6~7 第10号住居址出土土器
	4 第6号住居址カマド掘り方		8~11 第11号住居址出土土器
	5 第6号住居址掘り方	図版二十一	1 第1号窓穴遺構出土土器
図版十	1 第7号住居址		2 第2号窓穴遺構出土土器
	2 第8号住居址		3 第4号溝状塗壁出土土器
図版十一	1 第9号住居址		4 旧河川1出土土器
	2 第10号住居址		5~6 グリッド出土土器
図版十二	1 第9号住居址カマド		7 グリッド出土陶器
	2 第10号住居址カマド		8 グリッド出土墨書き器
	3 第10号住居址カマド掘り方	図版二十二	1 第4号住居址出土石器
	4 第10号住居址遺物出土状況		2 第5号住居址出土石器
	5 第11号住居址		3 第5号住居址出土鉄製品
図版十三	1 第1号窓穴遺構		4 第4号住居址出土鉄製品
	2 第2号窓穴遺構		5 第11号住居址出土鉄製品
	3 第3号窓穴遺構		6 第1号窓穴遺構出土鉄製品
図版十四	1 第1号獨立柱建物址		7 第4号溝状遺構出土鉄製品
	2 第2号獨立柱建物址		8 第10号住居址・グリッド出土石器
図版十五	1 第3号獨立柱建物址		
	2 第1号土坑		
	3 第2号土坑		
	4 第3号土坑		
	5 第4号土坑		

第Ⅰ章 発掘調査の経緯

第1節 調査の経緯と経過

南上中原・南下中原遺跡の存在する芝宮遺跡群は、佐久市大字長上呂・小田井地籍に所在し、浅間山に源を発する渕川の浸蝕による田切り地形の北側、標高720~760mを測る台地上に位置する。北方には昭和54・55・57年度に発掘調査の行われた芝宮遺跡があり、西方には昭和63年度に発掘調査の実施された下芝宮遺跡が存在する。また、この台地の南側には長土呂遺跡群が展開しており、昭和63年度に上聖端遺跡、昭和63年度・平成元年度に上大林遺跡、下聖端遺跡Ⅰ・Ⅱ、平成元年度に聖原遺跡Ⅱ、平成4年度に下聖端遺跡Ⅲの調査が実施され、さらに、平成元年度から平成4年度には聖原遺跡で約70,000m²におよぶ調査が実施されており、平成5年度以降も継続して行われる予定である。

今回、佐久市土木課が実施する市道1-1号線道路改良工事に伴い、昭和63年4月25日、現地にて佐久市土木課・佐久市教育委員会・佐久埋蔵文化財調査センターの三者で協議を行った。その結果、遺跡の破壊が余儀なくされる事態となり、緊急に記録保存の必要性が生じた。そこで佐久市教育委員会が佐久市より委託を受け、佐久市教育委員会からの委託を受けた佐久埋蔵文化財調査センターが発掘調査を実施する運びとなった。



第1図 南上中原・南下中原遺跡の位置 (1:50,000)

第2節 調査体制

昭和63年度

(事務局) 佐久埋蔵文化財調査センター

所長 西沢 正巳

庶務係長 畠山 俊彦

調査係主任 高村 博文

調査係 三石 宗一、木内 晶義、須藤 隆司、小山 岳夫、小林 真寿、
翠川 泰弘、竹原 学、助川 朋広、篠原 浩江(嘱託)

(調査団)

団長 黒岩 忠男(佐久考古学会副会長)

調査指導者 白倉 盛男(佐久考古学会副会長)

林 幸彦(佐久市教育委員会)

羽毛田卓也(佐久市教育委員会)

調査担当者 三石 宗一

調査補助者 木内 晶義

調査員 佐藤 敏(佐久考古学会員)

調査補助員 宮川百合子

協力者 五十嵐勝吉、樋沢三之助、関口 正、関口与志子、角田 とく、
樋田 眞枝、花里きしの、森泉 欽一、森泉源治郎、森泉 好治、
森泉富美子、柳沢もなみ、柳沢 典子

有沢 保晴、関 由美子、田島 和美、三浦 洋崇、道上 卓美

平成4年度(平成4年度に組織の改変を行い、以下の様な調査体制とした。)

教育長 大井 季夫

教育次長 奥原 秀雄

埋蔵文化財課長 上原 正秀

管理係長 桜井 牧子

埋蔵文化財係長 草間 芳行

埋蔵文化財係 木内 晶義、三石 宗一、須藤 隆司、小林 真寿、
羽毛田卓也

調査担当者 三石 宗一

調査主任 佐々木宗昭、森泉かよ子
調査員 並木ことみ、遠藤しづか、今井みさ子、上原 幸子、小林 幸子、
小林よしみ、成沢 富子、堀籠みさと、宮川百合子、柳沢豊志子、
井出 愛子、井出つねじ、大井 キセ、小林まさ子、篠崎 清一、
清水 六郎、関口 正、角田すづ子、角田トミエ、東城 友子、
徳田 代助、原 キミエ、清水佐知子、渡辺 倍男、市川 愛子、
市川チイ子、岩下 古代、岩下とも子、岩下 文子、工藤しづ子、
武田 千里、武田まつ子、堀込 成子

第3節 調査日誌

昭和63年

5月11日

テント設営・機材の搬入を行う。

5月16日～18日

調査区東側の低地内において、古代水田址の確認を目的として、テストピット(2×2 m)を4箇所設定し、掘り下げを行う。調査の結果、近現代の水田面の重なりが確認された。

5月17日～21日

調査区の西側を第1地区、東側を第2地区とし、重機により第1地区の表土削平を始め、並行してプラン確認作業を行う。

5月24日～7月8日

第1地区の遺構掘り下げ・実測作業・写真撮影等を行う。

7月11日～18日

第2地区的表土削平作業を重機により行い、並行してプラン確認作業、第1地区的実測作業・写真撮影を行う。

7月19日～8月20日

第1地区実測作業、第2地区遺構掘り下げ・実測・写真撮影等を行う。

9月5日・7日 調査区全体清掃を行う。

9月9日 航空写真撮影を行い、発掘調査を終了する。

平成5年

1月～3月

室内において報告書作成作業を行い、全調査を完了する。

第II章 遺跡の環境

第1節 佐久市長土呂付近の自然環境（地形と地質）

南上中原・南下中原遺跡は佐久市の最西北端の小諸市との境に位置している。この付近一帯は北方にそびえている浅間火山の噴出物によって地質構成されている地帯で、この地域環境を記載するには先ず浅間山の構成からはじめなければならない。

浅間山は群馬長野県境の上信越高原国立公園の最南端にある火山で日本の中においても珍しい代表的な活火山で現在も盛んに噴煙を上げていることで知られている。それに加えて研究史の長いこと、火山活動の記録が古くから残されていること、火山形態が各面から具備していることなどにもよりわが国東西交通の要路中仙道・信越線沿いにあり、活動している火山として時に大噴火をして周辺に災害を及ぼすこともあり、四季の風景の変化のすばらしさなどによって古来文学絵画の対象ともなり多くの作品も残されている。

浅間山は黒斑山・前掛山・中央釜山の三重式成層火山で標高2,560m、四方からの眺望の変化があり、しかも常に噴煙を上げ続けているので人目につき易いが、特に南方佐久市側から見渡す形態が実にすばらしい。

火山構造も含めて図示したものが第2図であるがコニーデ型の裾野と三重式噴火口寄生火山火口湖など火山の模型を見るようである。しかも噴煙は上空の偏西風によって東に傾くことが多いため大噴火による災害も南側には及ばないのが現状である。

しかし長い火山活動の歴史をたどって見ると南方佐久市側にも噴火の状況を語る噴出物溶岩火山灰火山砂礫の堆積層が多く残されている。浅間山は我が国の火山としては最も新しい若い火山で第1次黒斑火山の活動を開始したのが新生代第四紀洪積末期であるが黒斑火山最盛期には単式成層火山で標高2,800mを越える大型火山であった。その整然とした大火山は噴火口の東半分以上を破壊する大爆発によってその山体を失ってしまった。

その時の噴出溶岩熱水泥流の大部分が主として南方に流下して佐久市中佐都付近まで押出している。その堆積物は現在JR中佐都駅付近を中心として塚原・赤岩・平塚部落付近の田園地に散在し、松島湾に浮ぶ松島のように並んでいる泥流残丘である。基盤整備以前はその数100を越す大小残丘が浅間山頂方向から放射状に並んでおり地名の起源にもなっている。岩質の研究結果から黒斑岸壁に残っている岩石と同一であることが実証されている。

その破壊された黒斑火山の中心から再び活発な火山活動が再開されたのが前掛山に成長するわけであるが、その過程の長い期間における多量な噴出物である軽石流火砕流（熱火山灰砂・軽石溶岩流）と降下火山灰砂が少なくとも二回以上に亘って佐久市北半部浅間火山南麓に厚さ20~30m以上堆積した。

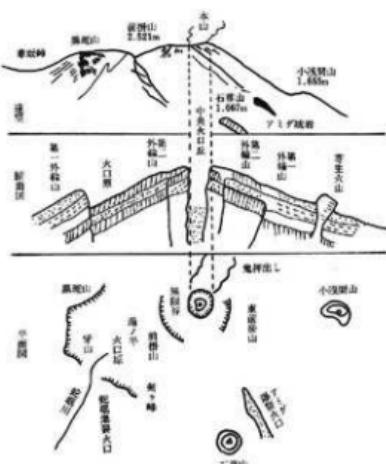
これは浅間山の南面追分原以南・佐久市中込原・西端は小諸市権古園西まで広範囲に亘って約223kmに分布し、佐久平北半部の生活地表面を形成して第一・第二軽石流と呼ばれている。（第一軽石流をP1層、第二軽石流をP2層と命名されている。）

この軽石流は南東面の湯川を埋め、一部に湖沼状態も作り、湿地水中堆積層も各地に作り、浅間火山南麓面の凹凸地形面を平坦化した。

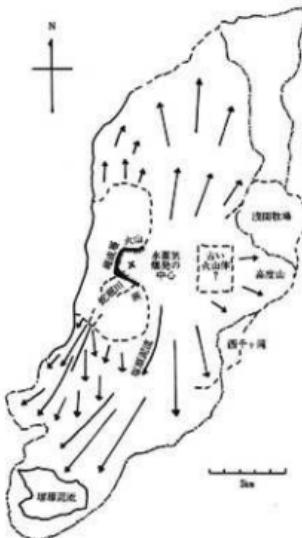
この大規模な第一軽石流P1と小規模な第二軽石流P2は南方中込原で尖滅している。

P1とP2の間隔があった事を物語る20cm内外の黒土層が各所の田切り断面で確認されている。

この軽石流P1・P2の地表面は火山灰砂・軽石の堆積層で火山から噴出したままのもので固結凝集が不充分であるために、水の浸蝕には頗る弱く豪雨洪水には地形面に大きな変化を受ける。従ってこの地帶には火山山麓特有な地形“田切り”が多く見られる。浅間山麓標高1,000m内外に分布する湧水（湧玉・湧



第2図 浅間山の形態と構造（白倉 原図）



第3図 黒斑山東部の破壊によって生じた堆積泥流の流下した状態を示す図（荒牧重雄著「浅間山の地質」による）

り・白糸・千ヶ瀧)火口瀬蛇掘川などの浸蝕作用がこれにあたるわけである。湯川の谷も田切りの最大なものを見ることが出来るが浅間山麓から佐久平にかけて田切りの深い谷はその数大小合わせて、50を越えている。田切りは山麓湧水地下水の流下流路ともなっており、弥生時代以来この周辺の標高750m以下の稻田耕作をさえてきたとも考えられ、田切りの分布と遺跡分布・古い集落分布には深い関係が見られるようである。

南上中原・南下中原遺跡はこの田切り密集地帯の中心部にある。溝りの田切りの谷幅は約100m、北西方向小諸市境の大田切りは谷幅150mを越し、谷底に御代田町からの湧玉用水が流れおり何れも谷底には古い水田が拓かれており、下流300m付近からは肥沃な中佐都美田地域に続いている。

長土呂部落の地名の起源もこの低湿地に基づくと言われている。

(白倉盛男)

(参考文献)

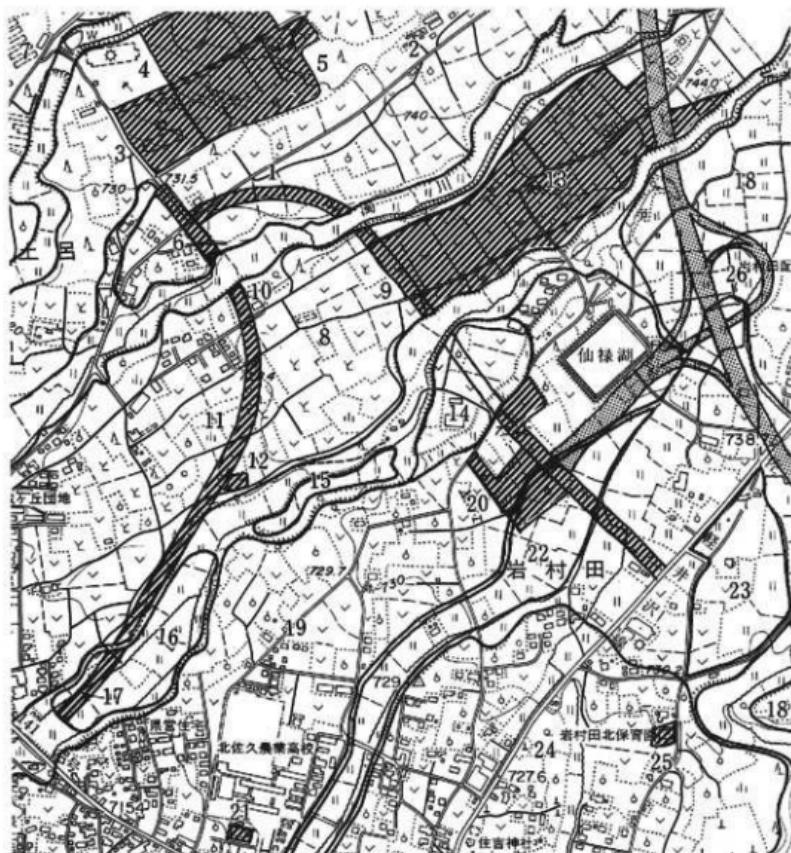
- 1 白倉盛男 1971 浅間山と火山博物館 小諸市立火山博物館
- 2 荒牧重雄 1968 浅間火山の地質 地学団体研究会

第2節 遺跡の歴史的環境

今回発掘調査を行った南上中原・南下中原遺跡は、佐久市の北部に展開する芝宮遺跡群の南西部に位置し、標高は730m付近を測る。この地域は、御代田方面から南西にのびる田切り地形が非常に発達しており、この田切りに挟まれた台地上には、北方に近津遺跡群・周防畠遺跡群、南方に長土呂遺跡群・栗毛坂遺跡群・枇杷坂遺跡群・岩村田遺跡群などが展開しており、佐久市でも

第1表 浅間山を中心とした編年
(荒牧重雄著「浅間火山の地質」による。一部加除)

K-Ar 年代 °C 年代 (YBP)	文書記録	編年
{ 364±60 433±70 }	1783 A.D. (天文3年)	8月5日 8月4日 8月8日
870±60° 860±100° 1,500±90°	1783 A.D. (?) (弘宝4年)	B-熱下スコリア・粗 石上部溶岩記述 →最分大噴出 →B-熱下スコリア・粗 石下部 C-熱下粗石 D-熱下粗石 →古流火標高 E-熱下粗石
4,500±100°		
{ 18,450±350 11,200±600 }	(北国東ヨーム) (板根真也粗石) (TP)	木山大 木山大粗石後→P 細粒淡下粗石 土壤 熱下粗石後→P 巨樹堆世成→小圓柱粗石→白系淡下粗石 (木根真也粗石) 津下粗石→上 層 下 (BP)?
1.1×10⁷		高森・鶴の尾 三方ヶ原大山
2.05~3.14×10⁷ (Omm)		浅間山 高麗山支曲巻頭 →春日 伊豆
(OZUMA et al. 1960)		



第4図 周辺遺跡分布図 (1:10000)

有数な遺跡群が密集している地域である。

今回調査を行った芝宮遺跡群付近は、昭和61年度から長野県埋蔵文化財センターによって行われている上信越自動車道関係の発掘調査をはじめとして、国道141号バイパスなどの道路整備事業、佐久流通業務団地造成事業、区画整理事業、その他民間開発等に伴う大規模な発掘調査が継続して行われている地域である。

本遺跡群内の発掘調査を概観すると、昭和54・55・57年度に芝宮遺跡第一次・第二次・第三次の発掘調査が工場団地の造成に伴って実施され、溝状遺構・土坑等が検出されている。昭和62

第2表 周辺遺跡一覧表

No.	佐分名	遺跡名	所在地	立地	時代					備考
					現	古	新	平	中	
1		南上中原・南下中原遺跡	長土呂字南上中原・南下中原	台地		○	○	○	○	本調査
2	8	芝宮遺跡群	長土呂字北上中原・北中中原	谷	○	○	○	○	○	
3	8-1	芝宮遺跡第一次	長土呂字北下中原	谷	○	○	○	○	○	昭和54年度調査
4	8-2	芝宮遺跡第二次	長土呂字北中中原	谷	○	○	○	○	○	昭和55年度調査
5	8-3	芝宮遺跡第三次	長土呂字北中中原	谷	○	○	○	○	○	昭和57年度調査
6		下芝宮遺跡I~IV	長土呂字下芝宮・南下中原	谷		○	○	○	○	昭和62~63年、平成2年度調査
7	7	周防焼造跡群	長土呂字周防堀・上北原他	谷	○	○	○	○	○	
8	9	長土呂遺跡群	長土呂字長土呂脇・羅石他	谷	○	○	○	○	○	
9		上聖端遺跡	長土呂字上聖端	谷		○	○	○	○	昭和63年度調査
10		上大林遺跡	長土呂字上大林・下大林	谷		○	○	○	○	昭和63年度調査
11		下聖端遺跡I・II	長土呂字下聖端・南聖原	谷	○	○	○	○	○	昭和63年、平成元年度調査
12		下聖端遺跡田	長土呂字下聖端	谷		○				平成4年度調査
13		聖原遺跡	長土呂字上聖端・新誠他	谷		○	○	○		
14	541	曾根新城跡	岩村田字下穴虫	谷					○	平成元年~4年度調査
15	45	新誠遺跡	岩村田字新誠	低地	○	○	○	○		
16	38	下蟹沢遺跡	長土呂字下蟹沢・中蟹沢	谷	○	○	○	○		
17		下蟹沢遺跡	長土呂字下蟹沢・中蟹沢	谷	○	○	○	○		
18	10	掘毛沢遺跡群	岩村田字東赤岸・赤岸原他	台地	○	○	○	○		
19	41	枇杷根遺跡群	岩村田字枇杷坂・久保田難船	谷	○	○	○	○		
20		上久保田向原I~V	岩村田字上久保田向	谷		○	○	○	○	平成元年~4年度調査
21	41-1	堀越坂遺跡	岩村田字堀越坂	谷			○	○		昭和60年度調査
22	42	中久保田遺跡	岩村田字中久保田・下久保田	谷	○	○	○	○		
23	43	西赤岸遺跡	岩村田字西赤岸他	谷	○	○	○	○		
24	52	岩村田遺跡群	岩村田字六供後・六供他	谷	○	○	○	○	○	
25	52-1	六供後遺跡	岩村田字六供後	谷	○				○	昭和55年度調査
26										昭和61年度~平成4年度 岐阜県埋蔵文化財センターにより発掘調査

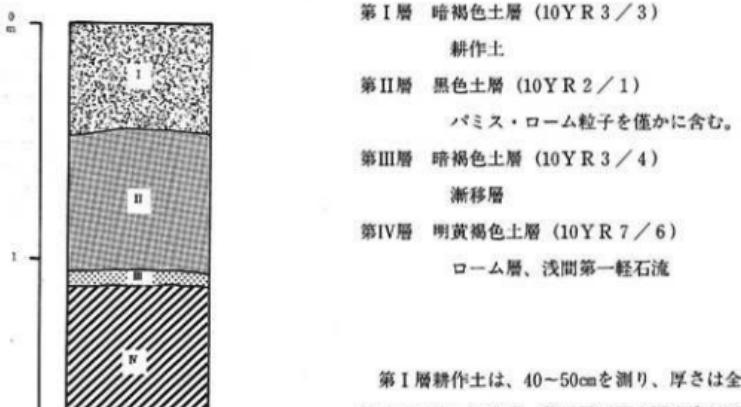
年度からは国道141号バイパス関係の発掘調査が開始された。本遺跡の西側に隣接する下芝宮遺跡I・II・III・IVの調査が昭和62・63年度、平成2年度に実施され、古墳時代中期から平安時代の堅穴住居址9棟、掘立柱建物址6棟などが検出されている。本遺跡群の南に展開する長土呂遺跡群においては、国道141号バイパスの延長として、昭和63年度・平成元年度に上大林遺跡、下聖端遺跡I・IIの調査が行われ、弥生時代後期から平安時代の堅穴住居址60棟、掘立柱建物址18棟等が検出された。また、当遺跡の対岸に位置する上聖端遺跡、さらに上聖端遺跡から東方に広がる聖原遺跡は、昭和63年度から平成4年度まで調査が実施され、上聖端遺跡・聖原遺跡で、堅穴住居址約830棟、掘立柱建物址約700棟にのぼる構造が検出されている。聖原遺跡については、平成5年度以降も調査が継続される予定であり、最終的な遺構数は堅穴住居址950棟、掘立柱建物址800棟前後になると予想される。

当遺跡の存在する長土呂地区付近は、平成5年3月の上信越自動車道の開通、また北陸新幹線の開通に伴い、今後さらに多くの開発事業が行われることは確実であり、発掘調査の増加が予想される地域である。

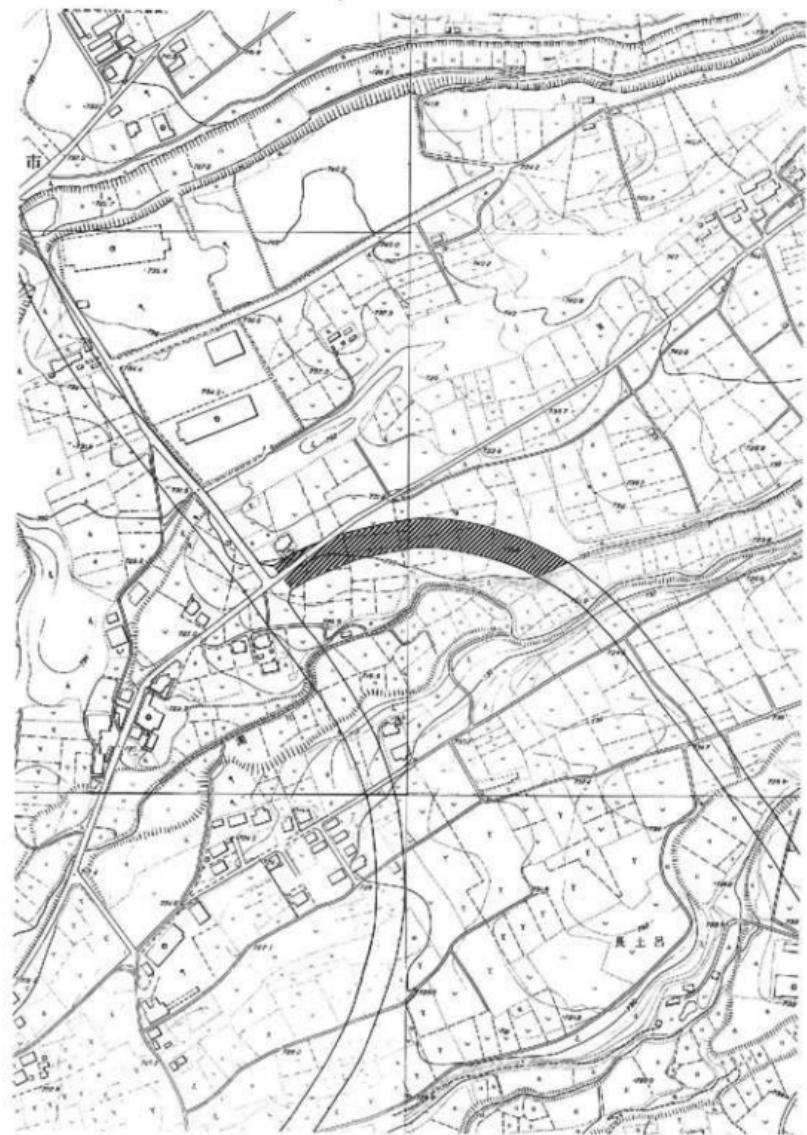
第III章 基本層序

芝宮遺跡群は、佐久市の北部、浅間山山麓末端部地域に位置し、標高は720~760m前後を測り、南西に向かって緩やかに傾斜する。南上中原・南下中原遺跡は、芝宮遺跡群の南西部に位置し、標高は730m付近を測る。また、南側の田切りの幅は約50m、比高差は約10mを測る。

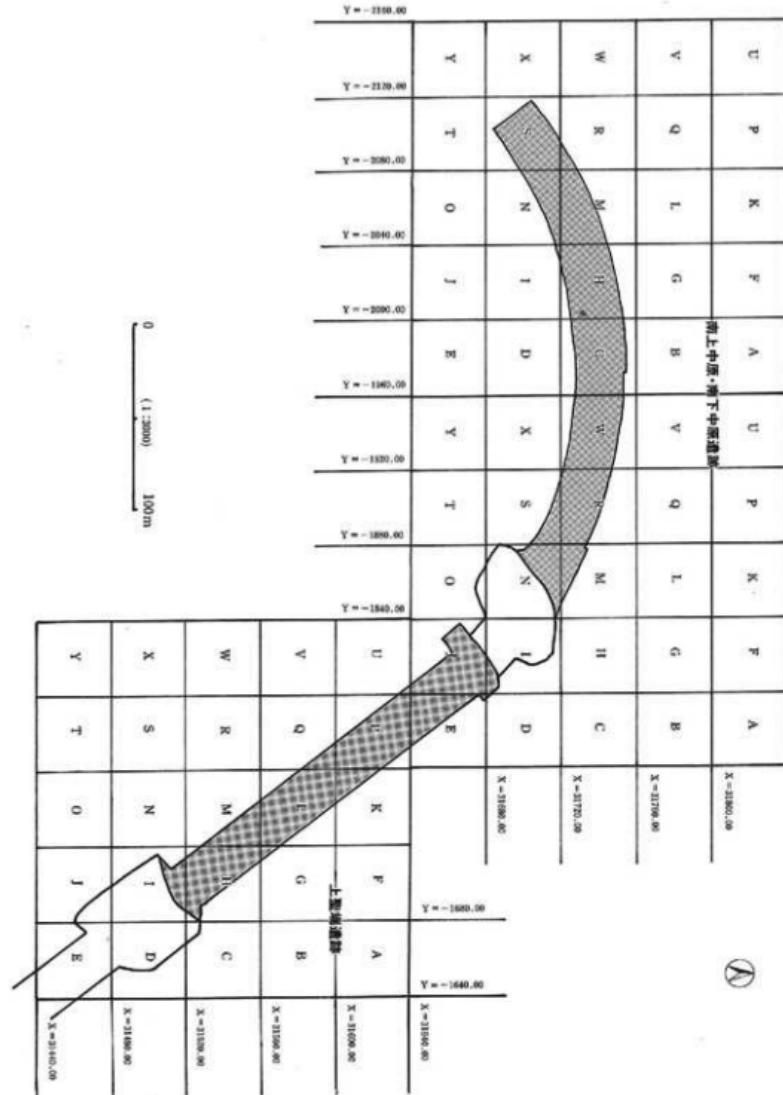
本遺跡における基本土層は、耕作が直接第IV層明黄褐色ローム層まで達している箇所が多く、大半が第I層耕作土直下が第IV層明黄褐色ローム層であり、その間に僅かに両層の漸移層が存在する。しかし、調査区中央付近北側に第II層黒色土が約50cm程堆積する深い谷部がある。したがつて、本遺跡の造構検出面は、大半が第III・IV層であり、部分的に第II層である。



今回調査を行った造構の大半は、第IV層上面において検出されたが、第4号講状造構の一部は第II層上面で検出され、第IV層まで達する。



第6図 南上中原・南下中原遺跡発掘区設定図（1:5000）



第7図 南上中原・南下中原遺跡、上聖端遺跡グリッド設定図

第IV章 遺構と遺物

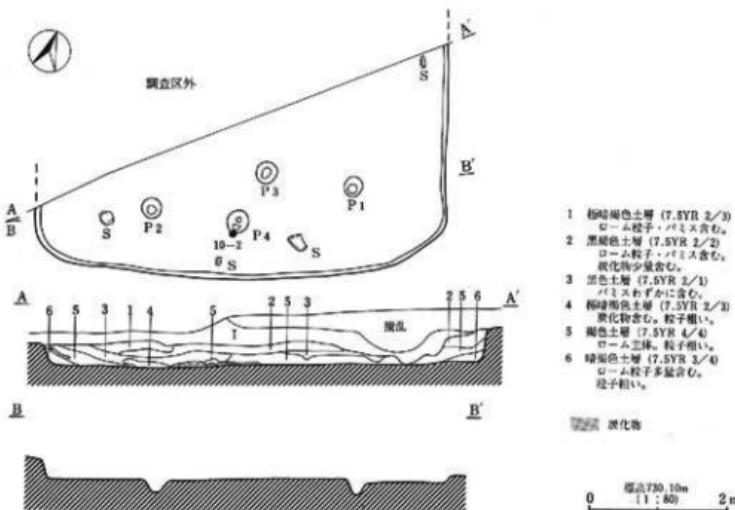
第1節 竪穴住居址

1) 第1号住居址

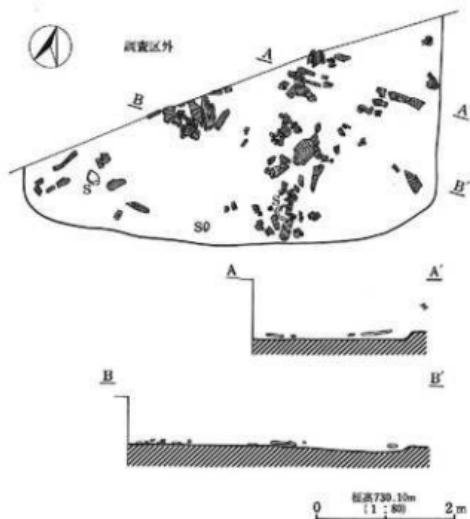
遺構（第8・9図、図版五）

本住居址は、調査区西側III S う・えー4・5グリッド内に位置し、全体層序第IV層上面において検出された。他遺構との重複関係はないものの、北側大半が調査区外であり、南壁付近が検出されたのみであるため、南壁長558cmを計測し得るのみで、平面形態及び規模は不明である。

覆土は六層に分割され、自然地盤の状況を示している。第1層は極暗褐色土層で、上面にわずかに認められるのみである。第2層は上面に広く堆積する黒褐色土層で、炭化物を少量含む。第3層は黒色土層、第4層は極暗褐色土層である。第5層はロームを主体とする褐色土層で、床面



第8図 第1号住居址実測図



第9図 第1号住居址炭化材出土状況実測図

のはば全面に堆積する。第6層はローム粒子を多量に含む暗褐色土層で、東壁下及び西壁下における第一次堆積土である。

確認面からの壁高は、東壁で4~16cm、南壁で2~32cm、西壁で30~32cmを測る。床面からの立ち上がりは急傾斜で、壁体は比較的平滑で堅固な状態である。壁溝は検出されなかった。

床面は、地山の黄褐色ローム層を利用して構築されており、平坦で比較的堅固な状態である。また、床面のはば全面より多量の炭化材が検出されており、焼失住居と考えられる。

ピットは4個検出された。そのうちP1・P2が南側に配される主柱穴と考えられ、288cmの距離を有する。P1は30×26cm、P2は30×28cmの円形を呈し、深さは各々26cm・15cmを測る。覆土は暗褐色土層とローム粒子を多量に含む褐色土層の二層に分割された。P3は34×28cmの梢円形で深さ25cm、P4は径32cmの円形で深さ23cmを測るが、用途は不明である。

カマドは前述したように、北側の大半が調査区外であるため検出されなかった。

遺物の出土状況は、覆土中より極めて少量の土器が出土したのみである。

遺物(第10図、図版十八)

本住居址からは、土器が極く少量出土したのみであり、そのうち2点を図示した。

10-1・2とも甕である。10-1は口辺部が大きく外反し、底部は丸底となり、口辺部と底部の境に明瞭な外縁を有する。内面は黒色処理され、外面は、口辺部にヨコナデの後ヘラミガキ、

底部にヘラケズリが行われるが、剝離・摩滅が著しい。10-2は1と同様に口辺部が大きく外反し、丸底になると思われるが、1に比して若干深くなり、外縁も不明瞭になるものと思われる。

また、10-1と同様に外縁を有するが、内面に黒色処理されない杯の小片がある。この他、厚手でヘラミガキの施される甕の小片がある。

以上、出土遺物は少量であるが、本住居址より出土した杯がいずれも口辺部と底部の境に外縁を有するものであり、古墳時代後期の様相を示すものであるため、これをもって本住居址の所産期としたい。



第10図 第1号住居址出土土器実測図

第3表 第1号住居址出土土器観察表

番号	器種	法無	成形及び器形の特徴	調査	備考
10-1	土器 杯	(15.4) ● (4.9)	口辺部外反し、口辺部と底部の境に明顯な破有する。 底部丸底。	内) 黒色処理。 外) 口辺部ヨコナデの後、ヘラミガキ。 底部ヘラケズリの後、ヘラミガキ。 剝離・摩滅著しい。	円転東張。 胎土 白色粒子含む。 色調 7.5Y R 7/4 (にぶい褐色)
10-2	土器 杯	— (4.0) —	口辺部外反する。	内) 黒色処理。 外) 口辺部ヨコナデの後、粗いヘラミガキ。	破片実測。 胎土 白色粒子含む。 色調 7.5Y R 7/4 (にぶい褐色)

2) 第2号住居址

造構(第11図、図版六・七)

本住居址は、調査区西側III Nけ・こ-2・3グリッド内に位置し、全体層序第IV層上面において検出された。第4号溝状造構・旧河川1と重複関係にあり、第4号溝状造構に北壁西側を、旧河川1に南側大半を破壊される。したがって、北側部分が検出されたのみであるため、平面形態及び規模は不明であるが、東西長は約480cmを測る。

覆土は、黒褐色土層一層からなる。

確認面からの壁高は、北壁で6~13cm、東壁で5~11cm、西壁で5~9cmを測る。壁溝は検出されなかった。

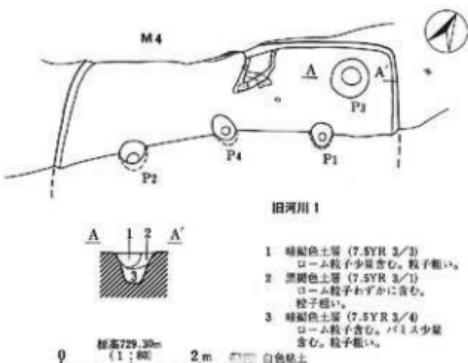
床面は、地山の黄褐色ローム層をそのまま利用して構築され、平坦で比較的堅固な状態である。

ピットは4個検出された。主柱穴はP1・P'2と考えられるが、いずれも南側を旧河川1により破壊される。規模は推定で径40cm前後の円形を呈すると考えられ、深さは各々18cm・16cmを測る。

P3はカマドの東側、北東コーナー下に位置し、貯蔵穴と考えられ、 $56 \times 54\text{cm}$ の円形を呈し、深さは46cmを測る。覆土は三層に分割された。P4はP1・P2間に位置し、18cmの深度を有する。

カマドは北壁中央に位置するが、天井部・袖部は既に破壊されており、残存状態は極めて不良である。壁直下に床面より約10-15cm前後高いテラス状の張り出しを有し、白色粘土の分布が見られる。

遺物の出土状況は、カマド内より極く少量の土師器・須恵器が出土したのみである。

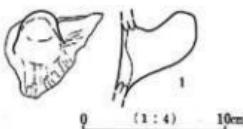


第11図 第2号住居址実測図

遺物（第12図）

本住居址からは、土師器・須恵器が出土している。土師器の器種には甕・壺・高台付壺・瓶があり、須恵器には甕・壺がある。そのうち土師器高台付壺、須恵器は混入品であり、土師器1点が図示し得たのみである。

12-1は瓶の把手部分で、胴部に貼り付けられた後、ヘラミガキが施される。



第12図 第2号住居址出土土器実測図

第4表 第2号住居址出土土器観察表

件 番 号	器 種	法 量	成形及び器形の特徴	調 整	備 考
12-1	土師器 瓶	— (6.1) —		内)ヘラミガキ。 外)把手貼り付け後、ヘラミガキ。	破片実測。 胎土：白色粒子少量含む。 色調：10Y R 5/6 (明褐色)

以上、出土遺物および旧河川1との重複関係から、本住居址は古墳時代後期と考えられる。

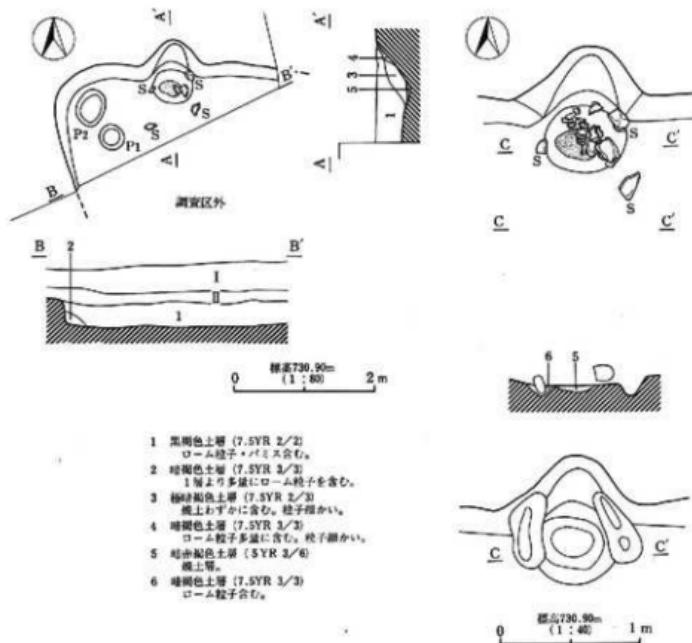
3) 第3号住居址

遺構（第13・14図、図版六・七）

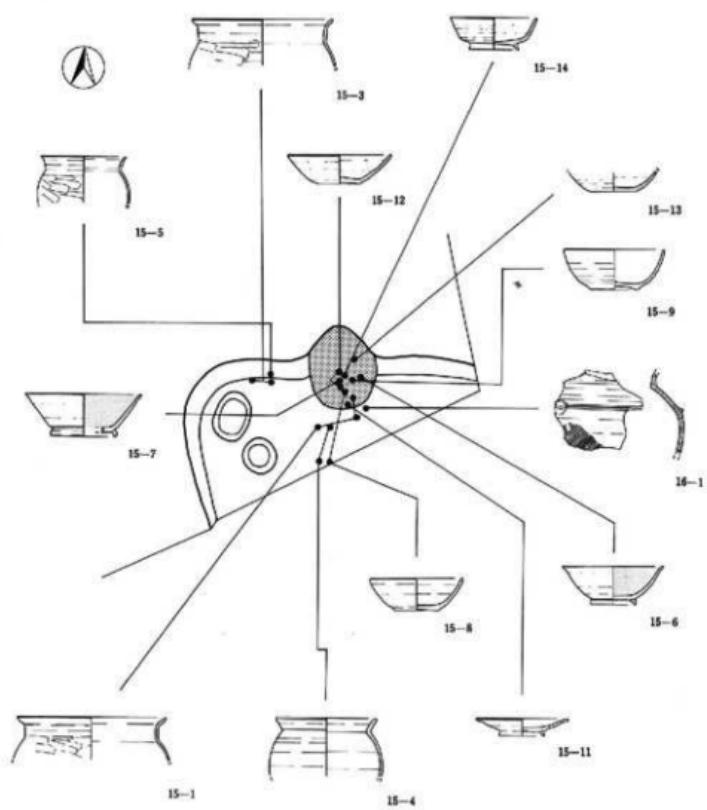
本住居址は、調査区西側III Mき・く-7・8グリッド内に位置し、全体層序第IV層上面において検出された。他遺構との重複関係はないものの、南東側大半が調査区外であり、北壁及び西壁の一部が検出されたのみである。したがって、平面形態及び規模は全く不明である。

覆土は四層に分割された。第1層はローム粒子・バミスを含む黒褐色土層で、本住居址覆土の主体を占めるものである。第2層は第1層より多量にローム粒子を含む暗褐色土層で、西壁下にわずかに認められるのみである。第3層は焼土を含む極暗褐色土層、第4層はローム粒子を多量に含む暗褐色土層で、第3・4層ともカマド内に見られるものである。

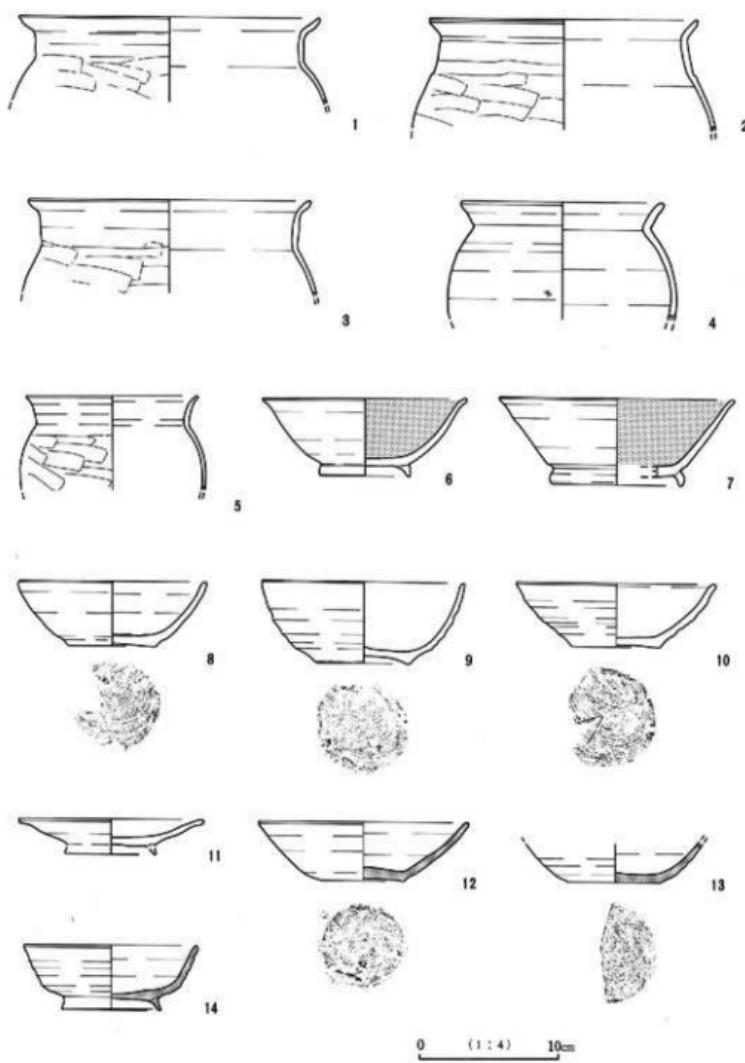
確認面からの壁高は、北壁で33~40cm、西壁で31~40cmを測り、床面から比較的急傾斜で立ち上がる。壁体は地山の黄褐色ローム層によって構築され、平滑で堅固な状態である。壁溝は検出



第13図 第3号住居址実測図



第14図 第3号住居址遺物分布図 (1:60・1:8)



第15図 第3号住居址出土土器実測図(1)

されなかった。

床面は、地山の黄褐色ローム層を利用して構築されており、平坦で堅固な状態である。

ピットは2個検出された。P1は北西隅に配される主柱穴と考えられ、径36cmの円形を呈し、深さは14cmと浅い。P2は北西コーナー下に位置し、54×42cmの南北にやや長い椭円形を呈しており、21cmの深度を有する。

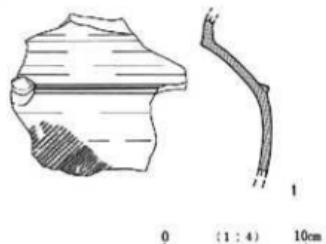
カマドは北壁中央西寄りに位置すると考えられる。煙道は整体を幅100cm、長さ40cmの半円状に掘り込み、火床部は壁下の床面を44×35cmの椭円形に掘り込んで設けられる。袖部は火床部の両側に約55×20cmの長椭円形を呈し、深さ10~15cmの掘り込みがみられ、袖石を埋設して形成されたと考えられるが、左袖先端の袖石が残存しているのみである。残存する袖石は長さ12cmを測り、火床部から約7cm露出し、外側に傾斜した状態で検出された。この他、カマド内及び周辺に礫が散在しているが、カマドの構築材に用いられたものと考えられる。

遺物の出土状況は、カマド内に集中する傾向が認められる。15-6・7・9・11・12・13・14はいずれもカマド内からの出土である。

遺物（第15・16図、図版十八・十九）

本住居址からは、土器類・須恵器が出土している。土器類の器種には甕・壺・高台付壺・皿があり、須恵器の器種には甕・壺・高台付壺・四耳壺がある。そのうち、土器11点、須恵器4点を図示した。

15-1~3は、所謂「武藏甕」で、いずれも口辺部は「コ」の字状を呈する。調整は、口辺部は内外面ともヨコナデ、胴部は外面にヘラケズリ、内面にヘラナデが施される。15-4・5は、15-1~3に比べ小型の甕である。15-4は、ロクロ成形によるもので、「く」の字状に短かく開く口辺部を持ち、胴部は球形を呈するものと思われ、中位に最大径を有する。15-5は、直線的に開く口辺部を持つ、薄手の甕である。調整は、15-1~3と同様に、口辺部にヨコナデ、胴部にヘラケズリが施される。15-6・7は、ロクロ成形による土器の高台付壺で、内面は黒色処理され、底部は回転糸切りの後、高台が貼り付けされる。土器の壺には15-8~10の3点がある。いずれもロクロ成形によるものであるが、内面にヘラミガキが施されるもの（15-9）と施されないもの（15-8・10）がある。ロクロからの切り離しは糸切りであり、未調整である。15-11は土器の皿で、体部は大きく直線的に開き、底部は糸切りの後、高台が貼り付けされる。15-12・13は須恵器の壺で、ロクロからの切り離しは糸切りであり、未調



第16図 第3号住居址出土土器実測図（2）

第5表 第3号住居址出土土器観察表

序 番 号	器 種	法 量	成形及び器形の特徴	調 整	備 考
15-1	土面器 甕	(21.4) (6.0) —	口辺部「コ」の字状を呈する。	内)口辺部ヨコナデ。 肩部ナデ。 外)口辺部ヨコナデ。 肩部ヘラケズリ。	回転実測、口縁部1/3残存。 色調 7.5 Y R 5/6 (明褐色)
15-2	土面器 甕	(19.0) (7.8) —	口辺部「コ」の字状を呈する。	内)口辺部ヨコナデ。 肩部ナデ。 外)口辺部ヨコナデ。 肩部ヘラケズリ。	回転実測、口縁部1/4残存。 色調 5 Y R 5/4 (にじい赤褐色)
15-3	土面器 甕	(20.0) (6.6) —	口辺部「コ」の字状を呈する。	内)口辺部ヨコナデ。 肩部ナデ。 外)口辺部ヨコナデ。 肩部ヘラケズリ。	回転実測、口縁部1/4残存。 色調 5 Y R 5/4 (にじい赤褐色)
15-4	土面器 甕	(14.2) (8.4) —	口辺部「く」の字状に僅かく開く。 肩部は球形態を呈し、中位に最大径を有する(16.4cm)。	内外面 ロクロヨコナデ。	回転実測、口縁部1/4残存。 色調 5 Y R 6/4 (にじい橙色)
15-5	土面器 甕	(12.0) (6.7) —	口辺部直線的に外傾する。	内)口辺部ヨコナデ。 肩部ナデ。 外)口辺部ヨコナデ。 肩部ヘラケズリ。	回転実測、口縁部1/4残存。 色調 7.5 Y R 6/4 (にじい桜色)
15-6	土面器 高台付 甕	(14.4) 5.5 (6.2)	体部内湾気味に開き、端部で僅かに外反する。 底部回転糸切りの後、高台貼り付け。	内)黒色処理。 外)ロクロヨコナデ	回転実測。 色調 5 Y R 6/4 (にじい桜色)
15-7	土面器 高台付 甕	(16.8) 6.2 (9.0)	体部直線的に開き、端部で僅かに外反する。 貼り付け高台。	内)黒色処理。 外)ロクロヨコナデ	回転実測。 胎土 白色粒子・石粉含む。 色調 7.5 Y R 6/6 (橙色)
15-8	土面器 甕	(13.0) 4.6 6.2	体部内湾気味に開く。 底部回転糸切り	内外面ロクロヨコナデ。	回転実測。 色調 5 Y R 5/4 (にじい赤褐色)
15-9	土面器 甕	(14.4) 5.8 6.6	体部内湾して開く。 底部回転糸切り。	内)ロクロヨコナデの後、ヘラミガキ。 外)ロクロヨコナデ。	回転実測。 色調 5 Y R 6/4 (にじい橙色)
15-10	土面器 甕	(14.0) 4.5 (6.1)	体部内湾気味に開き、端部で僅かに外反する。 底部回転糸切り。	内外面 ロクロヨコナデ。	回転実測。 色調 10 Y R 7/3 (にじい黄橙色)
15-11	土面器 皿	(13.0) (1.9) —	体部直線的に大きく開く。 底部回転糸切りの後、高台貼り付け。	内)ヘラミガキ。 外)ロクロヨコナデ。	回転実測、口縁部1/3残存。 色調 5 Y R 6/4 (にじい橙色)
15-12	須恵器 甕	14.8 4.2 5.9	体部直線的に開く。 底部回転糸切り。	内外面 ロクロヨコナデ。	完全実測。 胎土 2mm以下の石粒多量含む。 色調 5 Y 5/1 (灰色)
15-13	須恵器 甕	— (2.7) (6.6)	底部回転糸切り。	内外面 ロクロヨコナデ。	回転実測。 色調 5 Y 6/1 (灰色)
15-14	須恵器 高台付 甕	(12.2) 4.6 (7.0)	体部直線的に開く。 底部回転糸切りの後、高台貼り付け。	内外面 ロクロヨコナデ。	回転実測、1/2残存。 色調 7.5 Y 5/1 (灰色)
16-1	須恵器 四耳甕	— (11.5)	肩部に断面三角形の突巻貼り付け	内)ロクロヨコナデ。 外)ロクロヨコナデの後、印き。	破片実測。 色調 5 Y 5/1 (灰色)

整である。15-14は須恵器の高台付坏で、体部は直線的に開き、底部は回転糸切りの後、高台が貼り付けされる。

この他須恵器には、突帶付四耳壺（16-1）がある。肩部に貼り付けされた突帶の断面形は三角形で、耳への穿孔は行われていない。また、小片のため図示し得なかったが、須恵器壺の胴部、内面に黒色処理された土師器壺等が出土しているが、全体的には土師器の占める割合が高い。

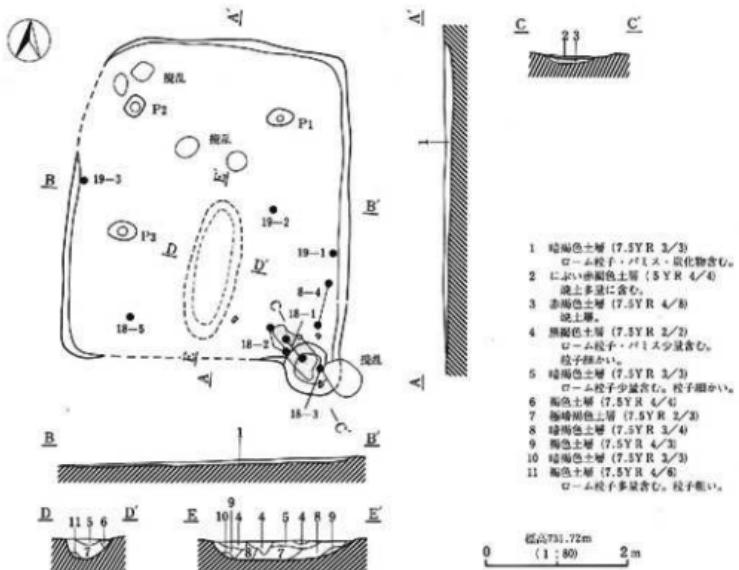
以上の出土遺物から、本住居址は平安時代中葉の所産と考えられる。

4) 第4号住居址

遺構（第17図、図版七・八）

本住居址は、調査区中央付近IIIHき・く-4・5グリッド内に位置し、全体層序第IV層上面において検出された。他遺構との重複関係はないものの、耕作等により床面及び床面近くまで破壊されているため、平面形態及び規模は、推定で南北長444cm、東西長373cmを測る隅丸長方形を呈する。

覆土は第1層暗褐色土層が覆土の主体を占める。第2層はカマド内に見られるにぶい赤褐色土



第17図 第4号住居址実測図

層で、焼土を多量に含む。

確認面からの壁高は、前述したように床面付近まで耕作等による擾乱を受けていたため、西壁・南壁の一部は既に失われており、残存する部分でも0~8cmを測るのみである。

床面は、地山の黄褐色ローム層をそのまま利用して構築されるが堅固な状態とは言い難く、各所を径30cm前後の円形の擾乱によって破壊される。また、中央南側の床面下より長さ200cm、幅68cm、深さ30cmを測り、南北に長い長椭円形を呈する土坑が検出された。

ピットは3個検出されたが、配置は不規則で本住居址に伴うものかどうかは明確ではない。平面形態及び規模は、38~42cm×24~28cmの東西に長い椭円形を呈し、深さは各々26cm・16cm・15cmを測る。

カマドは南東コーナーに位置するが、残存状態は極めて不良である。天井部・袖部は既に失われており、火床部と思われる掘り込みが残存するのみである。煙道から焚き口まで85cmを測り、焼土が約5cmの厚さで観察された。

遺物の出土状況は、カマド内に集中する傾向が認められる。18-1~4はカマド内およびカマド周辺からの出土であり、18-5は南西コーナー付近からの出土である。また、19-1は東壁下南側、19-2は住居址中央東側、19-3は西壁下中央より出土した。

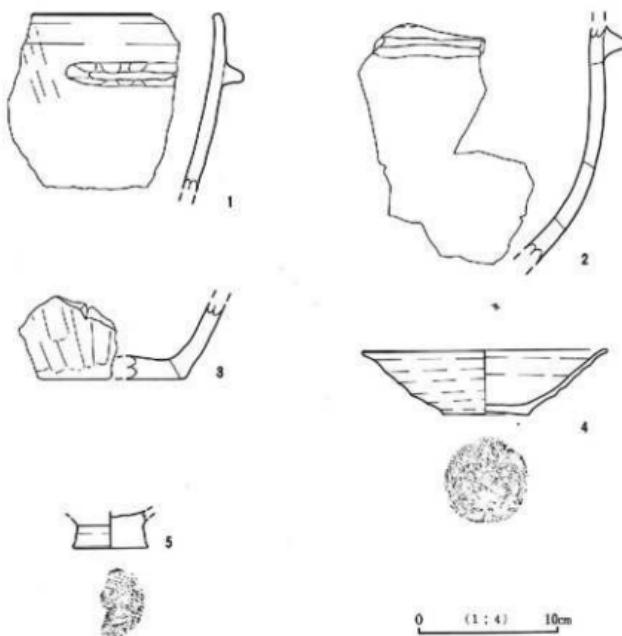
遺物（第18・19図、図版十九・二十二）

本住居址からは、土師器・須恵器・石器・鉄製品が出土している。土師器の器種には羽釜・坏・小皿があり、須恵器には甕がある。このうち、土師器5点、石器1点、鉄製品2点を図示した。

18-1・2は羽釜の体部片である。口縁部下に鏽を貼り付けしたものであるが、18-1の鏽は連続して体部を一周するものではなく、数カ所で断続するものである。調整は、ヘラナデ・指ナデが行われている。18-3は羽釜の底部片である。18-4は、ロクロ成形による土師器坏で、体部は直線的に大きく開き、端部でわずかに外反する。口径(17.2cm)に比して器高が4.6cmと低く、皿に近い形態となる。18-5は柱状の高台部のみであるが、口径10cm前後の小型の体部を持つ小皿になるものと思われる。ロクロからの切り離しは、18-4・5とも回転糸切りであり、未調整である。この他、須恵器甕の胴部、内面に黒色処理の施された土師器坏が出土しているが、小片のため図示し得なかった。

19-1は石英安山岩製の砥石である。欠損部以外の全面に使用痕が見られる。鉄製品には19-2・3があり、刀子と思われる。

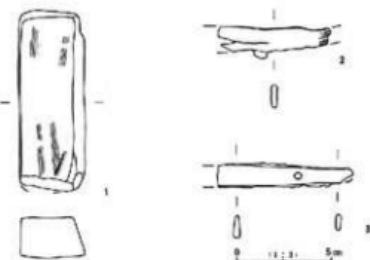
以上の出土遺物から、本住居址は平安時代後葉の所産と考える。



第18図 第4号住居址出土土器実測図

第6表 第4号住居址出土土器観察表

辨別 番号	器種	法量	成形及び器形の特徴	調査	備考
18-1	土器器 羽釜	— <12.5	直線的に立ち上がる腹部に、断続する鉢を貼り付け。	内)口辺部ヨコナデ。 腹部ナデ。 外)口沿部ヨコナデ。 腹部ナデ。	破片実測。 色調 5 YR 5/6 (明赤褐色)
18-2	土器器 羽釜	— (17.0)		内外面 ナデ。	破片実測。 色調 5 YR 5/4 (明赤褐色)
18-3	土器器 羽釜	— (5.3)		内)ナデ。 外)ヘラケメリ。	破片実測。 色調 5 YR 5/6 (明赤褐色)
18-4	土器器 环	17.2 4.6 6.0	体型直線的に大きく開き、端部で外反する。 底部回転系切り。	内外面 ヨクロヨコナデ。	完全実測。 色調 7.5 Y R 6/6 (橙色)
18-5	土器器 皿	— (2.6) (5.2)	底部柱状高台。 底部回転系切り。	内外部 ヨクロヨコナデ。	回転実測。 色調 5 Y R 7/6 (橙色)



第19図 第4号住居址出土石器・鉄製品実測図

5) 第5号住居址

遺構（第20図、図版八）

本住居址は、調査区中央付近IIIHい・うー3・4・5グリッド内に位置し、全体層序第IV層上面において検出された。南壁部分を擾乱溝によって破壊されており、北壁長320cmを計測し得るのみであるが、平面形態は南北に長い隅丸長方形を呈する。

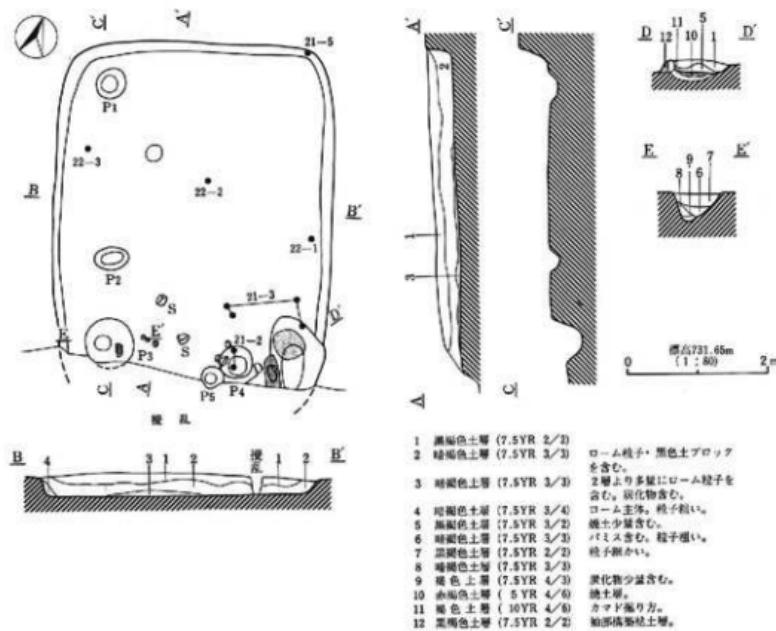
覆土は五層に分割され、自然堆積の状況を示している。第1層は黒褐色土層、第2層は暗褐色土層で住居址全体に堆積する。第3層は炭化物を少量含む暗褐色土層で、住居址中央付近の床面上に薄く堆積する。第4層は西壁直下において見られ、ロームを主体とする暗褐色土層である。第5層は焼土を少量含む黒褐色土層でカマド内に見られる。

確認面からの壁高は、北壁で31~40cm、東壁で13~31cm、西壁で22~40cmを測り、南側へ行くにしたがって低くなる。南壁は前述したように残存しない。壁体は平滑で、床面から比較的急傾斜で立ち上がる。壁溝は検出されなかつた。

床面は地山の黄褐色ローム層を利用して構築され、比較的堅固であり、特に住居址中央付近とカマド周辺は堅緻な状態である。

ピットは総数で5個検出された。P1は北西コーナーに位置し、44×40cmの梢円形で深さは13cmを測る。P2は西壁下南側に位置し、48×32cmの東西に長い梢円形を呈し、14cmの深度を有する。P3・P4・P5は南壁下に位置し、P3・P5は擾乱溝により南側を破壊される。P3は径70cmの円形で深さ47cm、P4は径48cmの円形で深さ48cm、P5は径32cm前後の円形で深さは37cmを測る。覆土はP3が四層、P4が三層に分割された。

カマドは南東コーナーに位置し、幅90cmを測る。南側を擾乱溝によって破壊されているため、長さは推定で120cm前後を測るものと思われる。天井部は既に失われており、旧状は不明であるが、袖部は右袖に芯材として縛を用い、さらに黒褐色粘土（第12層）で被覆して構築される。火



第20図 第5号住居址実測図

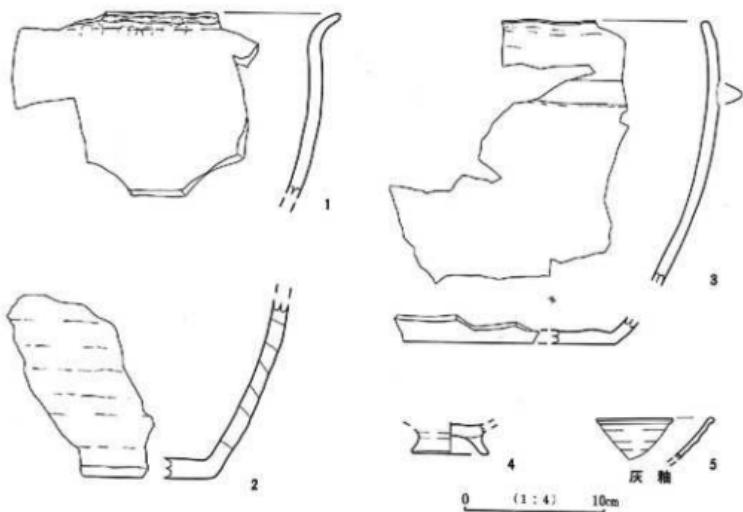
床部は床面を120×80cmの椭円形に掘り込んだ後、第11層褐色土層を埋め戻して構築される。

遺物の出土状況は、カマド及びP4周辺に集中する傾向が認められる。21-1・3はカマド内およびカマド周辺からの出土であり、21-2はP4上面、21-5は北東コーナーから出土した。また、22-1は東壁下中央付近、22-2は住居址中央、22-3は西壁下北側より出土した。

遺物（第21・22図、図版十九・二十二）

本住居址からは、土師器・須恵器・灰釉陶器・石器・鉄製品が出土している。このうち、土師器4点、灰釉陶器1点、石器2点、鉄製品1点を図示した。

土師器の器種には、甕・羽釜・高台付杯がある。甕は21-1・2があり、同一個体と思われる。口縁部は短く外反し、胴部は軽く膨らみ、口径が最大径となる。調整は、内外面ともナデ調整が行われ、口縁部は指おさえにより整えられる。21-2は幅2cm前後の粘土紐の積み上げ痕が観察できる。羽釜には21-3がある。鍔は欠損しているため、形状は不明であり、また、体部を全周するものであるか、18-1にみられるように断絶するものであるかは不明である。調整は、



第21図 第5号住居址出土土器実測図

第7表 第5号住居址出土土器観察表

件番 図 号	器 種	法 量	成形及び器形の特徴	調 整	備 考
21-1	土師器 甕	— (13.1)	口辺部幅かく外反する。	内外面 ナデ。 口縁部 指ナデ。	破片実測。 色調 7.5 Y R 5/4 (にぶい赤褐色)
21-2	土師器 甕	— (12.5)		内外面 ナデ。	破片実測。 色調 5 Y R 5/3 (にぶい赤褐色)
21-3	土師器 羽 釜	— (18.9)		内外面 ナデ。 口縁部 指ナデ。	破片実測。 色調 5 Y R 5/4 (にぶい赤褐色)
21-4	土師器 高台付 杯	— (2.1) 5.4	貼り付け高台。	内外面 ロクロヨコナデ。	圓転実測。 胎土 白色粒子少量含む。 色調 5 Y R 6/4 (にぶい橙色)
21-5	灰 釉 皿	— (2.9)		内外面 ロクロヨコナデ。	破片実測。 色調 5 Y 7/1 (灰白色)

ヘラナデが施され、口縁部には指によるナデが行われる。21-4はロクロ成形による土師器高台付杯で、高台は貼り付け高台である。灰釉陶器には21-5がある。

この他小片ではあるが、須恵器甕の胴部、須恵器杯、内面に黒色処理された土師器杯がある。



第22図 第5号住居址出土石器・鉄製品実測図

石器には22-1・2があり、いずれも流紋岩製の砥石で、仕上げ用のものである。22-1は長さ11.9cmを測り、一孔を有する。22-2は残存長8.0cmを測る。鉄製品には鉄鎌がある。22-3は羅股式の鉄鎌である。鎌身部と茎部の先端が欠損するが、残存長は10.1cmを測り、施被部の形態は両開を呈する。

以上の出土遺物から、本住居址は平安時代後葉の所産と考える。

6) 第6号住居址

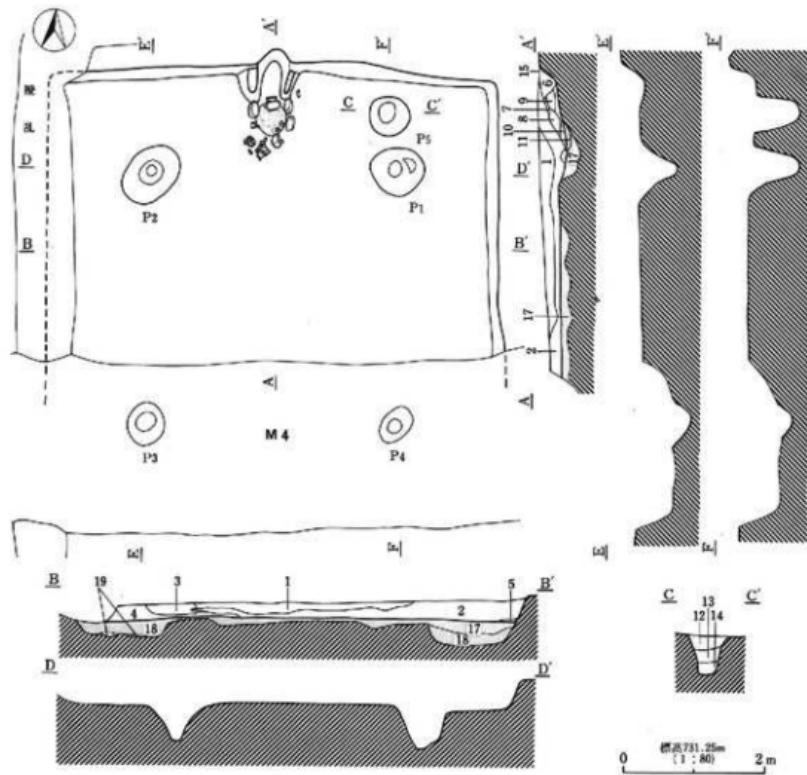
遺構（第23・24・25図、図版九）

本住居址は、調査区中央付近IIIHい・う-5・6グリッド内に位置し、全体層序第IV層上面において検出された。第4号溝状遺構と重複関係にあり南半部を破壊され、さらに、擾乱溝によつて西壁部分を破壊されているため、平面形態及び規模は不明であるが、東西長645cm前後を測る方形を呈するものと考えられる。

覆土は十層に分割されたが、第6層から第10層はカマド内に見られるものである。第1層は白色粘土をブロック状に多量に含む暗褐色土層、第2層は黒色土層であり、第1層・第2層で覆土の大半を占める。第3層は暗褐色土層、第4層は黒褐色土層で西壁付近にみられる。第5層は黒色土層で東壁下にわずかに観察されるのみである。

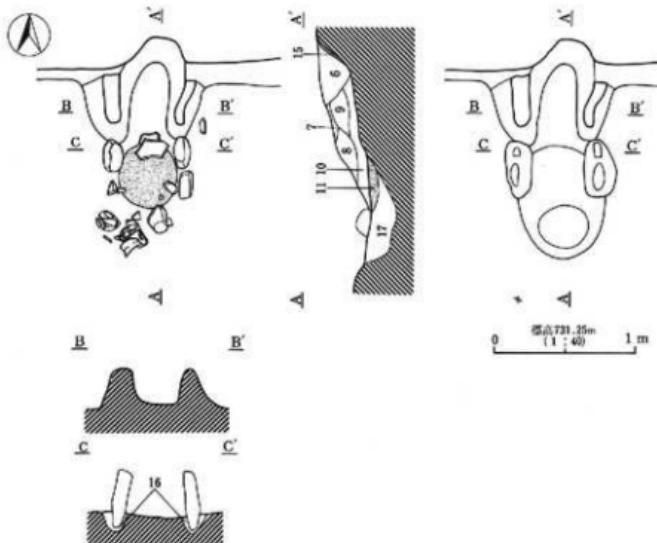
確認面からの壁高は、36~45cmを測る。西壁・南壁及び東壁の南側は前述したように存在しない。壁溝は検出されなかった。

床面は、北壁・東壁・西壁の内側約150cmを20~30cm前後掘り込み、暗褐色土（第18層）・黒色土（第19層）を埋め戻した後、褐色土（第17層）を埋め戻して貼り床が施される。床面の状態は、



- 1 黒 色 土 壤 (7.5YR 3/4)
 2 黒 色 土 壤 (7.5YR 2/1)
 3 黒 色 土 壤 (7.5YR 3/3)
 4 黒 色 土 壤 (7.5YR 2/2)
 5 黒 色 土 壤 (7.5YR 2/1)
 6 黒 色 土 壶 (7.5YR 2/2)
 7 黑 色 土 壶 (7.5YR 4/2)
 8 にじみ色土壌 (5YR 4/3)
 9 明赤褐色土壌 (5YR 5/6)
 10 明赤褐色土壌 (7.5YR 2/3)
 11 深 色 土 壤 (5YR 4/8)
 12 黑 色 土 壈 (7.5YR 3/2)
 13 黑 色 土 壈 (7.5YR 2/1)
 14 橙褐色土壌 (7.5YR 2/3)
 15 A' 白 土 壈 (10YR 8/2)
 16 塗 黑 色 土 壈 (7.5YR 3/4)
 17 黑 色 土 壈 (7.5YR 4/6)
 18 塗 黑 色 土 壈 (7.5YR 3/4)
 19 黑 色 土 壈 (7.5YR 1.7/1)
- ローム粒子・パミス・白色粘土ブロックを多量に含む。
 白色粘土少量含む。粒子細かい。
 ローム粒子多量、白色粘土少量含む。
 ローム粒子・パミス少量含む。
 ローム粒子多量含む。粒子細かい。
 桃土・白色粘土少量含む。
 桃土・白色粘土含む。
 桃土・粘土多量含む。
 粘土・粘土多量含む。
 粘土層。
- P 5 層土。
 カマド構造粘土層。
 カマド残石埋設土。
 ローム土体。
 ローム粒子・ロームブロック多量含む。
 ローム粒子少量含む。粒子細かい。

第23図 第6号住居址実測図

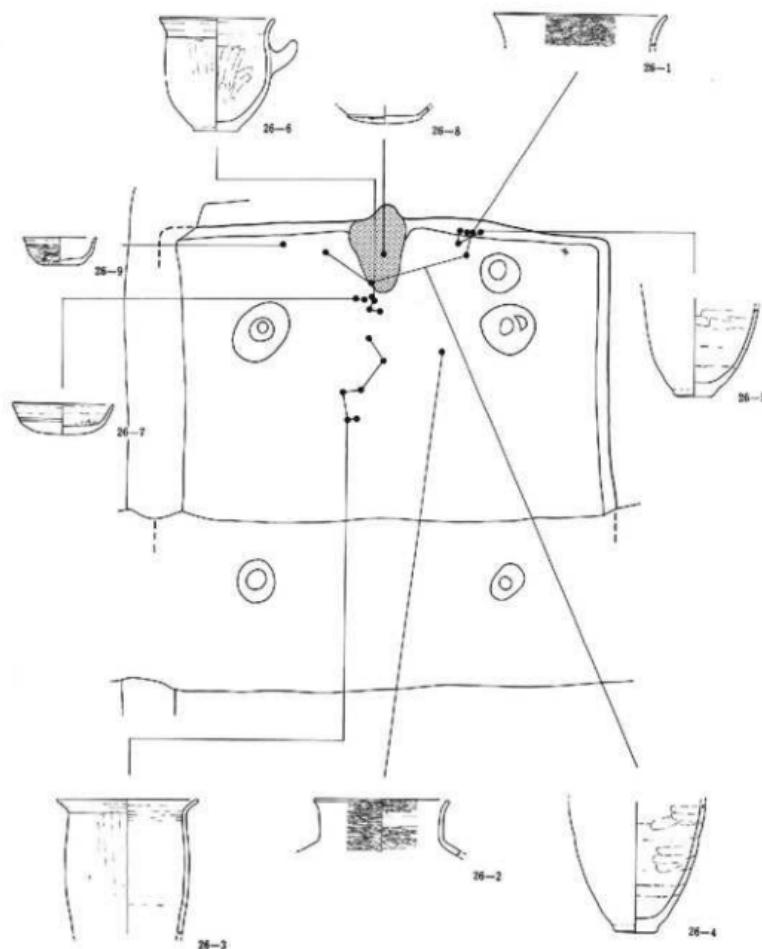


第24図 第6号住居址カマド実測図

全体に平坦で堅敏な状態である。

ピットは総数で5個検出された。P1～P4が主柱穴であるが、P3・P4は第4号溝状遺構により上面を破壊される。P1は78×74cmの円形を呈し、66cmの深度を有する。P2は95×70cmの椭円形を呈し、54cmの深度を有する。P3・P4は残存値で55×35cm・59×39cmの椭円形を呈し、深さは各々28cm・27cmを測る。P5はP1の北側に位置し貯蔵穴と考えられ、58×54cmの円形を呈し、深さは66cmを測る。覆土は黒褐色土層（第12層）・黒色土層（第13層）・極暗褐色土層（第14層）の三層に分割された。

カマドは北壁中央に位置するが、天井部は既に失われている。煙道から焚き口までの長さ120cm、幅80cmを計測する。煙道部は壁体を幅45cm、長さ20cmの半円状に掘り込み、火床部は壁下の床面を82×62cm、深さ20cmの椭円形に掘り込んだ後、第17層褐色土を埋め戻して設けられる。また、煙道部の内側に貼り付けされた白色粘土（第15層）がわずかに残存する。袖部は地山の黄褐色ローム層を掘り残して袖部を形成し、その先端部に袖石を埋設して構築される。旧状は左右各々2個の袖石が埋設されていたものと思われるが、左側前列の袖石は存在しない。後列の袖石は火床より約30cm露出し、やや内側に傾斜した状態で検出された。右側前列の袖石は面取りの施された軽石が用いられ、火熱を受け赤く焼けている。



第25図 第6号住居址遺物分布図 (1:80・1:8)

遺物の出土状況は、特にカマド及びその周辺に集中する傾向が認められるが、床面のはば全面から出土した。26-6・7・8はカマド内およびカマド周辺から出土した。26-1・5はカマド東側の北壁下、26-9はカマド西側の北壁下から出土した。また、26-2・3は住居址のはば中央からの出土である。

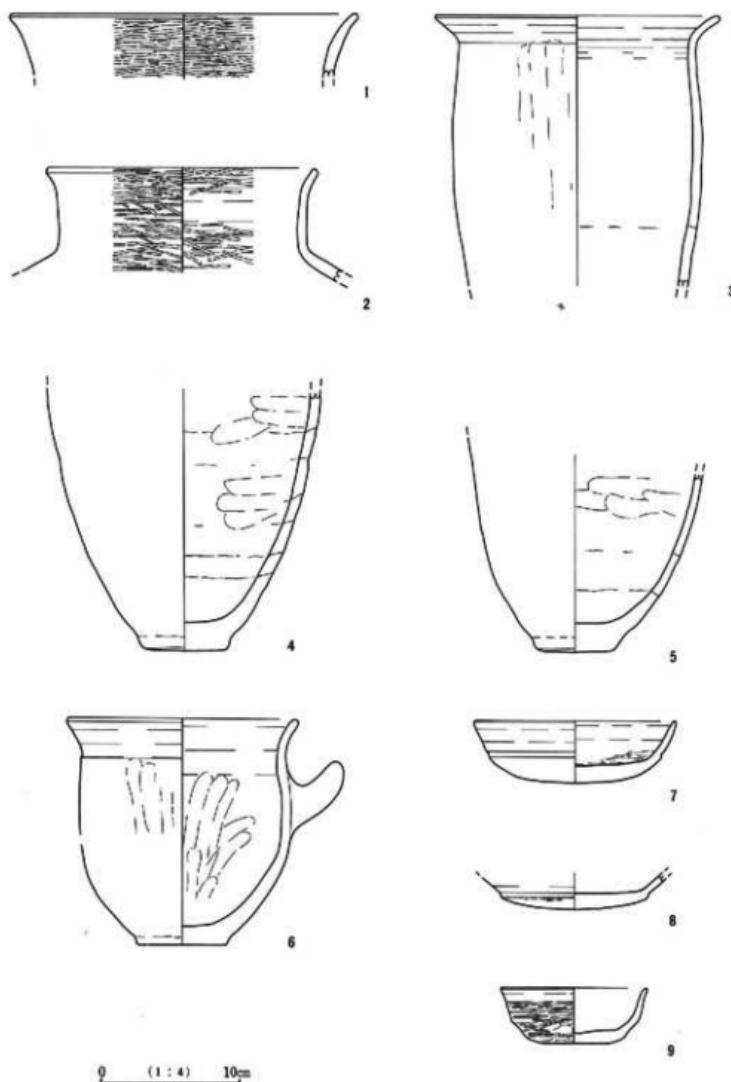
遺物（第26図、図版十九・二十）

本住居址からは、土器類・須恵器が出土している。このうち、土器類9点を図示した。

土器類の器種には、甕・壺がある。甕には、26-1・2・3・4・5・6の6点がある。26-1・2は、胴部が強く張り、球形を呈するものと思われる甕の口辺部である。調整は、内外面ともヨコナデの後、ヘラミガキが行われる。26-3・4・5は、口辺部が短かく外反し、胴部は軽く膨らみ、口径が最大径となる長胴甕である。調整は、口辺部内外面にヨコナデ、胴部にナデ調整が施され、外面に白色粘土が多量に付着する。26-6は、把手付きの甕である。口辺部は外反し、胴部は軽く膨らみ、口径が最大形となる。把手は胴部上半部に1個貼り付けされる。調整は、口辺部は内外面ともヨコナデ、胴部はナデ調整が施され、把手を貼り付けた後、把手部分にのみヘラミガキが行われる。土器類壺には26-7・8・9の3点がある。26-7・8は、口辺部と底部の境に外縁を有し、丸底の底部を持つ壺で、古墳時代後期に特徴的に見られるものである。調整は2点とも、口辺部は外面ヨコナデ、内面ヨコナデの後、ヘラミガキが施され、底部は、内面ヘラミガキ、外面ヘラケズリの後、ヘラミガキが行われる。また、26-7の底部は摩滅が著しく、26-8の内外面には白色粘土が多量に付着している。26-9は、体部は内済氣味に立ち上がり、端部でわずかに外反する。また、体部の上半と下半の境に不明瞭な稜を有する。外面の調整は、体部上半はヨコナデの後ヘラミガキ、下半はヘラケズリの後ヘラミガキが施される。内面は全面にヘラミガキが行われているが、剝離が著しい。

この他、内面に黒色処理された土器類壺・高壺が出土しているが、小片のため図示し得なかつた。

以上の出土遺物から、本住居址は古墳時代後期後葉の所産と考えられる。



第26图 第6号住居址出土土器实测图

第8表 第6号住居址出土土器観察表

持番 図号	器種	法量	成形及び器形の特徴	調査	備考
26-1	土師器 甕	(24.6) (4.5) —	口辺部外反する。	内)ヨコナデの後、ヘラミガキ。 外)ヨコナデの後、ヘラミガキ。	回転実測、口縁部1/4残存。 胎土 白色粒子少量含む。 色調 7.5Y R6/6 (橙色)
26-2	土師器 甕	(24.8) (7.4) —	口辺部直線的に外傾する。	内)ヨコナデの後、ヘラミガキ。 外)ヨコナデの後、ヘラミガキ。	回転実測、口縁部1/4残存。 胎土 白色粒子少量含む。 色調 7.5Y R6/6 (橙色)
26-3	土師器 甕	(20.2) (19.2) —	口辺部短かく外反し、胴部は軽く膨らむ。	内)口辺部ヨコナデ、 胴部ナデ。 外)口辺部ヨコナデ、 胴部ナデ。	回転実測。 色調 7.5Y R7/6 (橙色) 外面白色胎土付着。
26-4	土師器 甕	— (18.5) (6.2)		内)ナデ。	回転実測。 色調 7.5Y R7/3 (にぶい橙色) 外面白色胎土多量に付着。
26-5	土師器 甕	— (15.2) 5.5	底部肥厚する。	内)ナデ。	回転実測。 胎土 2mm以下の石粒含む。 色調 10Y R8/4 (浅黄橙色) 外面白色胎土多量に付着。
26-6	土師器 甕	16.4 16.0 (6.2)	口辺部外反し、胴部は軽く膨らむ。 胴部上半に把手貼り付け。	内)口辺部ヨコナデ、胴部ナデ。 外)口辺部ヨコナデ、胴部ナデ。 把手貼り付けの後、ヘラミガキ。	回転実測。 色調 7.5Y R6/4 (にぶい橙色)
26-7	土師器 甕	14.2 4.4 ●	口辺部直線的に外傾し、外後を有する。 底部は肥厚し、丸底を呈する。	内)口辺部ヨコナデの後、ヘラミガキ。 底部ヘラミガキ。 外)口辺部ヨコナデ、 ヘラミガキの後、ヘラミガキ。 底部ヘラミガキ。 厚底著しい。	完全実測。 色調 5Y R6/8 (橙色)
26-8	土師器 甕	— (2.6) ●	外縁を有する。 底部は肥厚し、丸底を呈する。	内)口辺部ヨコナデの後、ヘラミガキ。 底部ヘラミガキ。 外)口辺部ヨコナデ、 ヘラミガキの後、ヘラミガキ。	回転実測。 色調 5Y R6/6 (橙色) 内外白色胎土多量に付着。
26-9	土師器 甕	(10.4) 4.0 (4.8)	体部内凹して立ち上がり、端部で僅かに外反する。 底部肥厚する。	内)ヘラミガキ、剣縫著しい。 外)口辺部ヨコナデの後、ヘラミガキ。 底部ヘラミガキの後、ヘラミガキ。	回転実測、口縁部1/4残存。 色調 7.5Y R5/4 (にぶい褐色)

7) 第7号住居址

遺構 (第27図、図版十)

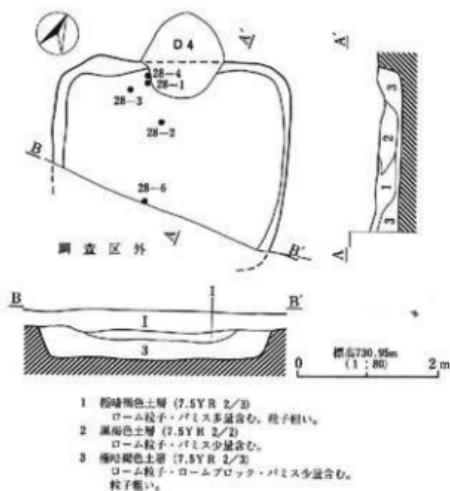
本住居址は、調査区中央付近III Cけ・こー8・9グリッド内に位置し、全体層序第IV層上面において検出された。第4号土坑と重複関係にあり、北壁中央部を破壊される。さらに、南西部分は調査区外にのびるため未調査である。したがって、平面形態及び規模は北壁長274cmを測る隅丸長方形を呈するものと思われる。

覆土は三層に分割された。第1層は極暗褐色土層、第2層は黒褐色土層で中央付近上面に堆積する。第3層は極暗褐色土層で覆土の主体を占めるものである。

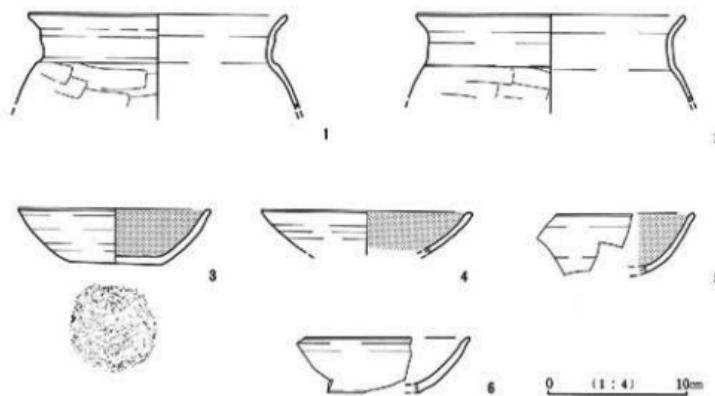
確認面からの壁高は、北壁で38~46cm、東壁で39~45cm、西壁で38~41cmを測り、床面から比較的急傾斜で立ち上がる。壁溝は検出されなかった。

床面は地山の黄褐色ローム層を利用して構築され、堅固な状態である。

ピット・カマド等の付属施設は検出されなかった。



第27図 第7号住居址実測図



第28図 第7号住居址出土土器実測図

第9表 第7号住居址出土土器観察表

番号	器種	法量	成形及び器形の特徴	調査	備考
28-1	土師器 甕	(18.4) (6.5) —	口辺部「コ」の字状を呈する。	内) 口辺部ヨコナデ、 胸部ナデ。 外) 口辺部ヨコナデ、 胸部ヘラケズリ。	回転実測、口縁部1/4残存。 色調 7.5Y R5/2 (灰褐色)
28-2	土師器 甕	(19.0) (6.0) —	口辺部「コ」の字状を呈する。	内) 口辺部ヨコナデ、 胸部ナデ。 外) 口辺部ヨコナデ、 胸部ヘラケズリ。	回転実測。 色調 5Y R5/4 (にぶい赤褐色)
28-3	土師器 杯	13.4 4.0 6.9	体部内溝して立ち上がり、端部でわずかに外反する。 底部回転糸切り。	内) 黒色処理。 外) ロクロヨコナデ。	完全実測、口縁部3/4残存。 色調 7.5Y R5/4 (にぶい赤褐色)
28-4	土師器 杯	(14.8) (3.0) —	体部内溝して立ち上がり、端部でわずかに外反する。	内) 黒色処理。 外) ロクロヨコナデ。	回転実測、口縁部1/4残存。 色調 7.5Y R6/4 (にぶい橙色)
28-5	土師器 杯	— (4.3) —	体部内溝して立ち上がり、端部でわずかに外反する。	内) 黒色処理。 外) ロクロヨコナデ。	破片実測。 胎土 白色粒子少量含む。 色調 5Y R6/4 (にぶい褐色)
28-6	土師器 杯	— (3.9) —	体部内溝して立ち上がり、端部でわずかに外反する。 底部回転糸切り。	内外面 ロクロヨコナデ。	破片実測。 胎土 白色粒子含む。 色調 10Y R7/3 (にぶい黄褐色)

遺物の出土状況は、北壁下中央西寄りに集中している。28-1・3・4は北壁下中央西寄りから出土した。28-2は住居址中央北寄り、28-6は中央南寄りからの出土である。

遺物（第28図、図版二十）

本住居址からは、土師器・須恵器が出土している。このうち、土師器6点を図示した。

土師器の器種には甕・杯がある。甕には28-1・2があり、いずれも器厚は薄く、口辺部は「コ」の字状を呈しており、所謂「武藏甕」である。調整は2点とも、口辺部ヨコナデ、胸部ヘラケズリであり、胸部のヘラケズリの後、口辺部のヨコナデが行われている。土師器杯には28-3・4・5・6の4点がある。すべてロクロ成形によるものであり、体部は内溝して立ち上がり、端部でわずかに外反あるいは外反気味となる。内面は、黒色処理されるもの（28-3・4・5）とされないもの（28-6）とがあり、この他小片ではあるが、内面にヘラミガキの行われるものもある。ロクロからの切り離しは糸切りであり、未調整である（28-3・6）。この他、須恵器の胴部片が出土しているが、本住居址の出土遺物は、土師器の占める割合が圧倒的に高く、また、杯類では須恵器杯の出土はなく、内面に黒色処理された土師器杯の割合が高い。

以上の出土遺物から、本住居址は平安時代中葉の所産と考えられる。

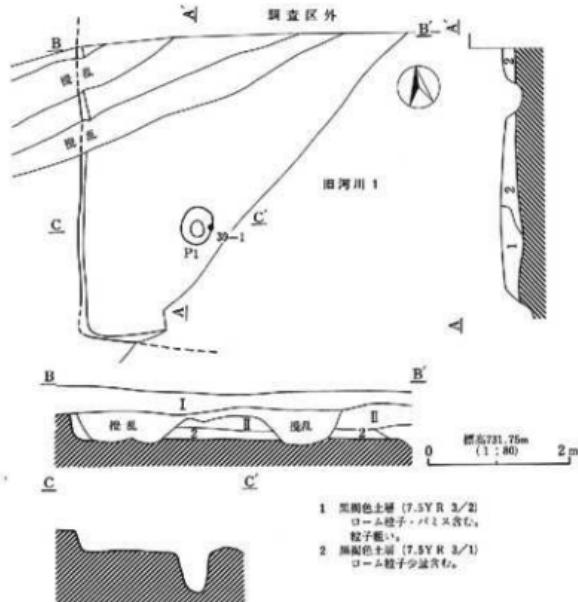
8) 第8号住居址

遺構（第29図、図版十）

本住居址は、調査区中央東寄りIII C え・お-2・3 グリッド内に位置し、全体層序第IV層上面において検出された。旧河川1と重複関係にあり、南東部大半を破壊される。さらに、西壁の一部と床面を搅乱によって破壊され、北側は調査区外であり、未調査である。したがって、西壁・南壁の僅く一部が検出されたのみであり、平面形態及び規模については全く不明である。

覆土はローム粒子・バニスを含む第1層黒褐色土層、ローム粒子を少量含む第2層黒褐色土層の二層に分割された。

確認面からの壁高は、西壁で10~28cm、南壁で28~30cmを計測する。壁溝は検出されなかった。床面は、暗褐色土（第4層）・褐色土（第5層）・黒色土（第6層）を埋め戻し、さらに2~5cmの厚さで黒褐色土（第3層）を埋め戻して貼り床が施される。床面の状態は全体に平坦で堅固な状態である。



第29図 第8号住居址実測図

ピットは1個検出され、南西に配される主柱穴と考えられる。55×46cmの椭円形を呈し、64cmの深度を有する。

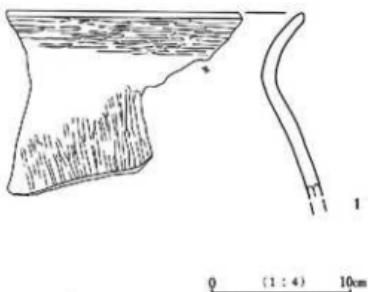
カマドは、前述したように本住居址の極く一部が検出されたのみであり、特にカマドの存在が予想される北壁部分が調査区外にのびているため検出されなかった。

遺物の出土状況は、特に集中する箇所は認められず、覆土中より散漫な状態で出土したのみである。30-1は、P 1内からの出土である。

遺物（第30図）

本住居址からは、土師器・須恵器が極く少量出土したのみであり、そのうち、土師器1点を図示した。30-1は大型の土師器壺で、外反する口辺部を有する。調整は、口辺部は内外面とも横位のヘラミガキ、胸部は内面にナデの後、粗いヘラミガキ、外面に縦位のヘラミガキが行われるが、剥離・摩滅が著しい。

この他、器厚が厚く、外面にヘラケズリの施された土師器壺の胸部、内面



第30図 第8号住居址出土土器実測図

第10表 第8号住居址出土土器観察表

種類 図 号	器 種	法 量	成形及び器形の特徴	調 整	備 考
30-1	土師器 壺	— (12.9)	口辺部外反する。	内)口辺部横位のヘラミガキ、 胸部ナデの後、粗いヘラミガキ。 外)口辺部横位のヘラミガキ、 胸部縦位のヘラミガキ。 剥離・摩滅著しい。	破片実測。 色調 10Y R7/3 (にじい黄褐色)

に黒色処理の施された土師器壺、須恵器壺の胸部が出土しているが、いずれも小片のため図示しえない。

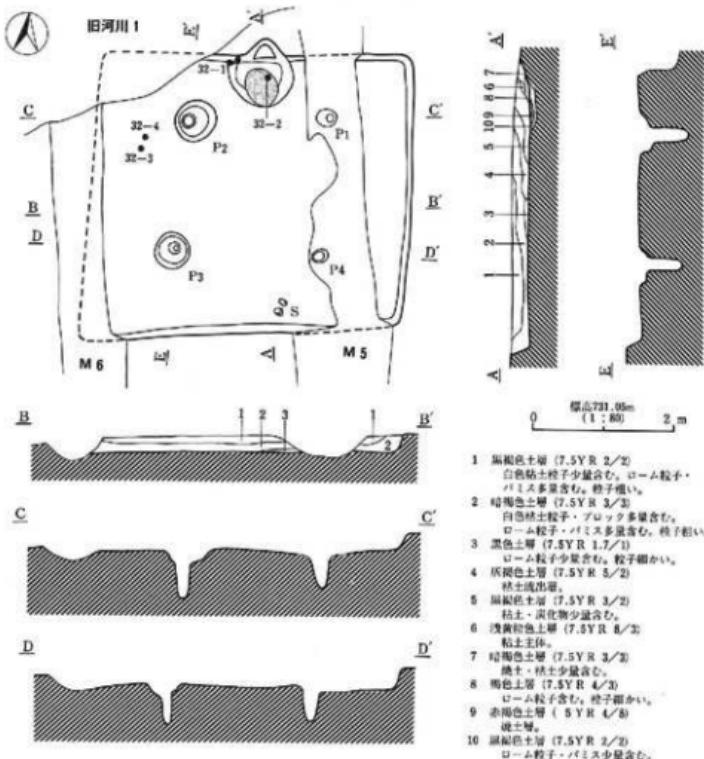
以上、本住居址は出土遺物が極めて少なく、所産期を特定できる遺物に乏しいが、土師器壺に古墳時代後期の様相を見いだすことができ、また、旧河川1との重複関係から、本住居址の所産期は古墳時代後期と考えておきたい。

9) 第9号住居址

遺構（第31図、図版十一・十二）

本住居址は、調査区中央東寄りIII C え・お・か-5・6・7グリッド内に位置し、全体層序第IV層上面において検出された。第5・6号溝状遺構、旧河川1と重複関係にあり、第5号溝状遺構に中央東側を、第6号溝状遺構に西壁部分を南北に破壊され、さらに旧河川1によって北西コーナー付近を破壊される。したがって、東壁長362cmを計測し得るのみであるが、東西にやや長い方形を呈するものと考えられる。

覆土は八層に分割されたが、第4層から第8層はカマド内にみられるものである。第1層黒褐



第31図 第9号住居址実測図

色土層・第2層暗褐色土層が覆土の主体を占め、第3層黒色土層は住居址中央付近の床面上にわずかに認められるのみである。第2層中には白色粘土が多量に含まれる。第4層灰褐色土層・第6層浅黄橙色土層は、粘土を主体とするカマドの流出層である。

確認面からの壁高は12~30cmを測るが、西壁及び北壁の大半は前述したように存在しない。壁構は検出されなかった。

床面は、地山の黄褐色ローム層を利用して構築されており、平坦で堅固な状態である。

ピットは主柱穴である4個が検出され、整然と配置される。P2・P3は、平面形は径50~60cmの円形で深さは各々68cm・61cmを測る。断面形は床面から10~15cmの深さにテラスを有する有段のU字状を呈する。P1・P4も同様な形態であると考えられるが、第6号溝状遺構によって上面テラス部分を破壊されているため、P1は28×24cmの椭円形、P4は22×20cmの円形を呈し、深さは残存部で各々47cm・48cmを測る。

カマドは北壁中央に位置するが、天井部・袖部は既に失われており旧状を留めていない。煙道部は壁体を半円状に掘り込み、火床部は壁下の床面を幅92cmの円形状に掘り込んだ後、第10層黒褐色土層を埋め戻して設けられる。

遺物の出土状況は、特に集中する箇所は認められず、覆土中より散漫な状態で出土したのみである。32-1・2はカマド内から、32-3・4はP2西側の床面上からの出土である。

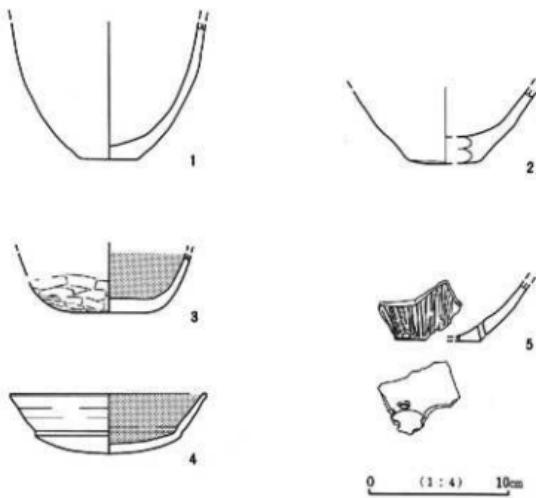
遺物（第32図、図版二十）

本住居址からは、土師器が出土しており、そのうち5点を図示した。

土師器の器種には、甕・鉢・杯・瓶がある。土師器甕には32-1・2の2点があるが、いずれも胴部下半から底部にかけての破片であり、全体の形状は不明であるが、胴部は抱彌形となるものと思われる、底部は肥厚し、小径の平底となる。外面にヘラケズリ、内面にナデ調整が施される。

32-3は鉢形になると思われるが、底部のみのため全体の形状は不明である。内面には黒色処理が施され、外面にはヘラケズリが行われており、胴部と底部との境が不明瞭である。32-4は土師器杯である。口辺部は直線的に立ち上がり、口辺部と底部の境に明瞭な外縁を持つ、所謂「有稜杯」である。内面は黒色処理され、外面は口辺部にヨコナデ、底部にヘラケズリが行われるが、底部は摩滅している。瓶には32-5がある。底部付近の小片であるため全体の器形は不明であるが、底部は平底で、小型の瓶である。底部は多孔で、孔は径6mmを測る。また、穿孔は胴部の最下部、底部との境付近においても行われており、残存部で洞部最下部に2孔、底部に3孔が観察される。この他、小片のため図示し得なかつたが、土師器甕には、口辺部が短かく外反し、胴部外面にヘラケズリの施されるもの、球形の胴部を有し、口辺部の内外面にヘラミガキのおこなわれるものがある。

以上の出土遺物と旧河川1との重複関係から、本住居址は、古墳時代後期後葉の所産と考える。



第32図 第9号住居址出土土器実測図

第11表 第9号住居址出土土器観察表

掲 番 号	器 種	法 量	或形及び器形の特徴	調 整	備 考
32-1	土器 甕	— (9.6) (4.2)		内)ナデ。 外)ヘラケズリ。	回転実測。 胎土 白色粒子含む。 色調 7.5YR7/4(にぶい橙色) 外面白色粘土付着。
32-2	土器 甕	— (5.1) (5.0)	底部肥厚する。	内)ナデ。 外)ヘラケズリ。	回転実測。 胎土 白色粒子含む。 色調 7.5YR7/4 (にぶい橙色)
32-3	土器 鉢	<4.1) 5.4		内)黒色底面。 外)ヘラケズリ。	回転実測。 胎土 白色粒子含む。 色調 10YR4/2 (灰黄褐色)
32-4	土器 杯	13.8 4.2 ●	口辺部直線的に開き、口辺部と 底部の境に明瞭な縁を有する。 底部丸底。	内)黒色底面。 外)口辺部ヨコナデ、 底部ヘラケズリ、摩滅してい る。	完全実測。 色調 7.5YR6/6 (橙色)
32-5	土器 瓶	— <4.1) —	底部および底部と胴部の境に穿 孔あり。	内)黒色底面。 外)黒色底面。	破片実測。 胎土 白色粒子多量に含む。 色調 10YR1.7/1 (黑色)

10) 第10号住居址

遺構（第33図、図版十一・十二）

本住居址は、調査区中央東寄りIII C う・えー7・8グリッド内に位置し、全体層序第IV層上面において検出された。第7・8号土坑と重複関係にあり、第7号土坑に南西コーナーを、第8号土坑に南壁中央部分を破壊される。主軸方位はN-14°-Wで、平面形態及び規模は、東壁長376cm、西壁長370cm、南壁長400cm、北壁長398cmを測り、東西にやや長い隅丸方形を呈する。今回の調査で全プランを確認し得たのは本住居址のみである。ピット等を含む床面積は約16m²である。

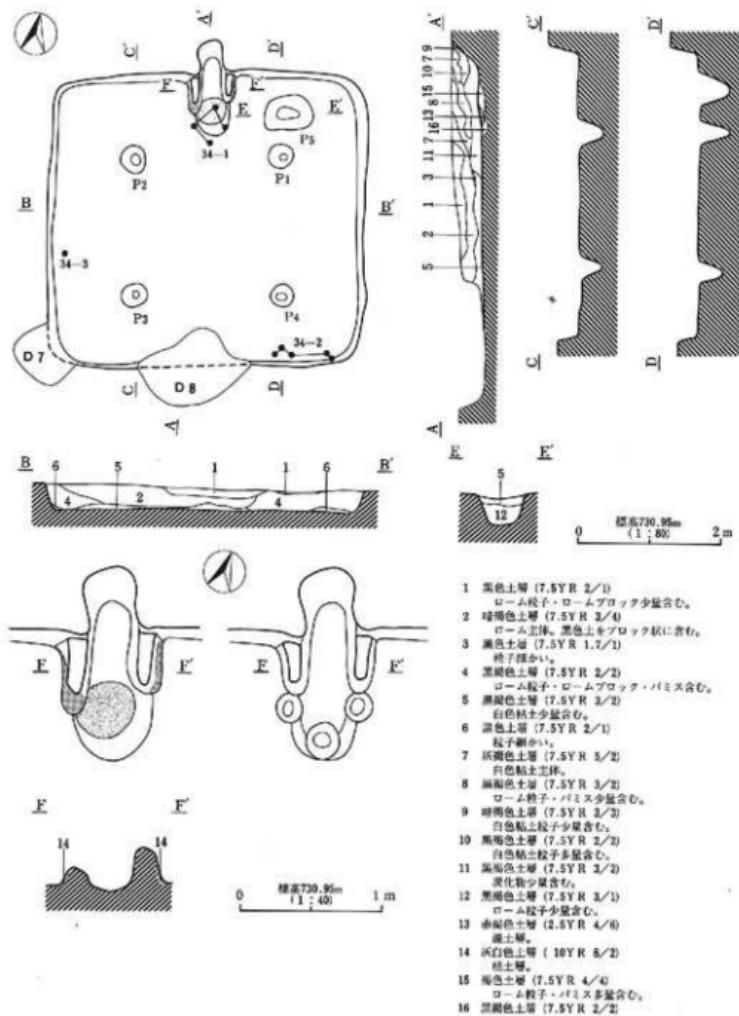
覆土は十一層に分割されたが、第7層から第11層はカマド内にみられるものであり、第2層と第4層が主体を占める。第1層は中央付近上面にみられる黒色土層、第2層はロームを主体として黒色土をブロック状に含む暗褐色土層である。第3層はカマド付近にわずかに見られる黒色土層、第4層は黒褐色土層で、東壁及び西壁付近に堆積する。第5層は床面上に薄く堆積する黒褐色土層、第6層は黒色土層で壁下に僅かに認められるのみである。また、覆土中及び床面上に白色粘土がブロック状に認められた。

確認面からの壁高は、26~45cmを測り、床面から急傾斜で立ち上がる。壁溝は検出されなかった。

床面は、地山の黄褐色ローム層をそのまま利用して構築され、全体に平坦で堅固な状態である。ピットは総数で5個検出された。P1~P4が主柱穴であり、整然と配置される。P1~P4は径30~40cmのほぼ円形で、各々46cm・35cm・33cm・36cmの深度を有する。P5はP1の北側、カマドの東側に位置し、68×50cmの楕円形を呈し、49cmの深さを測る。覆土は第5層と第12層の二層に分割され、機能として貯蔵穴が想定される。

カマドは北壁中央に位置し、煙道から焚き口までの長さ122cm、袖幅70cmを計測する。煙道部は壁体を長さ45cm、幅40cmの半円状に掘り込んで構築される。袖部は地山の黄褐色ローム層を掘り残して形成され、先端部に礫を埋設した後、粘土を被覆して構築されるが、礫は既に失われており、礫を埋設した径20cm前後、深さ15cmの掘り込みが検出された。また、粘土は両袖の外側にわずかに残存するのみである。火床部は壁下の床面を約10cmの深さに掘り込んだ後、第15層褐色土層、第16層黒褐色土層を埋め戻して設けられ、焼土の堆積がみられる。

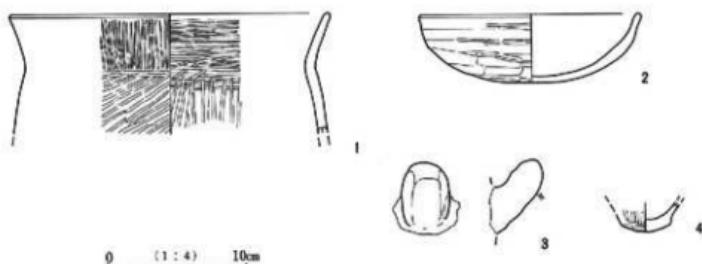
遺物の出土状況は、特に集中する箇所は認められず、散漫な状態で出土したのみである。
34-1・4はカマド内からの出土である。34-2は南壁下東側、南東コーナー付近より出土し、
34-3は西壁下中央南寄りから出土した。



第33図 第10号住居址実測図

遺物（第34・35図、図版二十・二十二）

本住居址からは、土器類・石器が少量出土したのみであり、そのうち土器4点・石器1点を図示した。

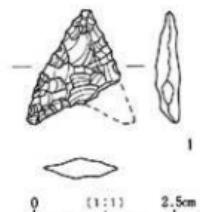


第34図 第10号住居址出土土器実測図

第12表 第10号住居址出土土器観察表

器 種 名	器 種	法 量	成形及び器形の特徴	調 整	備 考
34-1 土器類 甕		(22.8) (8.5) —	口辺部軽く外傾し、口径と胴部最大径はほぼ等しい。	内)口辺部縦位のヘラミガキ。 縫合ナデの後、壁部のヘラミガキ。 外)口辺部縦位のヘラミガキ。 胴部ヘラケズリの後、斜位のヘラミガキ。	回転実測。 口縁部1/2残存。 胎土 白色粒子少量含む。 色調 5 YR 6/6 (橙色)
34-2 土器類 杯		15.5 4.4 ●	口辺部と底部との境に縫を有する。 底部丸底。	内)ヘラミガキ。 外)口辺部ヨコナデの後、粗いヘラミガキ。 底部ヘラケズリの後、粗いヘラミガキ。	完全実測。 胎土 白色粒子多量に含む。 色調 7.5 Y R 6/8 (橙色)
34-3 土器類 瓶		— (5.1) —			破片実測。 色調 7.5 Y R 5/4 (にじい褐色)
34-4 土器類 手型		— (2.1) (3.5)		内)ヘラミガキ。 外)底位のヘラミガキ。	回転実測。 色調 5 YR 6/6 (橙色)

土器類の器種には甕・杯・瓶・手捏のミニチュア品がある。甕には34-1がある。口縁部から胴上部までが残存するのみであるため全形は不明であるが、口辺部は軽く外傾し、口径と胴部最大径はほぼ等しくなるものと思われる。調整は、内面は口辺部に横位のヘラミガキ、胴部にナデの後、縦位の粗いヘラミガキ、外面には口辺部に縦位のヘラミガキ、胴部にヘラケズリの後、斜位の粗いヘラミガキが施される。杯には34-2がある。口辺部は直線的に立ち上がり底部は丸底を呈し、口辺部と底部との境に外縫を有する。内面には



第35図 第10号住居址出土
石器実測図

全面にヘラミガキが行われ、外面は、口辺部にヨコナデ、底部にヘラケズリが施された後、粗いヘラミガキが行われる。34-3は瓶の把手である。34-4は底径3.5cmを測る手握のミニチュア品である。調整はヘラミガキが行われており、底部は中央が突出しており不安定である。この他、外面にヘラケズリされた厚手の土師器壺の胸部、内面に黒色処理された土師器杯などが出土しているが、いずれも小片のため図示し得なかった。

石器は黒曜石製の石鎌（35-1）が1点混入していた。

以上の出土遺物から、本住居址は古墳時代後期後葉の所産と考える。

11) 第11号住居址

遺構（第36図、図版十二）

本住居址は、調査区中央付近III Cか・き・く-7・8グリッド内に位置し、全体層序第IV層上面において検出された。旧河川1・第5号土坑・第6号土坑と重複関係にあり、北西部分は旧河川1を切って構築される。また、第5・6号土坑に北東コーナー付近を破壊されており、さらに、南側は調査区外にのびているため未調査である。したがって、北壁と東壁・西壁の一部が検出されたのみであるため、平面形態及び規模については全く不明であるが、東西長約10mを測る大型の住居址である。

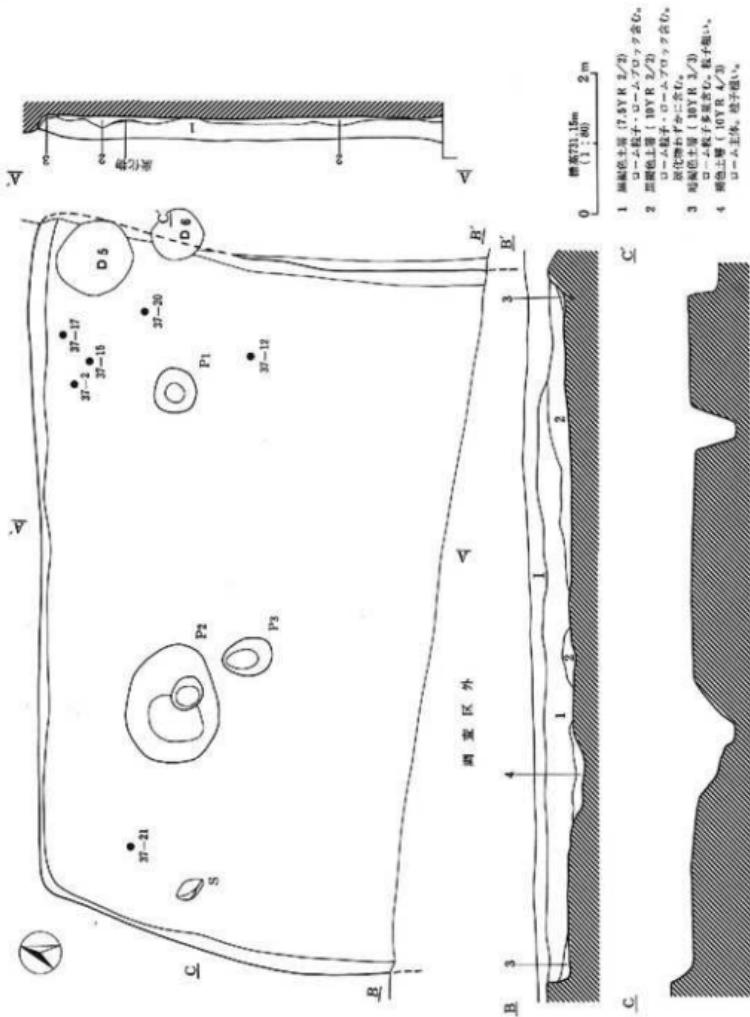
覆土は四層に分割された。第1層・第2層は覆土の大半を占めるものであり、ローム粒子・ロームブロックを含む黒褐色土層であるが、第2層は炭化物を含む。第3層は壁直下に見られる暗褐色土層で、ローム粒子を多量に含む。第4層はロームを主体とする褐色土層で、検出部分南端部にわずかにみられるのみである。

確認面からの壁高は、北壁で16~31cm、西壁で16~37cmを測るが、東壁は擾乱溝に壁体の上面を切られているため、1~21cmを計測する。擾乱溝は検出されなかった。

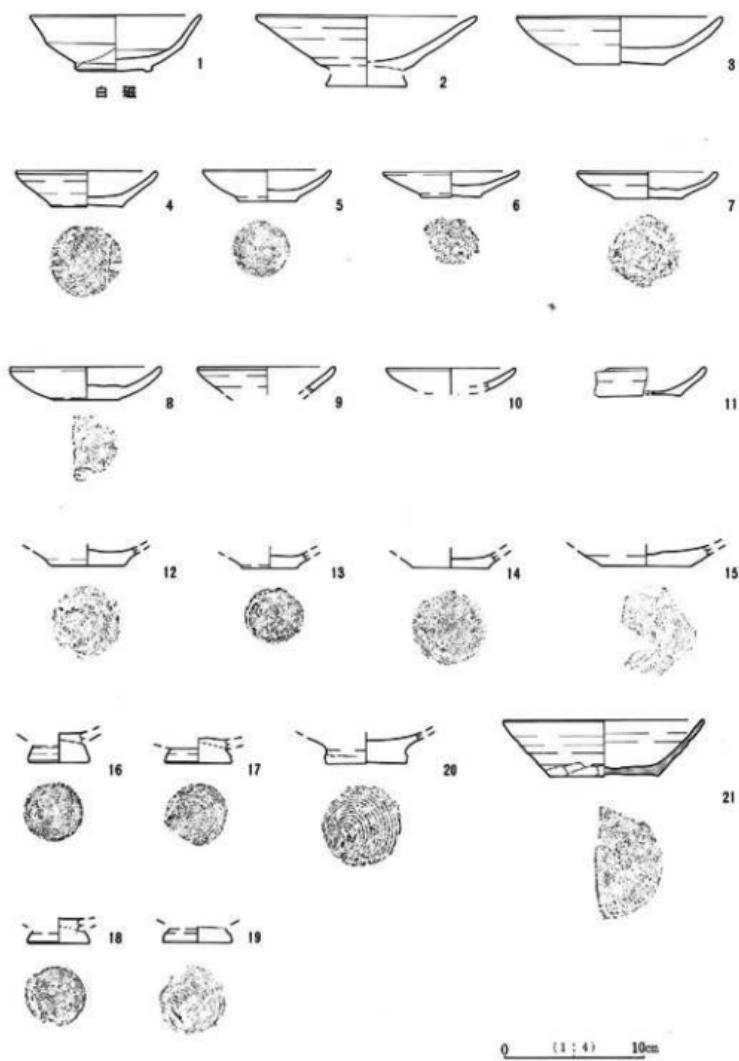
床面は地山の黄褐色ローム層を利用して構築され、全体に平坦であるが、堅固な状態とは言い難い。また、北東コーナー付近と東壁下中央付近の床面上に、炭化物を含む灰の分布が認められた。

ピットは3個検出され、P1・P2が主柱穴と思われる。P1は60×65cmの円形を呈し、64cmの深度を有する。P2は38×50cmの稍円形を呈し、58cmの深度を有するが、上面に170×130cmの稍円形で、深さ42cmを測る浅い掘り込みを持つ。P3はP2の南東の床面上より検出されたが、本住居址に伴うものかどうかは明確ではない。72×52cmの稍円形を呈し、29cmの深度を有する。

カマドは、今回調査を行なった部分においては検出されなかつたが、前述したように、本住居址の南側は調査区外にのびていることから、カマドは、南西コーナーに位置することが予想される。



第36图 第111号住宅地质图



第37图 第11号住居址出土土器实测图

第13表 第11号住居址出土土器観察表(1)

器 種 名	器 種 名	法 量	成形及び器形の特徴	調 整	備 考
37-1	白 磁 碗	12.1 4.0 5.5	体部中央に外縁を有し、口縁部 わざかに外反する。	内外面 ロクロヨコナデ。	回転実測。 色調 2.5YR8/1 (灰白色) 2.5G8/1 (灰白色)
37-2	土師質 碗	(15.6) (3.8) —	体部直線的に大きく開く。 高台部欠損。	内外面 ロクロヨコナデ。	回転実測、口縁部1/3残存。 色調 7.5YR6/4 (にぶい橙色)
37-3	土師質 皿	(14.6) (3.4) (6.4)	底部回転糸切り。	内外面 ロクロヨコナデ。	回転実測。 色調 5YR5/4 (にぶい赤褐色)
37-4	土師質 小 皿	(9.8) 2.5 5.1	底部回転糸切り。	内外面 ロクロヨコナデ。	回転実測。 →色調 7.5YR6/4 (にぶい橙色)
37-5	土師質 小 皿	(9.0) 2.2 4.1	底部回転糸切り。	内外面 ロクロヨコナデ。	回転実測。 色調 7.5YR6/4 (にぶい橙色)
37-6	土師質 小 皿	(9.6) 1.8 (4.1)	底部回転糸切り。	内外面 ロクロヨコナデ。	回転実測。 色調 7.5YR6/4 (にぶい橙色)
37-7	土師質 小 皿	(9.8) 1.9 4.8	底部回転糸切り。	内外面 ロクロヨコナデ。	回転実測。 色調 7.5YR7/6 (橙色)
37-8	土師質 小 皿	(10.6) 2.3 (4.7)	底部回転糸切り。	内外面 ロクロヨコナデ。	回転実測。 色調 5YR5/6 (明赤褐色)
37-9	土師質 小 皿	(9.6) (1.9) —		内外面 ロクロヨコナデ。	回転実測、口縁部1/4残存。 色調 5YR6/4 (にぶい橙色)
37-10	土師質 小 皿	(9.0) 1.6 —		内外面 ロクロヨコナデ。	回転実測、口縁部1/4残存。 色調 7.5YR6/4 (にぶい橙色)
37-11	土師質 小 皿	— 2.0 —	底部回転糸切り。	内外面 ロクロヨコナデ。	回転実測。 色調 7.5YR6/4 (にぶい橙色)
37-12	土師質 小 皿	— (1.0) 5.0	底部回転糸切り。	内外面 ロクロヨコナデ。	回転実測。 色調 7.5YR8/4 (浅黄橙色)
37-13	土師質 小 皿	— (0.7) 4.0	底部回転糸切り。	内外面 ロクロヨコナデ。	回転実測。 色調 7.5YR6/4 (にぶい橙色)
37-14	土師質 小 皿	— (0.7) 5.4	底部回転糸切り。	内外面 ロクロヨコナデ。	回転実測。 色調 7.5YR6/4 (にぶい橙色)
37-15	土師質 皿	— (1.0) 6.4	底部回転糸切り。	内外面 ロクロヨコナデ。	回転実測。 色調 5YR5/4 (にぶい赤褐色)
37-16	土師質 小 皿	— (2.2) 4.2	底部回転糸切り。	内外面 ロクロヨコナデ。	回転実測。 色調 7.5YR6/4 (にぶい橙色)

第14表 第11号住居址出土土器観察表(2)

排番	図 号	器 種	法 量	成形及び器形の特徴	調 整	備 考
37-17		土師質 小 盆	— (1.7) 4.6	底部回転糸切り。	内外面 ロクロヨコナデ。	回転実測。 色調 7.5YR 6/4 (にぶい橙色)
37-18		土師質 小 盆	— (1.7) 4.3	底部回転糸切り。	内外面 ロクロヨコナデ。	回転実測。 色調 7.5YR 6/4 (にぶい橙色)
37-19		土師質 小 盆	— (1.0) 5.0	底部回転糸切り。	内外面 ロクロヨコナデ。	完全実測。 色調 7.5YR 6/4 (にぶい橙色)
37-20		土師質 小 盆	— (2.2) 5.6	底部回転糸切り。	内外面 ロクロヨコナデ。	回転実測。 色調 10YR 8/4 (浅黄橙色)
37-21		須恵器 杯	(14.2) 4.0 (7.9)	体部直線的に開く。	内)ロクロヨコナデ。 外)ロクロヨコナデ、 底部・底部周縁手持ちヘラケズ リ。	回転実測、口縁部1/4残存。 胎土 白色粒子少量含む。 色調 10Y 5/1 (灰色)

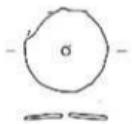
遺物の出土状況は、北東コーナー付近に集中する傾向が認められる。37-2・11・14・16・19はいずれも北東コーナー付近からの出土である。

遺物(第37・38図、図版二十・二十二)

本住居址からは、白磁・土師質土器・須恵器・鉄製品が出土しており、そのうち、白磁1点、土師質土器19点、須恵器1点、鉄製品1点を図示した。

37-1は白磁の碗である。体部は内湾して立ち上がり、端部でわずかに外反する。

37-2はロクロ成形による土師質土器の碗である。体部は直線的に大きく開き、底部は欠損しているが、高台が貼り付けされていたものと思われる。37-3~20は、すべてロクロ成形による土師質土器の皿であり、底部の切り離しは回転糸切り、未調整である。法量から、大型のものを皿、小型のものを小皿とした。皿とした大型品には37-3・15の2点がある。口径14.6cm、器高3.4cm、底径6.4cmを測る。37-4~14は、小皿とした小型品の一群で、本遺跡から出土した土師質土器で最も多いものである。口径は9.0~10.6cm、器高は1.8~2.5cm、底径は4.0~5.4cmの範囲



に納まるものである。体部は、皿・小皿ともわずかに内湾して、大きく開く形態をとる。37-16・19は柱状の高台部で、底径4.2~5.0cmを測る。体部は存在しないため不明であるが、口径10cm前後の小型品であると思われる。37-21はロクロ成形による須恵器の杯で、体部は直線的に開き、底部および底部周縁部には手持ちヘラケズリが行われる。

38図 第11号住居址
出土鉄製品実測図

鉄製品には38-1の紡錘車がある。径4.4cmを測り、X線写真により中央部に径4mmの孔が確認された。

以上、本住居址から出土した白磁碗(37-1)は、森田・横田分類の

「白磁碗IV類」にあたり、12世紀前半に位置付けることができ、これをもって本住居址の所産期と考る。

(註1) 長野県埋蔵文化財センター 愿 明芳氏のご教示による。

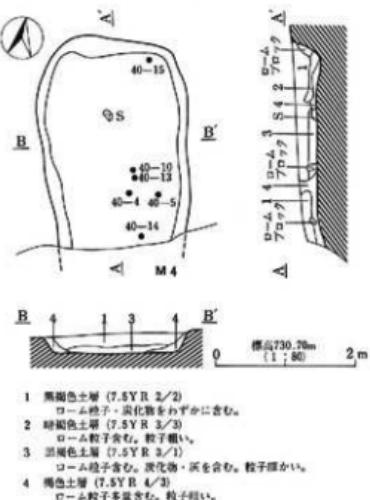
第2節 穹穴遺構

1) 第1号竖穴墓

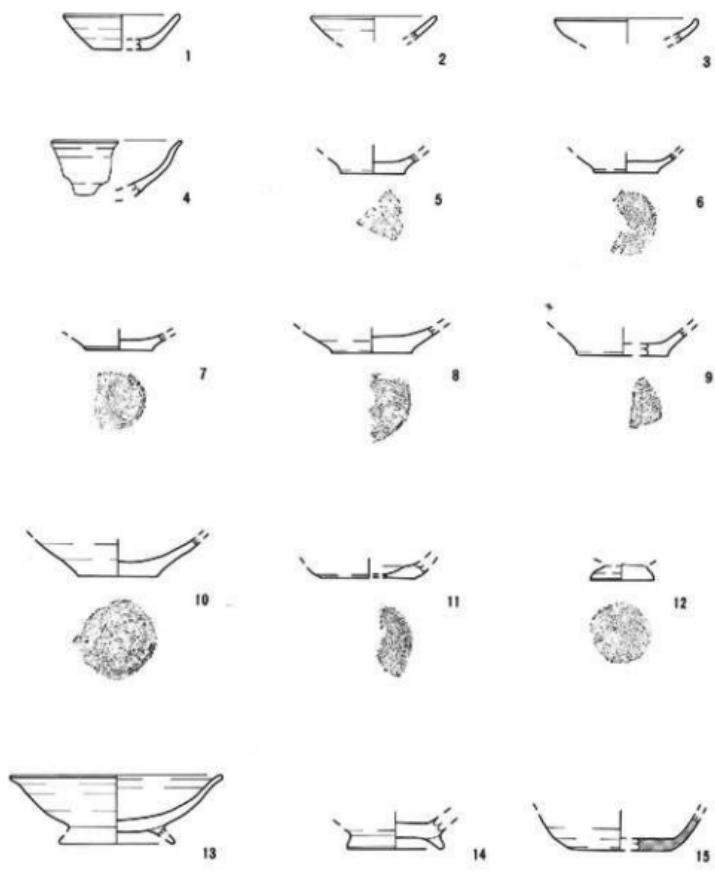
遺稿（第39回、圖版十三）

本址は、調査区中央西側IIIHc-8・Mあ-8グリッド内に位置し、全体層序第IV層上面において検出された。第4号溝状遺構と重複関係にあり、南壁部分を切られる。したがって、北盤長132cmを計測し得るのみであるが、南北長約340cm、東西長約220cmを測る南北に長い隅丸長方形を呈するものと考えられる。

覆土は四層に分割された。第1層は炭化物をわずかに含む黒褐色土層で、覆土の主体を占める



第39回 第1号堅穴遺構案測図



第40図 第1号竪穴造構出土土器実測図

第15表 第1号堅穴造構出土土器観察表

件番 図 号	器 種	法 量	成形及び器形の特徴	調 整	備 考
40-1	土師質 小皿	(8.0) 2.9 (4.2)	底部回転糸切り。	内外面 ロクロヨコナデ。	回転実測。 色調 7.5Y R6/4 (にぶい橙色)
40-2	土師質 小皿	(9.0) (1.7)		内外面 ロクロヨコナデ。	回転実測、口縁部1/4残存。 色調 5 Y R6/4 (にぶい橙色)
40-3	土師質 小皿	(9.8) (1.7) —		内外面 ロクロヨコナデ。	回転実測、口縁部1/4残存。 色調 10 Y R6/4 (にぶい黄橙色)
40-4	土師質 碗	— (3.9) —	体部内溝して立ち上がり、端部で外反する。	内外面 ロクロヨコナデ。	破片実測。 色調 10 Y R6/3 (にぶい黄橙色)
40-5	土師質 小皿	— (1.1) (4.5)	底部回転糸切り。	内外面 ロクロヨコナデ。	回転実測。 色調 7.5 Y R7/3 (にぶい橙色)
40-6	土師質 小皿	— (0.8) (4.8)	底部回転糸切り。	内外面 ロクロヨコナデ。	回転実測。 色調 7.5 Y R7/4 (にぶい橙色)
40-7	土師質 小皿	— (1.2) (4.5)	底部回転糸切り。	内外面 ロクロヨコナデ。	回転実測。 色調 7.5 Y R6/4 (にぶい橙色)
40-8	土師質 皿	— (1.7) (5.9)	底部回転糸切り。	内外面 ロクロヨコナデ。	回転実測。 色調 7.5 Y R6/4 (にぶい橙色)
40-9	土師質 皿	— (1.6) (6.5)	底部回転糸切り。	内外面 ロクロヨコナデ。	回転実測。 色調 7.5 Y R6/4 (にぶい橙色)
40-10	土師質 皿	— (2.5) (5.6)	底部回転糸切り。	内外面 ロクロヨコナデ。	回転実測。 色調 5 Y R6/4 (淡橙色)
40-11	土師質 皿	— (1.2) (6.8)	底部回転糸切り。	内外面 ロクロヨコナデ。	回転実測。 色調 7.5 Y R6/4 (にぶい橙色)
40-12	土師質 小皿	— (1.0) 4.5	柱状高台 底部回転糸切り。	内外面 ロクロヨコナデ。	完全実測。 色調 7.5 Y R6/4 (にぶい橙色)
40-13	土師質 碗	(15.0) 4.0 —	体部内溝して立ち上がり、端部で外反する 貼り付け高台。	内外面 ロクロヨコナデ。	回転実測。 色調 5 Y R6/4 (にぶい橙色)
40-14	土師質 碗	— (2.3) (6.9)	貼り付け高台。	内外面 ロクロヨコナデ。	回転実測。 色調 7.5 Y R6/4 (にぶい橙色)
40-15	須恵器 环	— (2.6) (7.1)		内外面 ロクロヨコナデ。	回転実測。 色調 2.5 Y R7/2 (灰黄色)

ものである。第2層は北壁下にみられる暗褐色土層、第3層は炭化物・灰を含む黒褐色土層で、中央床面上に堆積する。第4層はローム粒子を多量に含む褐色土層で、壁下にみられる第一次堆積土である。

確認面からの壁高は9~39cmを測り、南へ行くにしたがって低くなる。南壁は前述したようにも残存しない。壁体は地山の黄褐色ローム層によって構築され、床面から急傾斜で立ち上がる。壁構は検出されなかった。

床面は、地山の黄褐色ローム層を利用して構築されており平坦であるが、堅固な状態とは言い難い。

ピット・カマド等の付属施設は検出されなかった。

遺物の出土状況は、特に集中する箇所は認められないが、南半部より比較的多くの土器が出土している。

遺物（第40・41図、図版二十一・二十二）

本址からは、土師質土器・須恵器・鉄製品が出土しており、そのうち、土師質土器14点、須恵器1点、鉄製品1点を図示した。土師質土器の器種には皿・椀がある。

40-1~3・5~12はロクロ成形による土師質土器皿であり、ロクロからの切り離しはすべて回転糸切り、未調整である。法量により大型品と小型品とに二大別され、大型品を皿、小型品を小皿とした。小皿には40-1~3・5~7の6点がある。口径8.0~9.8cm、底径4.2~4.8cmの範囲に納まり、器高は3cm前後を測るものである。体部は直線的あるいはわずかに内湾して大きく開く。皿には40-8~11の4点があるが、いずれも底部のみである。底径は5.6~6.8cmを計測する。40-12は、底径4.5cmを測る小型の柱状の高台部で、第11号住居址から出土した37-16~19と同様のものである。椀には40-4・13・14がある。体部は内湾して立ち上がり端部でわずかに外反する。高台は貼り付け高台である。須恵器坏には40-15があり、鉄製品には41-1がある。

以上、本址から出土した土師質土器皿・小皿類は、第11号住居址から出土した土師質土器と同様な土器群である。したがって本址の所産期は、第11号住居址とほぼ同時期（12世紀前半）であると考える。



第41図 第1号窓穴遺構出土
鉄製品実測図

2) 第2号堅穴遺構

遺構（第42図、図版十三）

本址は、調査区東側IIWあ・い-7・8グリッド内に位置し、全体層序第IV層上面において検出された。他遺構との重複関係はないものの、耕作および擾乱によって西側を破壊される。したがって、北壁長248cm、東壁長188cmを計測し得るのみであるが、南北長約250cm、東西長約310cmを測る、東西にやや長い隅丸長方形を呈するものと思われる。

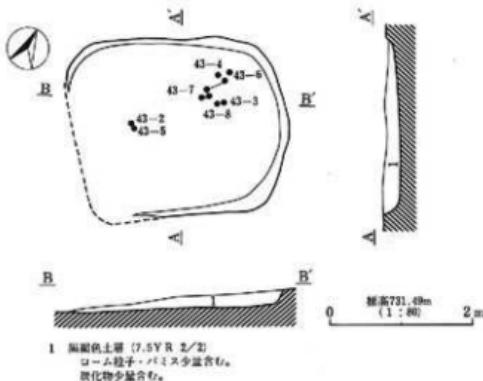
覆土は、炭化物を少量含む黒褐色土層一層からなる。

確認面からの壁高は前述したように、耕作等により西側を破壊されているため、0~26cmを測り、西へ行くにしたがって低くなる。

床面は、地山の黄褐色ローム層をそのまま利用して構築されるが、堅固な状態とは言い難い。

ピット・カマド等の付属施設は検出されなかった。

遺物の出土状況は、北東コーナー付近に集中する傾向が認められる。

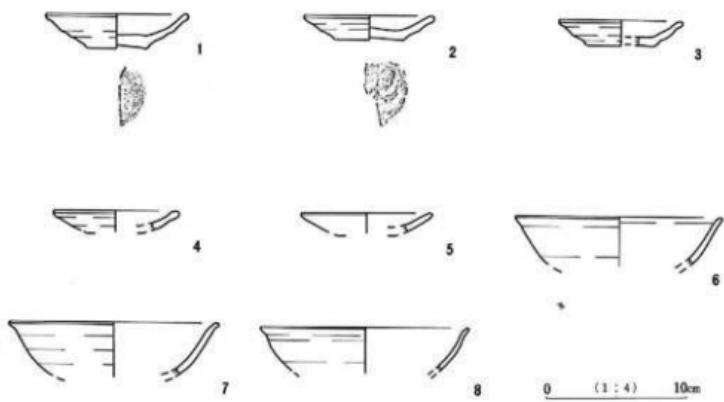


第42図 第2号堅穴遺構実測図

遺物（第43図、図版二十一）

本址からは、土師質土器・土師器・須恵器が出土しており、そのうち土師質土器8点を図示した。土師器・須恵器は混入品である。土師質土器の器種には小皿・碗がある。

43-1~5はロクロ成形による土師質土器小皿であり、ロクロからの切り離しは回転糸切り、未調整である。体部は短かく、直線的あるいはわずかに内湾して大きく開く。法量は口径8.8~10.0cm、器高1.7~2.9cm、底径4.3~5.0cmの範囲に納まるものである。特に43-2・3・4は、



第43図 第2号堅穴造構出土土器実測図

第16表 第2号堅穴造構出土土器観察表

掲 番 号	器 種	法 量	成形及び器形の特徴	調 整	備 考
43-1	土師質 小 皿	(10.0) 2.9 (4.3)	底部回転糸切り。	内外面 ロクロココナデ。	回転実測、口縁部1/3残存。 色調 5 Y R 6/4 (にぶい褐色)
43-2	土師質 小 皿	(9.0) 1.7 (5.0)	底部回転糸切り。	内外面 ロクロココナデ。	回転実測、口縁部1/4残存。 色調 5 Y R 6/4 (にぶい褐色)
43-3	土師質 小 皿	(8.8) 1.8 (4.8)	底部回転糸切り。	内外面 ロクロココナデ。	回転実測、口縁部1/5残存。 色調 7.5 Y R 7/4 (にぶい褐色)
43-4	土師質 小 皿	(8.8) (1.4) —		内外面 ロクロココナデ。	回転実測。 色調 5 Y R 6/4 (にぶい褐色)
43-5	土師質 小 皿	(9.2) (1.4) —		内外面 ロクロココナデ。	回転実測、口縁部1/4残存。 色調 7.5 Y R 6/4 (にぶい褐色)
43-6	土師質 碗	(14.6) (3.4) —	体部内溝して開き、端部でわざ かに外半気味となる。	内外面 ロクロココナデ。	回転実測、口縁部1/4残存。 色調 7.5 Y R 7/4 (にぶい褐色)
43-7	土師質 碗	(14.6) (4.2) —	体部内溝して開き、端部でわざ かに外半する。	内外面 ロクロココナデ。	回転実測、口縁部1/4残存。 色調 7.5 Y R 7/4 (にぶい褐色)
43-8	土師質 碗	(14.8) (3.1) —	体部内溝して開き、端部でわざ かに外半する。	内外面 ロクロココナデ。	回転実測、口縁部1/4残存。 色調 5 Y R 7/4 (にぶい褐色)

比較的厚手で、口径8.8~9.0cm、器高1.7~1.8cmを測り、形態・法量ともほぼ一致する。43-1は、口径10.0cm、底径4.3cmと口径に比して底径が小さい。純には43-6~8の3点がある。いずれも底部を欠損しているが、高台が貼り付けされていたものと思われる。体部は内湾して立ち上がり、端部でわずかに外反する。口径は14.6~14.8cmを計測し、形態・法量ともほぼ一致する。

このほか、底径6cm前後を測る大型の皿があるが、小片のため図示し得ない。

以上、本址から出土した土師質土器小皿は第11号住居址・第1号竪穴遺構の土師質土器小皿に類似しており、本址は第11号住居址・第1号竪穴遺構とはほぼ同時期の所産と考える。

3) 第3号竪穴遺構

遺構(第44図、図版十三)

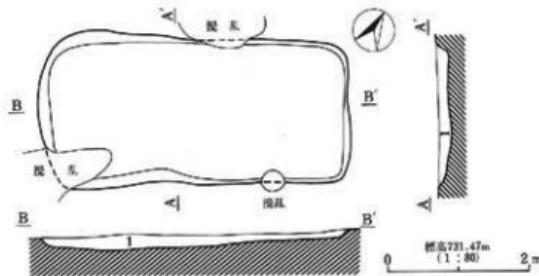
本址は、調査区東側II Rけ・こ-8・9グリッド内に位置し、全体層序第IV層上面において検出された。他遺構との重複関係はないものの、攪乱によって南西コーナーおよび北壁・南壁の一部を破壊される。したがって、北壁長400cm、東壁長172cmを計測し得るのみであるが、南北長約200cm、東西長約440cmを測る、東西に長い隅丸長方形を呈する。

覆土は、第1層黒色土層一層からなる。

確認面からの壁高は、北壁で3~19cm、南壁で9~14cm、東壁で3~12cm、西壁で8~19cmを測る。壁溝は検出されなかった。

床面は、地山の黄褐色ローム層をそのまま利用して構築されるが、堅固な状態とは言い難い。ピット・カマド等の付属施設は検出されなかった。

遺物の出土状況は、覆土中から極く少量の縄文土器・土師器・土師質土器が出土したのみである。



1 黒色土層 (7.5YR 2/8)
ローム粒子少量含む。粒子細かい。

第44図 第3号竪穴遺構実測図

遺物（第45図）

本址からは、極く少量の縄文土器・土師器・土師質土器が出土したのみでありそのうち縄文土器1点を図示した。

45-1は、縄文時代後期掘之内式の鉢の口縁部片であり混入品である。

本址から出土した土師質土器皿は極めて少量であり、いずれも小片のため図示し得ないが、第11号住居址、第1・2号竪穴遺構の皿類と同様なものであり、本址の所産期は第11号住居址、第1・2号竪穴遺構と

第17表 第3号竪穴遺構出土土器観察表

探査図 番号	器種	法量	成形及び器形の特徴	調査	備考
45-1	鉢	(3.7)			破片実測。 色調 7.5 YR 7/2 (野鶴灰色)

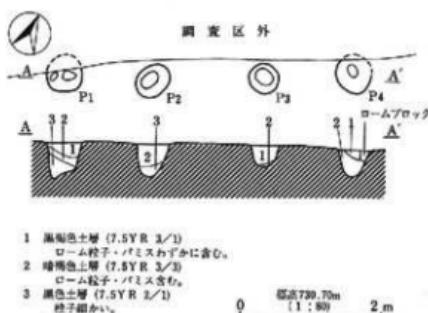
ほぼ同時期と考えられる。

第3節 掘立柱建物址

1) 第1号掘立柱建物址

遺構（第46図、図版十四）

本址は、調査区西側III M c-8、III R a-9グリッド内に位置し、全体層序第IV層上面において検出された。他遺構との重複関係はないものの、北側大半が調査区外であるため、南側の柱列



第46図 第1号掘立柱建物址実測図

が検出されたのみであり、その方位はN-64°-Eを示す。したがって、形態は不明であるが、2間あるいは3間×3間の側柱式となるものと思われる。東西長は426cmを測り、柱間寸法は、128~164cmである。柱穴は径40~50cm前後の円形あるいは椭円形を呈し、深さは32~56cmで、両端の柱穴が若干深くなる。

覆土は、三層に分割された。

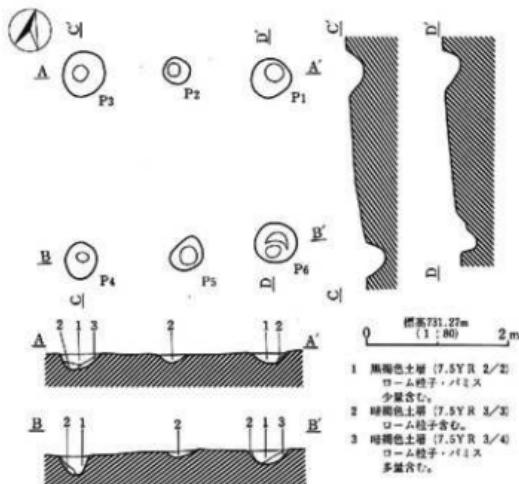
柱痕は検出されなかった。

遺物の出土はなく、所産期については不明である。

2) 第2号掘立柱建物址

遺構(第47図、図版十四)

本址は、調査区中央付近IIIHか・き-6・7グリッド内に位置し、全体層序第IV層上面において検出された。他遺構との重複関係はない。平面形は、方形を呈する側柱式の建物址である。長軸方位はN-78°-Eを示す。規模は、東西2間276cm、南北1間260cmを測り、柱間寸法は桁行120~152cm、梁間256~260cmである。柱穴の平面形は、いずれも円形あるいは椭円形を呈するが、規模は、中に配されるP2・P5が、径36~52cm、深さ12~14cmと比較的小型であるのに対し、四隅に配されるP1・P3・P4・P6の四本は、径56~64cm、深さ24~32cmを測り、他の二本



第47図 第2号掘立柱建物址実測図

と比較すると大型で深くなる。

覆土は、三層に分層された。

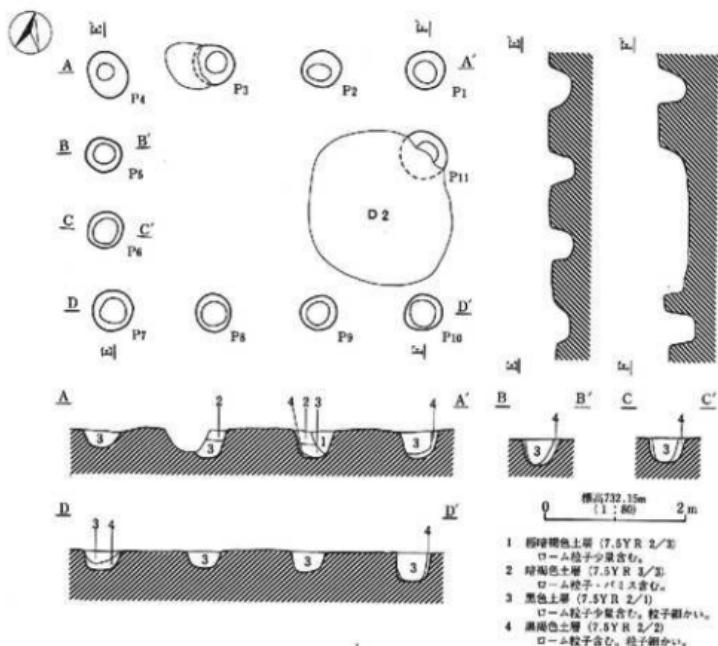
柱痕は検出されなかった。

遺物の出土ではなく、所産期については不明である。

3) 第3号掘立柱建物址

遺構（第48図、図版十五）

本址は、調査区中央付近III H え・おー3・4グリッド内に位置し、全体層序第IV層上面において検出された。第2号土坑と重複関係にあり、P11の南半部を切られる。また、P10・P11間に柱穴が存在したものと思われるが、第2号土坑によって破壊され残存しない。平面形は、東西に長い長方形を呈する側柱式の建物址である。長軸方位はN-81°-Eを示す。規模は、東西3間456cm、南北3間344cmを測る。柱間寸法は、桁行中央(P2-P3・P8-P9)が146cm・144cm、



第48図 第3号掘立柱建物址実測図

その他が146~160cm、梁間中央（P 5~P 6）が108cm、その他が114cm・118cmを測り、桁行・梁間とも中央の柱間寸法が他に比べてわずかではあるが短かい。柱穴の平面形は円形を基調とし、北西隅に配されるP 4が椭円形を呈する。またその規模は、径50~60cmを主体とし、深さは最も深いP 1・P 3で42cm、最も浅いP 4・P 8で26cmを計測する。

覆土は、四層に分割された。

柱痕は検出されなかった。

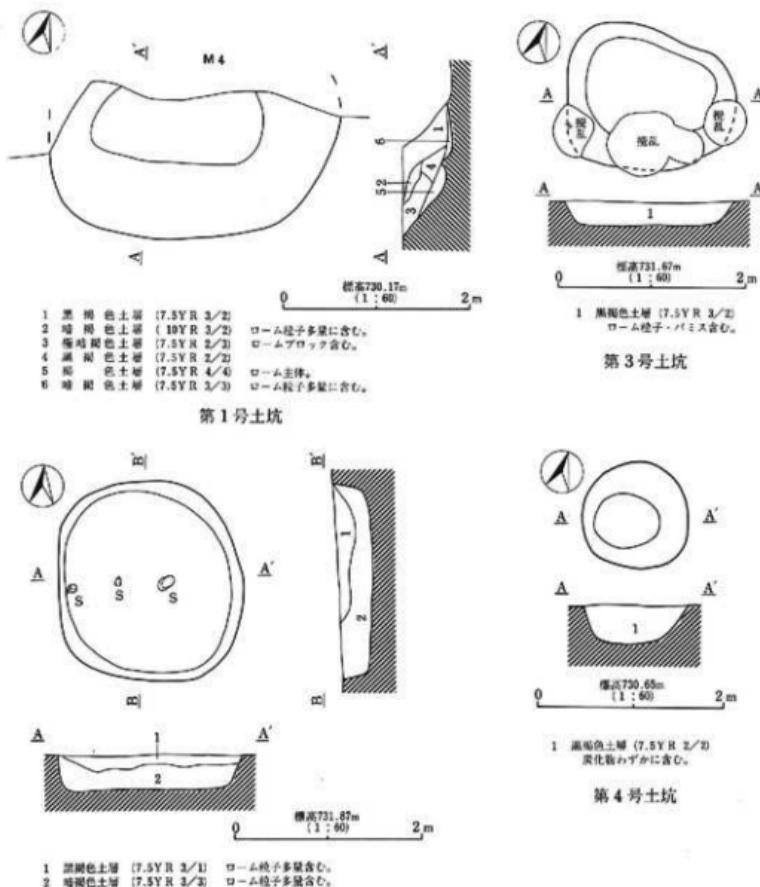
遺物の出土はなく、所産期については不明である。

第18表 墨立柱建物址一覧表

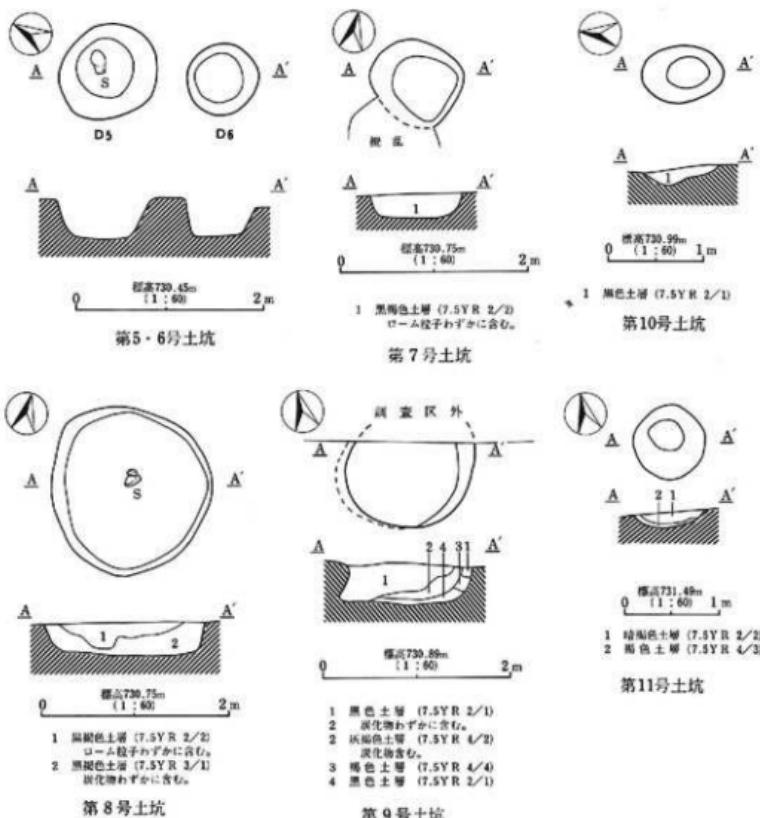
遺構名	平面形 形 態	長軸方位	規模 (cm)	柱間寸法 (cm)	柱穴板模 (cm)			柱穴 平面形	備考	
					N	長径	短径	深さ		
F 1	長方形? 側柱式?	N-64°-E	?×3間 426	桁 128 ~164	1	52	—	56	（円形）	北側大平調査区外
					2	52	44	52	椭円形	
					3	44	40	32	円形	
					4	52	—	40	（円形）	
F 2	方形 側柱式	N-78°-E	1間×3間 260×276	桁 120 ~152	1	56	56	24	円形	第2号土坑に 切られる
					2	40	36	14	円形	
					3	64	60	26	円形	
				梁 256 ~260	4	52	46	28	椭円形	
					5	52	44	12	椭円形	
					6	60	56	32	円形	
F 3	長方形 側柱式	N-81°-E	3間×3間 344×456	桁 144 ~160	1	56	54	42	円形	第2号土坑に 切られる
					2	56	52	41	円形	
					3	60	—	42	（円形）	
				梁 108 ~118	4	68	54	26	椭円形	
					5	52	52	37	円形	
					6	52	49	33	円形	
					7	57	58	28	円形	
					8	56	51	26	円形	
					9	52	49	31	円形	
					10	52	52	41	円形	
					11	68	—	36	（円形）	

第4節 土坑

本遺跡からは、総数で16基の土坑が検出されているが、出土遺物等からその性格および所産期を推定し得るものは少ない。各土坑の形態・規模等については第19表土坑一覧表に記した。



第49図 第1~4号土坑実測図

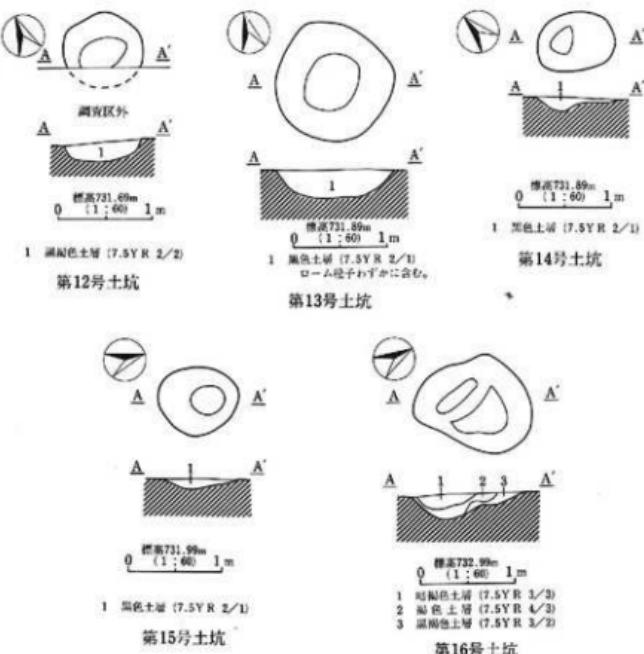


第50図 第5-11号土坑実測図

調査区内での土坑の分布は、調査区中央付近、III C・H区、調査区東側、II R区の二箇所に集中する傾向が認められる。各土坑の平面形態は円形または梢円形を基本とし、断面形は「U」字状・逆台形状または皿状を呈するものが主体となるが、袋状となるもの、テラスを有するものも存在する。ここでは、そのうち主なものについて述べておくこととする。

遺構・遺物（第49・50・51図、図版十五・十六・十七）

第1号土坑は、調査区中央東側III Mいー9・10グリッド内に位置する。第4号溝状遺構・旧河川1と重複関係にあり、南側は旧河川1を切って構築され、北半部は第4号溝状遺構によって破壊される。したがって、平面形態・規模等については不明であるが、東西300cm前後を測る梢円形



第51図 第12~16号土坑実測図

を量するものと思われる。深さは54cmを測る。

遺物は覆土中より極く少量の土器が出土したのみである。器種には外面にヘラケズリされる壺、内面に黒色処理される壺があるが、いずれも小片のため図示し得るものはなく、本土坑の時期を決定する資料とはなり得ない。したがって、時期・性格については不明であるが、旧河川1との重複関係から、平安時代以降のものであると言うことができる。

第2号土坑は、調査区中央付近III H e - 3・4グリッド内に位置し、第2号掘立柱建物址を切って構築される。南北213cm、東西198cmを測るほぼ円形のプランを量し、断面形は逆台形状となる。深さは45cmを測る。覆土は二層に分割され、第2層暗褐色土層が主体を占める。

遺物は土器・須恵器が出土しているが極めて少量である。土器には、内面に黒色処理され、底部は回転糸切り未調整の壺、ヘラミガキの行われる壺があり、須恵器には壺の胴部片があるが、いずれも細片のため図示し得るものはなく、時期・性格については判然としない。

第4号土坑は、調査区中央III C c - 8グリッド内に位置し、第7号住居址・旧河川1を切って

構築される。東西118cm、南北116cmを測る円形のプランを呈し、断面形は逆台形状となる。深さは42cmを測る。覆土は、第1層黒褐色土層一層からなる。

本土坑からの出土遺物は、土師器・須恵器の細片が極く少量であり、所産期を決定することは困難であるが、第7号住居址・旧河川1との重複関係から、平安時代以降の所産としておく。

第5・6号土坑は、調査区中央付近III Cか-7グリッド内に位置し、第11号住居址を切っている。第5号土坑は110×96cm、第6号土坑は径76cmの円形のプランを呈し、それぞれ45cm、41cmの深度を有する。

本土坑からの出土遺物は皆無である。

第7・8号土坑は、調査区中央付近III Cう・え-8グリッド内に位置し、第10号住居址を切って構築される。第7号土坑は南側を搅乱によって切られるが、東西94cmの楕円形を呈し、深さは29cmを測る。第8号土坑は186×171cmのほぼ円形を呈し、深さは37cmを測る。断面形はいずれも逆台形状となる。第7号土坑からの出土遺物は皆無であり、また、第8号土坑の出土遺物も土師器・須恵器の小片であるため、時期決定の資料とはなり得ないが、第10号住居址との重複関係から、第10号住居址（古墳時代後期）より新しいものであると言うことができる。

第19表 土坑一覧表

遺構名	検出位置	平面プラン			長軸方位	深さ	備考
		形態	長軸長	短軸長			
D 1	III M い-9+10	(椭円形)	-	-	-	54	旧河川1を切る M4に切られる
D 2	III H え-3+4	円形	213	198	N-7°-W	45	F2を切る
D 3	III H え-4	椭円形	186	150	N-82°-E	28	搅乱に南側を切られる
D 4	III C こ-8	円形	118	116	N-60°-W	42	H7・旧河川1を切る
D 5	III C か-7	円形	110	96	N-60°-W	45	H11を切る
D 6	III C か-7	円形	76	76	-	41	H11を切る
D 7	III C え-8	椭円形	94	-	N-70°-W	29	H10を切る
D 8	III C う-8	円形	186	171	N-50°-W	37	H10を切る
D 9	II W う-3	(円形)	-	-	-	47	北半部調査区外
D 10	II W あ-5	椭円形	88	62	N-3°-W	23	
D 11	II R け-5	円形	82	76	N-21°-E	27	
D 12	II S く-1	(円形)	88	-	-	23	南半部調査区外
D 13	II R か-7	円形	132	128	N-9°-W	32	
D 14	II R お-8	椭円形	82	64	N-43°-W	16	
D 15	II R え-8	椭円形	86	74	N-16°-E	15	
D 16	II S い-2	椭円形	120	96	N-65°-E	34	

第5節 溝状遺構・旧河川

1) 溝状遺構

遺構（第52・53・54・55図）

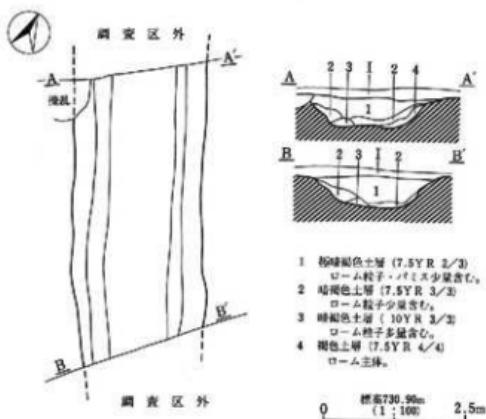
第1号溝状遺構は、調査区西側III R区に位置し、全体層序第IV層上面より検出された。他遺構との重複関係はない。溝幅約230cm、検出長5.3mを測り、南北に直線的にのびる溝であるが、現道より南側の調査区においては検出されなかった。深さは北端部で49cm、南端部で60cmを測り、北から南に向かってレベルを低下させ、北端と南端の比高差は32cmを測る。

覆土は四層に分割されたが、第1層が主体を占める。

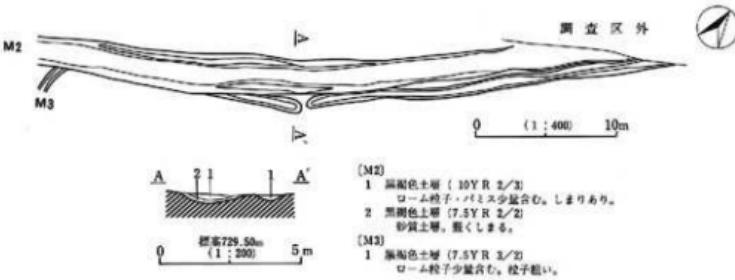
本遺構からは土器片・須恵器片の小片が極く少量出土したのみである。

第2号溝状遺構は、調査区西側III N・S区に位置し、全体層序第IV層上面より検出された。第3・4号溝状遺構と重複関係にあり、双方を切っている。本調査での検出長は42.5mを測るが、本址は、本遺跡の西側に隣接する下芝宮遺跡I・II（昭和62・63年度発掘調査）においても検出されており（M5）、全長74.5mを計測する。深さは0～37cmを測り、東から西に向かって徐々にレベルを低下させ、東端と西端の比高差は116cmを測る。

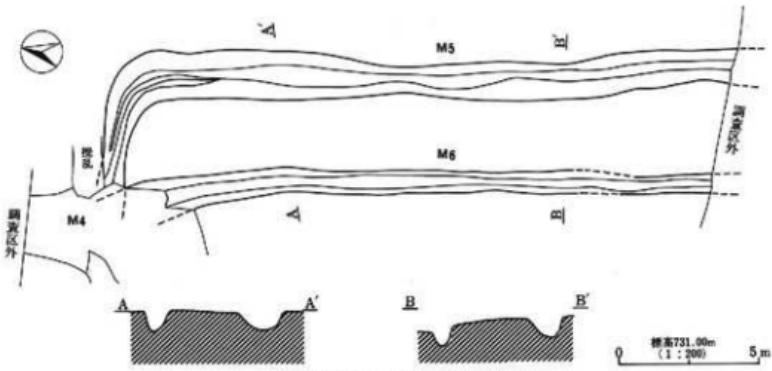
覆土は二層に分割され、底面は固くしまっており、本遺構は道路跡と考えられる。



第52図 第1号溝状遺構実測図



第53図 第2・3号溝状遺構実測図



第54図 第5・6号溝状遺構実測図

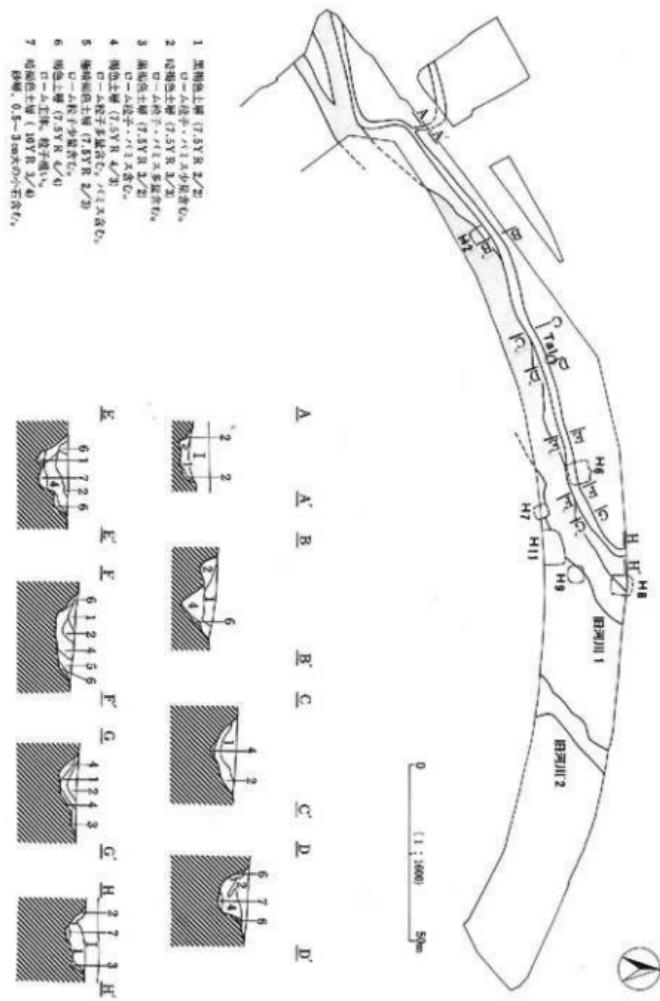
本遺構からは土器・土器質土器が少量出土している。

第3号溝状遺構は、調査区西側III N・S区に位置し、全体層序第IV層上面より検出された。第2・4号溝状遺構と重複関係にあり、第2号溝状遺構に切られ、第4号溝状遺構を切っている。第2号溝状遺構とほぼ平行しており、調査区西端で南に屈曲して、下芝宮遺跡I・II M2に連結する。検出長約46mを計測し、中央付近で一度断続する。深さは12~21cmを測り、東から西に向かって傾斜し、東端と西端の比高差は110cmを測る。

覆土は、本遺跡においては第1層黒褐色土層一層であるが、下芝宮遺跡I・IIにおいて第1層下に砂粒を含む暗褐色土層がみられており、流路と考えられる。

本遺構からは土器・須恵器の細片が極めて少量出土したのみである。

第4号溝状遺構は、調査区のほぼ中央を東西に走る溝で、第2・3号溝状遺構に切られ、第2・



第554图 第4号堤状造構、旧河川1・2実測図

6号住居址、第1号竪穴遺構、第1号土坑、旧河川1を切っている。検出長144mで、西方の下芝宮遺跡I・IIでS字状に屈曲しており全長は約200mとなる。また、西端部で分岐し、下芝宮遺跡IIIのM11に連結すると考えられるが明確ではない。深さは50~100cm前後を測り、東から西に向かってレベルを低下させ、東端と西端の比高差は約3mを測る。

覆土は七層に分割され、最下層に第7層砂層が堆積しており底面は凹凸が激しく、本遺構は流路と考えられる。

本遺構からは土師器・土師質土器・須恵器が出土している。

第5・6号溝状遺構は、調査区中央東側III C区に位置し、第9号住居址、旧河川1を切る。ほぼ南北に平行しており、第5号溝状遺構は北端でL字状に屈曲して第4号溝状遺構に接続するが、新旧関係は不明である。第5号溝状遺構は検出長25.5m、溝幅75~175cmを測り、屈曲する部分で最も広くなる。第6号溝状遺構は検出長21m、溝幅50~90cmを測る。深さは第5号溝状遺構が15~39cm、第6号溝状遺構が16~33cmで、いずれも北から南に向かって徐々にレベルを低下させ、北端と南端の比高差はそれぞれ44cm、42cmを計測する。

第5号溝状遺構からの出土遺物は皆無であり、第6号溝状遺構からは土師器・土師質土器が少量出土している。

遺物（第56・57図、図版二十一・二十二）

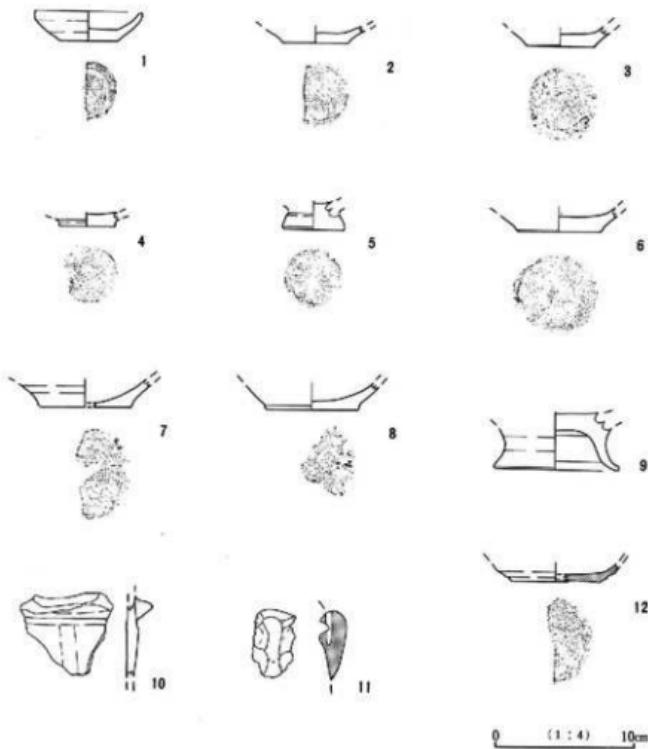
第1号溝状遺構からは土師器・須恵器が少量出土したのみであり、図示し得たものはない。土師器は内面に黒色処理され、底部は回転糸切り未調整である。須恵器には底部回転糸切り未調整の環の小片がある。いずれも平安時代のものと考えられる。

第2号溝状遺構からは土師器・土師質土器の小片が極く少量出土しているのみである。土師器の器種には甕・环があり、土師質土器には皿があるがいずれも混入品である。

第6号溝状遺構からは土瓶器甕・羽釜、土師質土器皿があるが、いずれも小片のため図示し得ない。

第4号溝状遺構からは、土師質土器・土師器・須恵器・鉄製品が出土しており、そのうち土師質土器10点、須恵器2点、鉄製品1点が図示し得た。土師質土器には皿・椀・羽釜があり、須恵器には四耳壺・环がある。

56-1~8はロクロ成形による土師質土器皿で、底部の切り離しはいずれも回転糸切り、未調整である。法量により、小型の小皿と大型の皿に分類される。小型品の小皿は底径4.0~4.8cmで、56-1は口径7.6cm、器高2.1cm、底径4.2cmを測る。また、56-5は柱状の高台を持つ小皿である。大型品の皿は底部片のみであるが、底径は6.0~6.6cmを測る。56-9は、端部で外反する足高の高台をもつ碗である。羽釜には56-10がある。56-11は突帯付四耳壺の耳部で、上方から径5mmの穿孔が行われるが、孔は下まで貫通するものではなく、途中で止まる。また、突帯の断面形は



第56図 第4号溝状造構出土土器実測図



三角形である。56-12は須恵器坏で、底部は回転糸切り未調整である。この他、土師器には壺・坏、須恵器には壺・坏・蓋があるが、小片のため図示し得なかった。

鉄製品には57-1があり、刀子の刃部と思われる。

以上、本址の出土遺物は古墳時代後期から平安時代まで多岐にわたっているため、時期決定は困難であり、重複関係から平安時代以降といい得るのみである。

第20表 第4号溝状遺構出土土器観察表

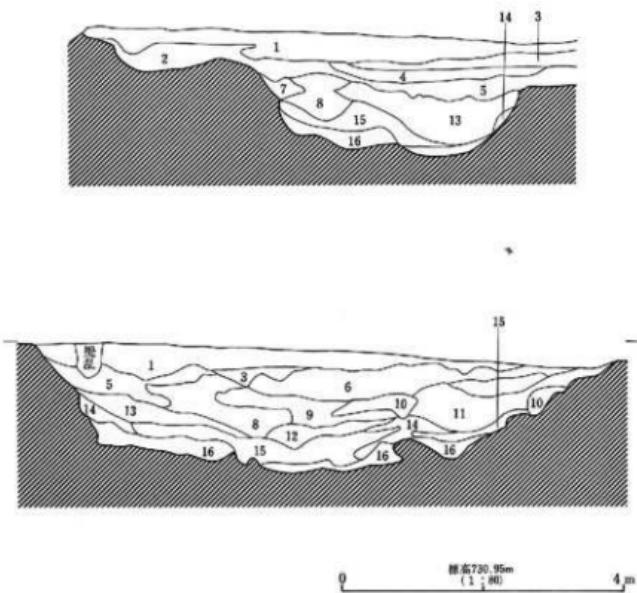
件番号	器種	法量	成形及び器形の特徴	調整	備考
56-1	土師質小皿	(7.6) 2.1 (4.2)	底部回転糸切り。	内外面 ロクロヨコナデ。	回転実測。 色調 7.5Y R6/4 (にぶい褐色)
56-2	土師質小皿	— (1.4) 4.6	底部回転糸切り。	内外面 ロクロヨコナデ。	回転実測。 色調 5Y R5/4 (にぶい赤褐色)
56-3	土師質小皿	— (1.0) 4.8	底部回転糸切り。	内外面 ロクロヨコナデ。	回転実測。 色調 5Y R5/4 (にぶい赤褐色)
56-4	土師質小皿	— (0.9) 4.0	底部回転糸切り、摩滅著しい。	内外面 ロクロヨコナデ。	回転実測。 色調 5Y R7/6 (橙色)
56-5	土師質小皿	— (1.9) 4.2	底部回転糸切り。 柱状高台。	内外面 ロクロヨコナデ。	完全実測。 色調 10Y R6/3 (にぶい黄橙色)
56-6	土師質皿	— (1.1) 6.0	底部回転糸切り。	内外面 ロクロヨコナデ。	回転実測。 色調 7.5Y R6/4 (にぶい褐色)
56-7	土師質皿	— (1.6) (6.6)	底部回転糸切り。	内外面 ロクロヨコナデ。	回転実測。 色調 7.5Y R4/4 (褐色)
56-8	土師質皿	— (1.8) (6.6)	底部回転糸切り。	内外面 ロクロヨコナデ。	回転実測。 色調 5Y R5/6 (明赤褐色)
56-9	土師質碗	— (3.0) 8.8	胎内付け高台。 縦縫で外反する。	内外面 ロクロヨコナデ。	回転実測。 色調 5Y R6/6 (橙色)
56-10	土器器羽釜	— (5.7) —		内外面 ナデ。	破片実測。 色調 7.5Y R5/4 (にぶい褐色)
56-11	須恵器四耳壺	— (4.9)	耳部断面「D」字状を呈し、上方からの孔(径5mm)は中途で止まる。 突帯断面三角形。	外面 指オサエ。	破片実測。 色調 2.5Y 4/1 (黄灰色)
56-12	須恵器杯	— (1.2) (3.2)	底部回転糸切り。	内外面 ロクロヨコナデ。	回転実測。 色調 2.5Y 6/2 (黄灰色)

2) 旧河川

遺構(第55・58・59図)

本遺跡からは2本の河川跡が検出され、それぞれ旧河川1・2とした。

旧河川1は、調査区西半部よりほぼ調査区に沿った形で検出された。また本遺構は、下芝宮遺跡I・IIのM8・9に西側で連結するものと考えられる。他遺構との重複関係は、第2・8・9号住居址を切っており、第7・11号住居址、第1・4号土坑、第4・5・6号溝状遺構に切られ

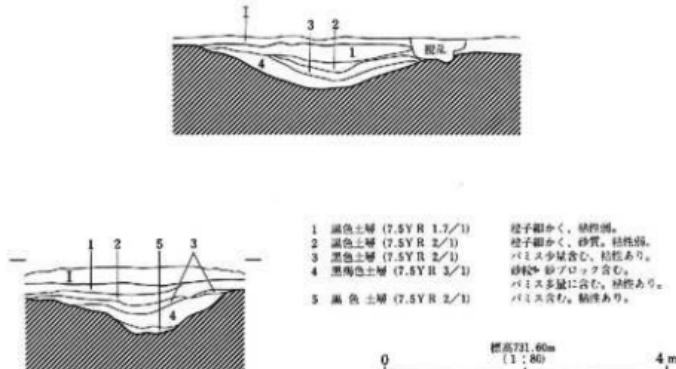


- 1 普通色土層 (7.5YR 3/4)
砂粒・0.5~2cmの大いな小石・バニス含む。
- 2 黒褐色土層 (7.5YR 4/2)
ローム粘土・ロームブロック・バニス
多量に含む。
- 3 砂層、1cmの大いな小石含む。明褐色
(7.5YR 5/6) の砂粒多量に含む。
- 4 黄色土層 (7.5YR 4/4)
砂層、粒子細かい。
- 5 深褐色土層 (7.5YR 3/1)
ローム粘土・バニス含む。
- 6 暗褐色土層 (7.5YR 3/4)
砂粒多量に含む。
- 7 暗褐色土層 (10YR 3/3)
砂層、粒子細かい。
- 8 開拓色土層 (7.5YR 6/1)
砂層。1~3cmの大いな小石多量に含む。
- 9 暗色土層 (7.5YR 4/4)
砂層、粒子細かい。
- 10 黑褐色土層 (10YR 2/2)
ローム粘土・ロームブロック・バニス含む。
- 11 暗褐色土層 (7.5YR 4/3)
砂層、粒子細かい。
- 12 明褐色土層 (7.5YR 5/6)
砂層、粒子細かい。
- 13 黑色土層 (7.5YR 2/1)
砂粒含む、粒子細かい。
- 14 黄色土層 (7.5YR 4/4)
ローム粘土・ロームブロック・バニス多量に含む。
- 15 暗褐色土層 (7.5YR 4/3)
砂層、粒子細かい。
- 16 開拓色土層 (7.5YR 6/1)
砂層。1~2cmの大いな小石多量に含む。

第58図 旧河川 1 土層断面図

る。検出長約136m、幅5.6~9.6mを測り、深さはトレンチにより確認された部分で186cmを計測する。底面は凹凸が激しく、東から西に向かってレベルを低下させている。第58図に示した土層断面により数回に亘る水の流れが想定される。

本址からは土師器・土師質土器・須恵器が出土している。



第59図 旧河川 2 土層断面図

旧河川 2 は、調査区東側より調査区を横断する形で検出された。他遺構との重複関係はない。検出長28m、幅4~9mを測り、深さは北端部と南端部のトレンチによって確認された部分でそれぞれ155cm、210cmを計測する。北から南に向かってレベルを低下させており、北端と南端の比高差は45cmを測る。

本址からの出土遺物は皆無である。

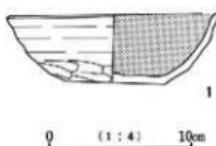
遺物（第60図、国版二十一）

旧河川 1 からは土師器・須恵器が少量出土しているのみであり、そのうち1点が図示し得たのみである。

60-1 はロクロ成形による土師器壺である。体部は内湾して立ち上がり、内面に黒色処理が施され、外面は底部および底部周縁に手持ちヘラケズリが行われる。

この他、土師器壺・壺、須恵器壺・壺・蓋が出土しているが図示し得なかった。

以上、旧河川 1 からは古墳時代後期から平安時代の様相を示す土器が出土しており、時期は確定できないが、古墳時代後期と考えられる第2・6・9号住居址を切り、平安時代後葉と考えられる第7号住居址に切られていることから、本址が流路として機能していた時期を、古墳時代後期から平安時代までの間と想定できる。



第60図 旧河川 1 出土土器実測図

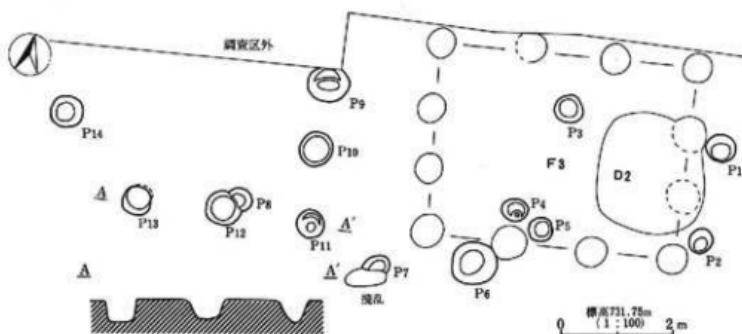
第21表 旧河川1出土土器観察表

種類	器種	法量	成形及び器形の特徴	調整	備考
60-1	土器器 坏	14.8 5.0 7.0	体部内凹して立ち上がる。	内)黒色処理。 外)ロクロヨコナデ、 底部・底部周縁手持ちヘラケズ y。	完全実測。 色調 7.5 YR 5/4 (くろい褐色)

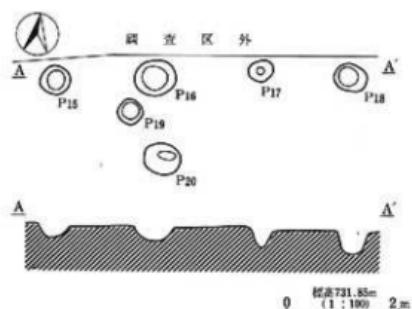
第6節 ピット群

遺構・遺物（第61・62図、図版十七）

本遺跡からは総数で20個のピットが検出され、これをピット群とした。これらのピットの分布は、調査区中央付近IIIH区内に集中しており、全体層序第IV層上面より検出された。平面形態お



第61図 ピット群実測図(1)



第62図 ピット群実測図(2)

より規模は径38~86cmの円形または椭円形を呈し、深さは最も浅いもので7cm、最も深いもので45cmを計測する。各ピットの配列は、P9~P14が掘立柱建物址となる可能性もあるが、南西隅に配される柱穴が検出されてなく、北側が調査区外であるためピット群とした。また、P15~P18の4本も直線上に並んで検出されたが、北側が調査区外となるため一応ピット群とした。

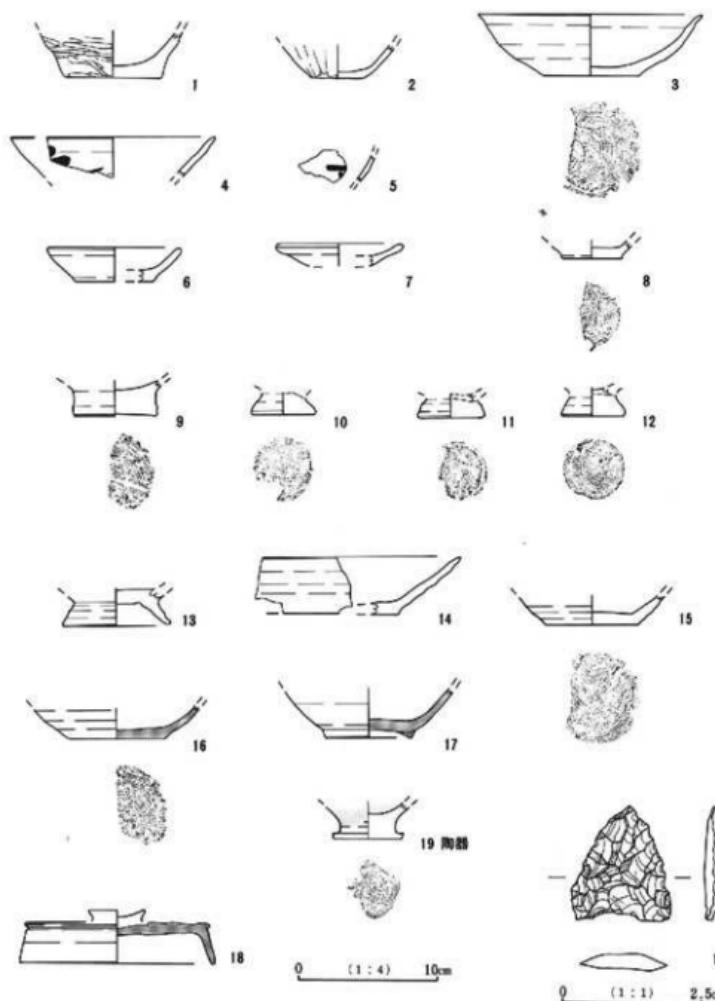
各ピットの形態及び規模等については、第22表ピット群一覧表に記した。

各ピットからの出土遺物はなく、いずれも時期・性格とも不明である。

第22表 ピット群一覧表

No	検出位置	形態	規模	深さ	覆土	備考
P 1	III Hえ-3	円形	51×52	31	黒色土層(7.5Y R2/1) 黒褐色土層(7.5Y R2/2)	
P 2	III Hえ-4	椭円形	40×49	45	黒褐色土層(7.5Y R2/2) 褐色土層(7.5Y R4/6)	
P 3	III Hえ-3	円形	50×52	17	黒褐色土層(7.5Y R2/2) 黒褐色土層(7.5Y R3/2)	
P 4	III Hえ-4	円形	41×44	40	暗褐色土層(7.5Y R3/3)	
P 5	III Hえ-4	円形	43×44	16	黒褐色土層(7.5Y R2/2) 黒褐色土層(7.5Y R3/2)	
P 6	III Hえ-4	椭円形	76×86	22	暗褐色土層(7.5Y R3/4)	
P 7	III Hお-4	(椭円形)	48×-	7	褐色土層(7.5Y R4/3)	機械に切られる
P 8	III Hか-4	椭円形	42×48	11	暗褐色土層(7.5Y R3/4)	P12を切る
P 9	III Hか-3	(円形)	74×-	42	暗褐色土層(7.5Y R3/3) 褐色土層(7.5Y R4/4)	縦立柱建物址?
P 10	III Hか-4	円形	58×62	23	暗褐色土層(7.5Y R3/4) 褐色土層(7.5Y R4/4)	縦立柱建物址?
P 11	III Hか-4	円形	48×50	39	暗褐色土層(7.5Y R3/4) 褐色土層(7.5Y R4/3)	縦立柱建物址?
P 12	III Hか-4	椭円形	58×65	28	黒褐色土層(7.5Y R2/2) 褐色土層(7.5Y R4/4)	P 8 に切られる 縦立柱建物址?
P 13	III Hか-4	円形	51×53	40	黒褐色土層(7.5Y R2/2)	縦立柱建物址?
P 14	III Hき-4	円形	58×58	37	暗褐色土層(7.5Y R2/3)	縦立柱建物址?
P 15	III Hう-3	円形	54×54	28	黒角土層(7.5Y R2/2) 暗褐色土層(7.5Y R3/3)	縦立柱建物址?
P 16	III Hう-3	椭円形	65×76	31	黒色土層(7.5Y R2/1) 暗褐色土層(7.5Y R2/3)	縦立柱建物址?
P 17	III Hい-3	椭円形	38×45	39	黒褐色土層(7.5Y R2/2) 褐色土層(7.5Y R4/3)	縦立柱建物址?
P 18	III Hい-3	椭円形	50×60	44	黑色土層(7.5Y R2/1) 黒褐色土層(7.5Y R2/2)	縦立柱建物址?
P 19	III Hう-3	円形	45×48	32	黑色土層(7.5Y R2/1) 褐色土層(7.5Y R4/3) 褐色土層(7.5Y R4/6)	
P 20	III Hう-3	椭円形	56×67	38	黒褐色土層(7.5Y R2/2) 褐色土層(7.5Y R4/3)	

第7節 グリッド出土遺物 (第63・64図、図版二十一・二十二)



第63図 グリッド出土土器実測図

第64図 グリッド出土石器実測図

0 (1 : 1) 2.5cm

0 (1 : 4) 10cm

第23表 グリッド出土土器観察表

検査番号	器種	法量	或形及び器形の特徴	調整	備考
63-1	土師器 甕	— <3.3 6.8		内) ハラミガキ。 外) ハラミガキ。	回転実測。 色調 5 YR 6/6 (橙色)
63-2	土師器 甕	— <2.4 3.8		内) ハラケズリ。 外) ナヂ。	回転実測。 色調 5 YR 5/3 (にぶい赤褐色)
63-3	土師器 甕	(15.8) 4.4 (6.7)	体部内溝して開き、端部でわざ かに外反する。 底部回転糸切り。	内外面 ロクロコナデ。	回転実測。 色調 5 YR 6/6 (橙色)
63-4	土師器 甕	(14.6) (2.9) —	体部直線的に開く。	内外面 ロクロコナデ。	回転実測。口縁部1/4残存。 色調 2.5 YR 6/3 (にぶい黄色) 墨書き土器。
63-5	土師器 甕	— <1.7 —		内外面 ロクロコナデ。	破片実測。 色調 7.5 YR 8/3 (灰黄褐色) 墨書き土器。
63-6	土師質 小 甕	(9.4) 2.5 (5.4)	底部回転糸切り。	内外面 ロクロコナデ。	回転実測。口縁部1/6残存。 色調 7.5 YR 7/4 (にぶい橙色)
63-7	土師質 小 甕	(8.6) (1.6) —		内外面 ロクロコナデ。	回転実測。口縁部1/4残存。 色調 7.5 YR 6/4 (にぶい橙色)
63-8	土師質 小 甕	— <1.3 (4.2)	底部回転糸切り。	内外面 ロクロコナデ。	回転実測。 色調 7.5 YR 6/4 (にぶい橙色)
63-9	土師質 小 甕	— (3.0) (5.8)	柱状高台。 底部回転糸切り。	内外面 ロクロコナデ。	回転実測。 色調 5 YR 7/6 (橙色)
63-10	土師質 小 甕	— (1.6) 4.5	柱状高台。 底部回転糸切り。	内外面 ロクロコナデ。	完全実測。 色調 7.5 YR 6/4 (にぶい橙色)
63-11	土師質 小 甕	— (1.8) (4.4)	柱状高台。 底部回転糸切り。	内外面 ロクロコナデ。	回転実測。 色調 5 YR 6/6 (橙色)
63-12	土師質 小 甕	— (2.0) 4.4	柱状高台。 底部回転糸切り。	内外面 ロクロコナデ。	完全実測。 色調 5 YR 6/4 (にぶい橙色)
63-13	土師質 甕	— (2.5) (7.4)	貼り付け高台。	内外面 ロクロコナデ。	回転実測。 色調 7.5 YR 6/6 (橙色)
63-14	土師質 甕	— 4.1	体部直線的に大きく開く。 底部回転糸切り。	内外面 ロクロコナデ。	破片実測。 色調 7.5 YR 7/6 (橙色)
63-15	土師質 甕	— (2.0) 6.6	底部回転糸切り。	内外面 ロクロコナデ。	回転実測。 色調 10 YR 7/4 (にぶい黄褐色)
63-16	須恵器 甕	— (2.1) (6.8)	底部回転糸切り。	内外面 ロクロコナデ。	回転実測。 色調 5 YR 1/1 (灰褐色)
63-17	須恵器 高台付 甕	— (3.3) (6.2)	底盤回転糸切りの後、偏平な高 台貼り付け。	内外面 ロクロコナデ。	回転実測。 色調 10 YR 7/1 (灰白色)
63-18	須恵器 甕	— (3.0) (13.8)	つまみ部欠損。 天井部は偏平で、口縁部は直線的 にわざかに開く。	内外面 ロクロコナデ。	回転実測。 色調 2.5 YR 7/2 (灰褐色)
63-19	陶 器 ロウタ	— (2.6) 4.8	底盤回転糸切り。	内外面 ロクロコナデ。	回転実測。 色調 2.5 YR 8/2(灰白色) 7.5 YR 2/2(黒褐色)

第V章 調査のまとめ

今回、南上中原・南下中原遺跡において検出された遺構・遺物の詳細は前述した。検出された遺構は、竪穴住居址11棟、竪穴遺構3棟、掘立柱建物址3棟、土坑16基、溝状遺構6条、旧河川2条、ピット群である。

一方、出土遺物には、縄文土器、土師器、土師質土器、須恵器、灰釉陶器、白磁、石器、鉄製品がある。

以下、今回の調査において検出された遺構・遺物を中心としてまとめを行っていきたい。

第1節 遺構

本調査は、道路の新設工事に先立つものであり、幅が約25mと限られていることと、調査区の西側に道路があるため制約された範囲での調査であった。そのうえ耕作等により床面まで擾乱を受けたり、溝等によって破壊されているものが多く、検出された遺構のうち全プランを確認し得たものは極くわずかである。

古墳時代後期の住居址は6棟検出されたが、全プランを確認し得たのは第10号住居址のみである。東西434cm、南北390cmを測り、やや東西に長いもののほぼ方形を呈する。カマドは4棟から検出され、いずれも北壁中央に位置する。第6・10号住居址のカマドの袖部は地山を削り出して形成され、袖部先端に礎を埋設し、さらに粘土を被覆して構築される。主柱穴は4本で、第2・6・10号住居址からは、カマドの右脇に貯蔵穴と考えられるピットが検出されている。

平安時代の住居址は5棟検出され、平安時代中葉（第3・7号住居址）、平安時代後葉（第4・5号住居址）、平安時代終末期（第11号住居址）の三時期に大別される。カマドは第3・4・5号住居址から検出され、平安時代中葉と考えられる第3号住居址は北壁中央、平安時代後葉と考えられる第4・5号住居址は東南隅に位置する。また、第4・5号住居址はいずれも南北に長い隅丸長方形を呈する。平安時代終末期と考えられる第11号住居址は、南半部が調査区外であるため全体の形態は不明であるが、東西長約10mを測る大型の住居址である。また、第11号住居址とはほぼ同時期と思われる第1～3号竪穴遺構は、東西あるいは南北に長い長方形を呈し、カマド・柱穴等の付属施設は検出されなかった。

最後に、本遺跡における住居址の分布であるが、調査区中央付近と西側にある程度のまとまりを見ることができ、調査区東側からは住居址は検出されていない。また、平安時代後葉～終末期の住居址は調査区中央付近に限定されるが、限られた範囲での調査であるため明確ではない。

第2節 遺 物

南上中原・南下中原遺跡の平安時代の土器について

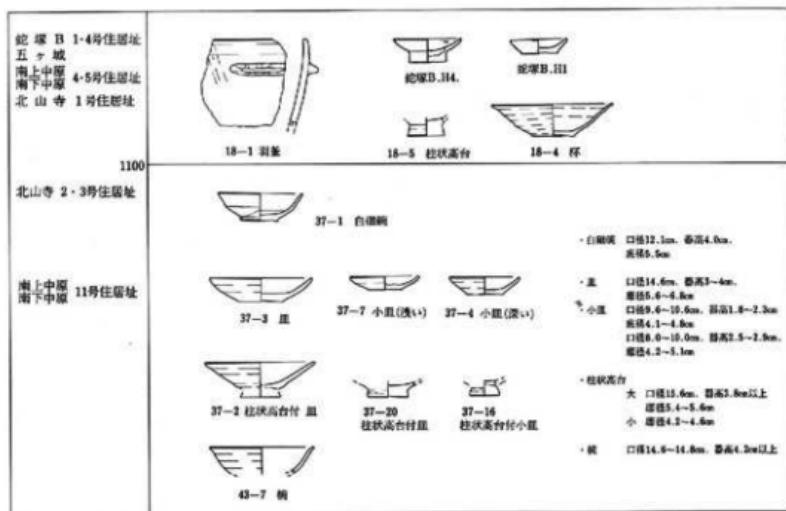
本遺跡の平安時代の土器は、5棟の竪穴住居址と2基の竪穴遺構から出土している。近年、平安時代中葉以降の土器様相が明らかになりつつあり、細分されている。^{註1}ここでは佐久市内の栗毛坂遺跡群において「奈良時代以降の遺物・時期」で行われている寺崎氏の土器段階に従ってみたい。

第3号住居址は、「コ」の字形の武藏型甕、小型甕、内面黒色処理された椀、ロクロ調整された杯と高台の付く皿、軟質須恵杯と碗がある。ロクロ調整のみの杯の存在から「栗毛坂9段階」(10世紀第I四半期)に相当するものと思われる。第7号住居址も点数は少ないが同期のものであろう。

第4・5号住居址は羽釜、甕、杯類を伴うものである。第4号住居址は羽釜、皿に近いロクロ調整のみの杯、柱状高台が出土している。羽釜は比較的厚手で鉢は口縁に近い方に付き、口縁も端部にかけて内湾している。また、鉢が全周せずに切れる羽釜があるが、これは「栗毛坂14段階」(11世紀第III四半期)から認められるとしている。柱状高台や皿に近いロクロ調整のみの杯は、もう少し後出するものかも知れない。第5号住居址は羽釜、甕、椀、灰釉陶器皿が出土している。この甕は口縁を短かく外反させるだけで、調整も口縁部に指頭圧痕を残してナゲ調整されるものである。羽釜は比較的厚手で、ロクロ調整のみの小碗などから「栗毛坂16段階」(11世紀第IV四半期)位にならうかと思われる。土器量の減少、器種の減少等からみても11世紀後半以降の資料といえる。

第11号住居址からは白磁碗、皿、小皿、柱状高台の付く皿と小皿が出土している。白磁碗は森田・横田分類の「白磁碗IV類」12世紀前半のものである。^{註2}小皿・皿類はロクロ調整され、体部は内湾気味に開く。丁寧なつくりではない。柱状高台の付く皿は、全体の器形の明かなものはないが37-2のように直線的にひらくものと思われる。高台部と体部は別々に切り離された後、接合されている。第1・2号竪穴遺構からも同様な土器が出土している。第2号竪穴遺構からはロクロ調整で薄手の椀形土器の体部片もあり、このセットに加わる。

第11号住居址と2基の竪穴遺構の土器は、今のところ佐久地域では少例の土器群である。蛇塚B遺跡H1・H4号住居址、北山寺遺跡の第2・3号住居址があるが、やや後出する可能性もあると推測するが、これから資料の集積を待ちたい。



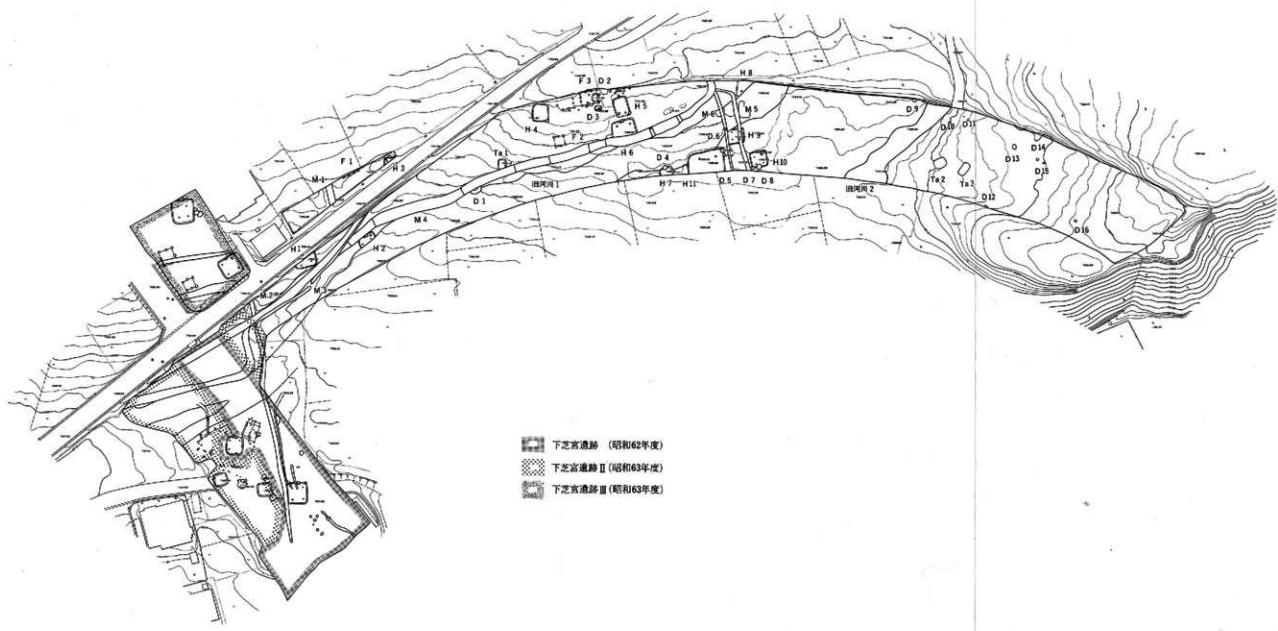
第65図 南上中原・南下中原遺跡 平安時代後葉の土器セット図 (1:8)

(註1)

- 提 薩 1989 「根岸遺跡における土器様相」『根岸遺跡』
- 原 明芳 1989 「第7章第2節吉田川西遺跡における食器の変容」
『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書3 - 塩尻市内その2 - 吉田川西遺跡』
- 望月 映 1990 「第3章第1節古代の懸穴」
『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4 - 松本市内その1 - 細論編』
- 小平和夫 1990 「第3章第5節古代の土器」
『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4 - 松本市内その1 - 細論編』
- 寺崎俊郎 1991 「第3章第18節東毛板遺跡群1~3・第21節北山寺遺跡群4」
『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書2 - 佐久市内その2 - 』

(註2)

原 明芳氏のご教示による。



第66図 南上中原・南下中原道路全体図(1:1000)

引用参考文献

- 佐久市教育委員会 1980 『蛇塚』
1988 『下芝宮遺跡』
1989 『下芝宮遺跡II・III』
1989 『前田遺跡』(第I・II・III次)
佐久市教育委員会・佐久埋蔵文化財調査センター
1987 『宮上星数 下川原・光明寺』
1989 『南上中原・南下中原 上脇端』
1990 『星原遺跡I』
1992 『国道141号線関係遺跡』
御代田町教育委員会 1989 『根岸遺跡』
小諸市教育委員会 1981 『五ヶ城』
松本市教育委員会 1990 『松本市北東遺跡IV・V』
(財)長野県埋蔵文化財センター
1989 『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書3 -塙尻市内その2-吉田川西遺跡』
1990 『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4 -松本市内その1-経験編』
1991 『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書2 -佐久市内その2-』
桂沢 浩 1986 『凸帯付四耳壺考』『長野県考古学会誌51』



1. 南上中東・南下中東道路付近航空写真（株式会社協同測量社撮影）



1. 南上中原・南下中原道路、上醍醐道路、下芝宮道路航空写真（株式会社協同測量社撮影）



1. 南上中原・南下中原遺跡、上聖蹟遺跡航空写真（中央航業株式会社撮影）



2. 南上中原・南下中原遺跡航空写真（中央航業株式会社撮影）



1. 第1地区全景(東方より)



2. 第2地区全景(西方より)



1. 第1号住居址（東方より）



2. 第1号住居址出土状況（東方より）



1. 第2号住居址（南方より）



2. 第3号住居址（西方より）



1. 第2号住居址カマド（南方より）



2. 第3号住居址カマド（南方より）



3. 第3号住居址カマド掘り方（南方より）



4. 第3号住居址遺物出土状況（南方より）



5. 第4号住居址（南方より）

図版
八



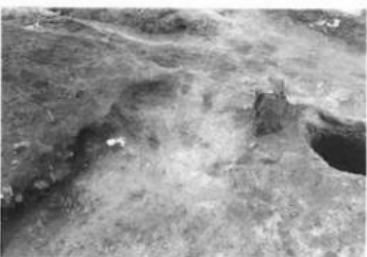
1. 第4号住居址カマド（北方より）



2. 第4号住居址遺物出土状況（北方より）



3. 第5号住居址（南方より）



4. 第5号住居址カマド（北方より）



5. 第5号住居址遺物出土状況（東方より）



1. 第6号住居址（南方より）



2. 第6号住居址カマド（南方より）



3. 第6号住居址カマド（南方より）



4. 第6号住居址カマド掘り方（南方より）



5. 第6号住居址掘り方（南方より）



1. 第7号住居址（北方より）



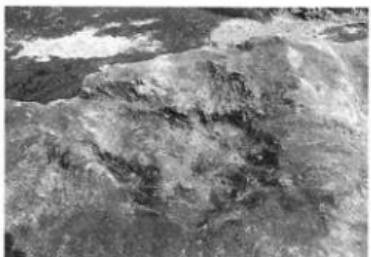
2. 第8号住居址（南方より）



1. 第9号住居址（南方より）



2. 第10号住居址（南方より）



1. 第9号住居址カマド（南方より）



2. 第10号住居址カマド（南方より）



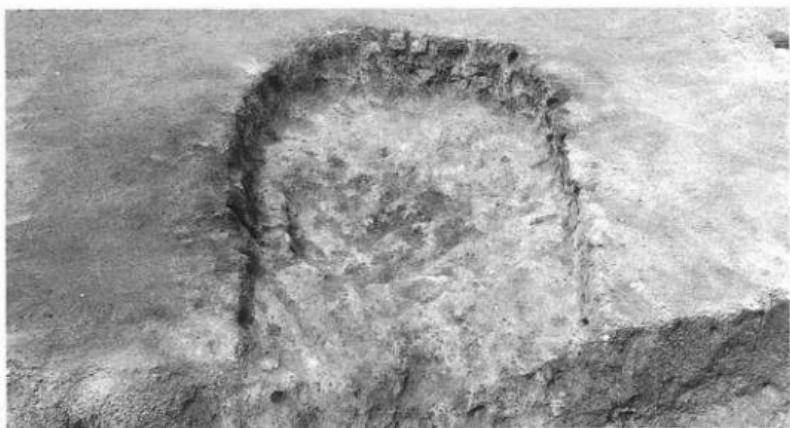
3. 第10号住居址 カマド掘り方（南方より）



4. 第10号住居址遺物出土状況（北方より）



5. 第11号住居址（北方より）



1. 第1号竖穴道構（南方より）



2. 第2号竖穴道構（西方より）



3. 第3号竖穴道構（南方より）



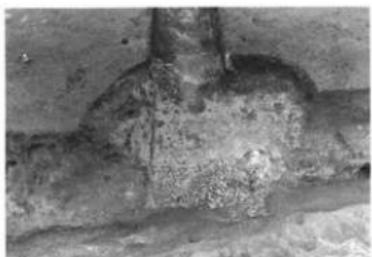
1. 第1号掘立柱建物址（西方より）



2. 第2号掘立柱建物址（西方より）



1. 第3号獨立柱建物社（南方より）



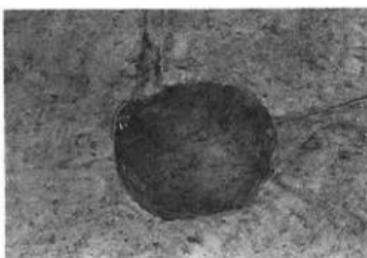
2. 第1号土坑（北方より）



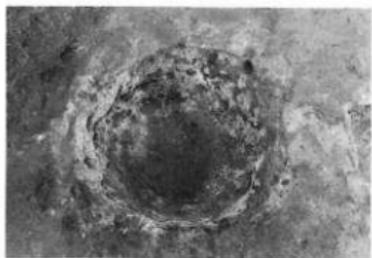
3. 第2号土坑（南方より）



4. 第3号土坑（南方より）



5. 第4号土坑（北方より）



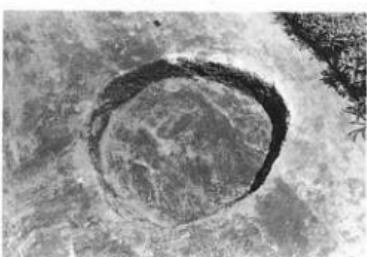
1. 第5号土坑（西方より）



2. 第6号土坑（西方より）



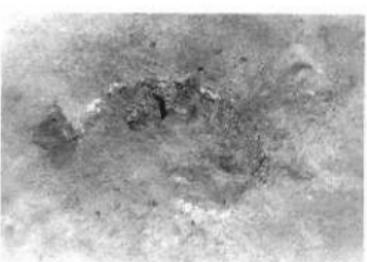
3. 第7号土坑（西方より）



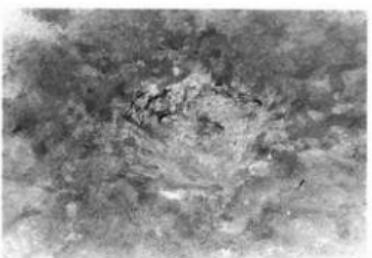
4. 第8号土坑（西方より）



5. 第9号土坑（南方より）



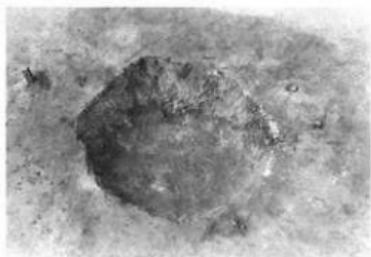
6. 第10号土坑（南方より）



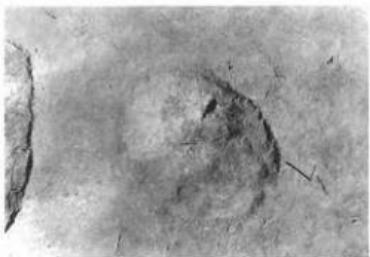
7. 第11号土坑（南方より）



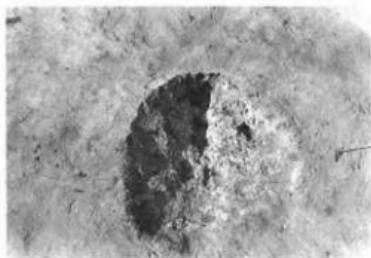
8. 第12号土坑（北方より）



1. 第13号土坑（南方より）



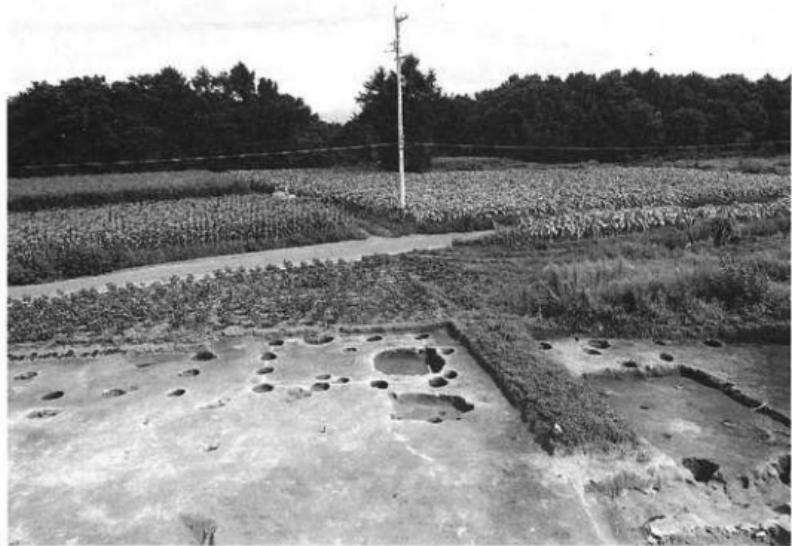
2. 第14号土坑（南方より）



3. 第15号土坑（南方より）



4. 第16号土坑（南方より）



5. ピット群（南方より）

圖版十八



1. 第1号住居址出土土器



2. 第3号住居址出土土器



3. 第3号住居址出土土器



4. 第3号住居址出土土器



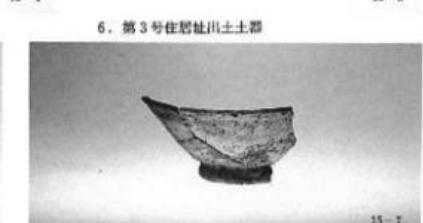
5. 第3号住居址出土土器



6. 第3号住居址出土土器



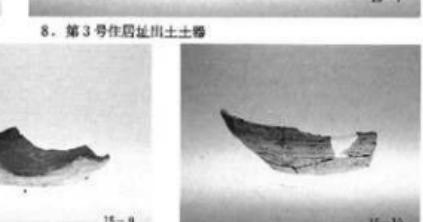
7. 第3号住居址出土土器



8. 第3号住居址出土土器



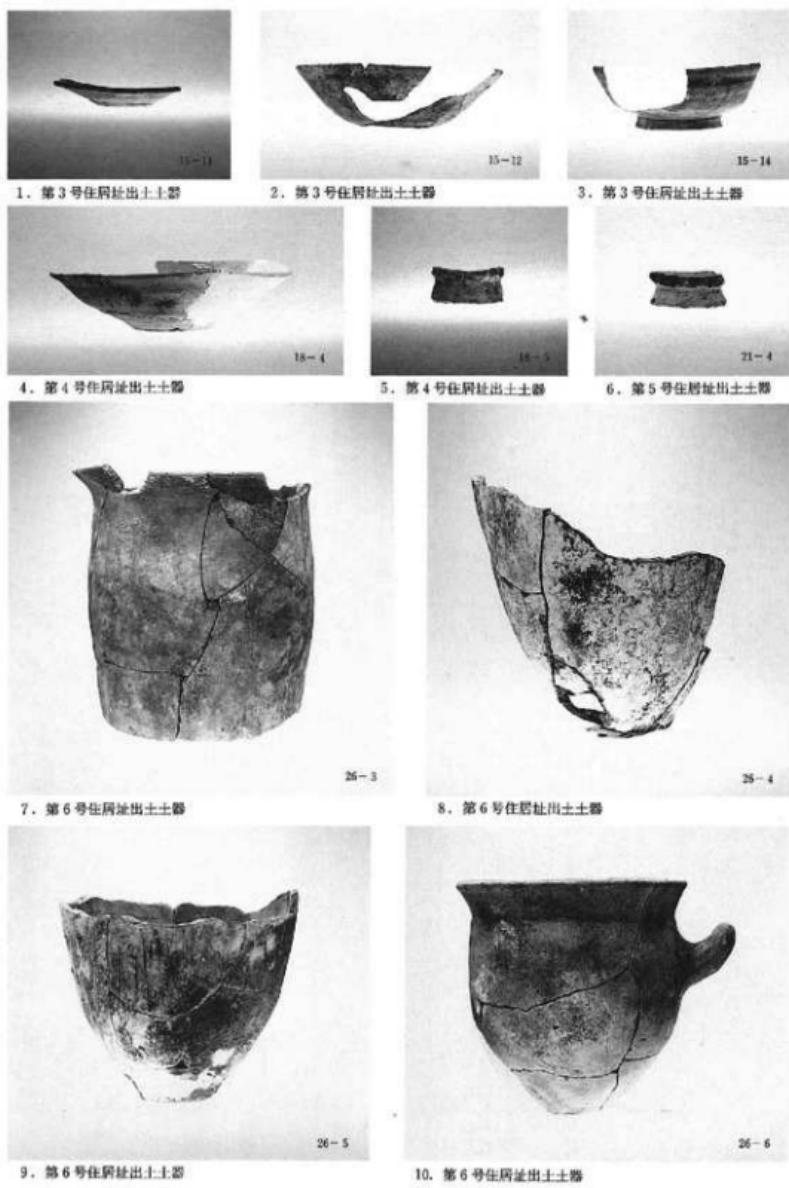
9. 第3号住居址出土土器



10. 第3号住居址出土土器



11. 第3号住居址出土土器





1. 第6号住居址出土土器



2. 第6号住居址出土土器



3. 第7号住居址出土土器



4. 第9号住居址出土土器



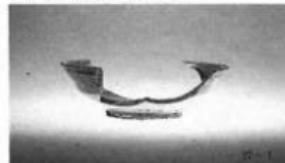
5. 第9号住居址出土土器



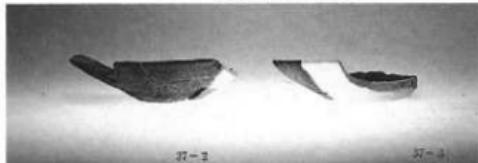
6. 第10号住居址出土土器



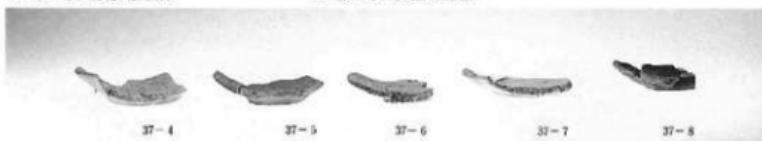
7. 第10号住居址出土土器



8. 第11号住居址出土土器



9. 第11号住居址出土土器



10. 第11号住居址出土土器



11. 第11号住居址出土土器



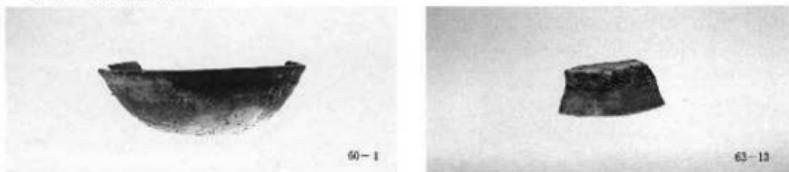
1. 第1号竖穴遺構出土土器



2. 第2号竖穴遺構出土土器

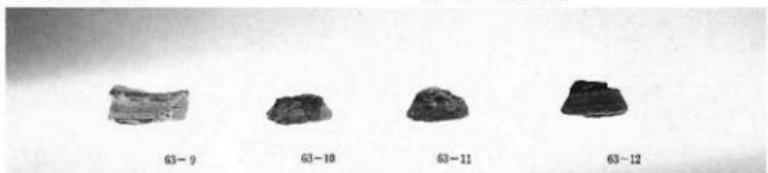


3. 第4号貝状遺構出土土器

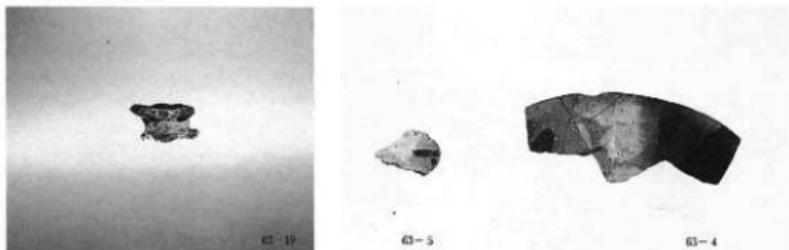


4. 田河川1出土土器

5. グリッド出土土器

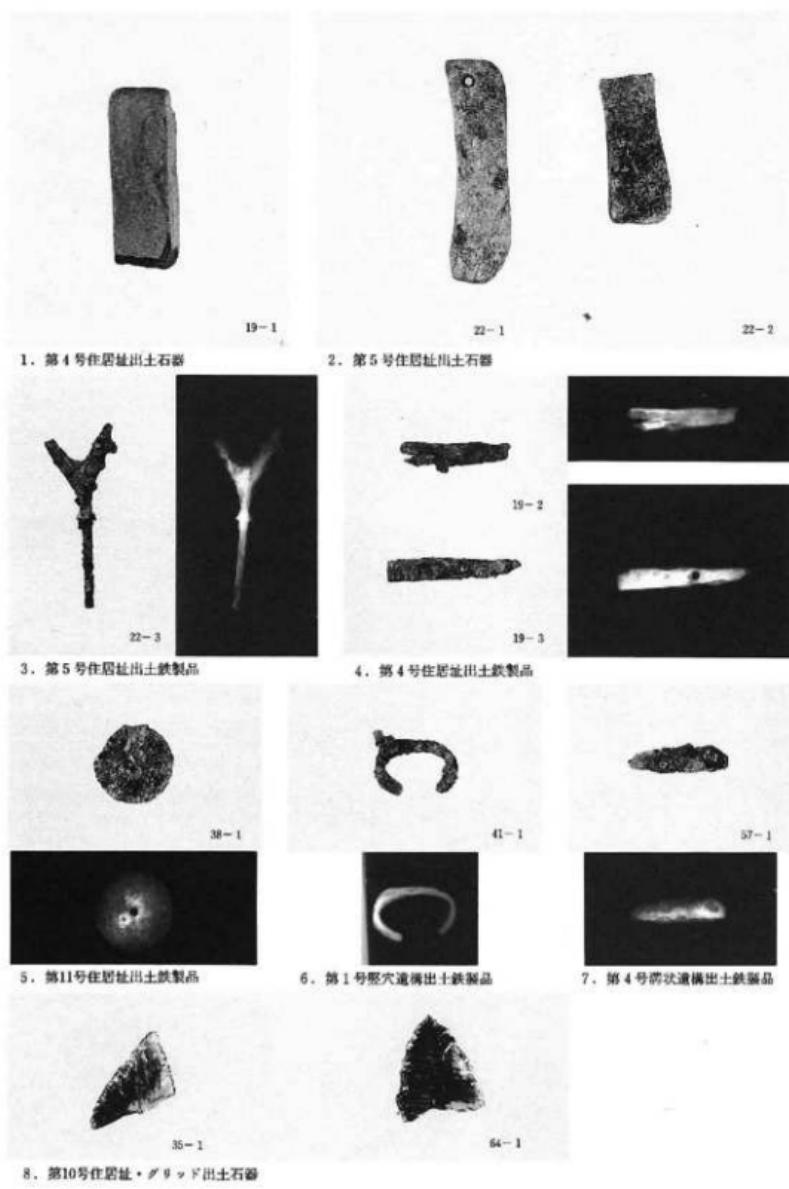


6. グリッド出土土器



7. グリッド出土陶器

8. グリッド出土墨書き土器



- 佐久市埋蔵文化財調査報告書 第1集 「金井城跡」
佐久市埋蔵文化財調査報告書 第2集 「市内遺跡発掘調査報告書1990」
佐久市埋蔵文化財調査報告書 第3集 「石附窯址群III」
佐久市埋蔵文化財調査報告書 第4集 「大ふけ遺跡」
佐久市埋蔵文化財調査報告書 第5集 「立科F遺跡」
佐久市埋蔵文化財調査報告書 第6集 「上曾根遺跡」
佐久市埋蔵文化財調査報告書 第7集 「三貫畠遺跡」
佐久市埋蔵文化財調査報告書 第8集 「瀬の下遺跡」
佐久市埋蔵文化財調査報告書 第9集 「国道141号線関係道路」
佐久市埋蔵文化財調査報告書 第10集 「堀原遺跡II」
佐久市埋蔵文化財調査報告書 第11集 「赤塚城外遺跡」
佐久市埋蔵文化財調査報告書 第12集 「若宮遺跡II」
佐久市埋蔵文化財調査報告書 第13集 「上高山遺跡」
佐久市埋蔵文化財調査報告書 第14集 「栗毛坂遺跡」
佐久市埋蔵文化財調査報告書 第15集 「野馬久保遺跡」
佐久市埋蔵文化財調査報告書 第16集 「石並城跡」
佐久市埋蔵文化財調査報告書 第17集 「市内遺跡発掘調査報告書1991」(1月~3月)
佐久市埋蔵文化財調査報告書 第18集 「西曾根遺跡」
佐久市埋蔵文化財調査報告書 第19集 「上芝宮遺跡」
佐久市埋蔵文化財調査報告書 第20集 「下芝宮遺跡III」
佐久市埋蔵文化財調査報告書 第21集 「金井城跡II」
佐久市埋蔵文化財調査報告書 第22集 「市内遺跡発掘調査報告書1991」

佐久市埋蔵文化財調査報告書 第23集

芝宮遺跡群 南上中原・南下中原遺跡

長野県佐久市長土呂南上中原・南下中原遺跡発掘調査報告書

1993年3月

編集・発行 佐久市教育委員会

印 刷 所 株式会社佐久印刷所
